
礎-Cornerstone-

楼蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

礎—Cornerstone—

【Nコード】

N8143Y

【作者名】

楼蘭

【あらすじ】

組織との攻防は平行線を保った儘工藤新一が幼児化して一年が経過、初冬の毛利探偵事務所に予想外のニュースが届く。激しく動揺し混乱するコナンに迫る黒の組織と新たな試練が立ち開かる。

P r o l o g u e (前書き)

新連載です。

コナン・新一が痛い目にあう話は良く見掛けていたので……今回は大物さんに痛い目にあって貰いました。

前作以来あまり体調が良くなって最近は思う様に執筆出来ません。仕事も多忙期に入る為に、毎日の更新が出来ない可能性があります。

可能な限り更新したいと思いますので、楽しんで頂けたら幸いです
m (m

P r o l o g u e

……まさか、こんな日が来るとは夢にも思わなかった

ずば抜けた推理力と鋭い観察眼洞察力、豊富な知識を兼ね備えた

……実在する最高の探偵

それと同時に……

数多くのヒット作を生み出す

世界屈指の推理小説家

堅固で厚く高い壁

……俺の親父・工藤優作

何時か、越えてやる……

……そう思ってよ

必死に追い付こうと……

なのに……こんな突然

未だ……早えよ

こんくれえの事……

……親父なら大した事ねえだろ？

何時ものさ……

……くだらねえ芝居なんだろ？

俺を驚かしてんだよな？

俺は未だ……越えてねえ

大丈夫だよな……

——
父さん

遭遇

江戸川コナンが米花町へ現れて一年が経過

仮初めの姿にも慣れたある日、衝撃的なニュースが日本中は疎か世界中を駆け巡ろうとしていた

秋も深まり東京に冬が訪れ様とする頃、米花町の毛利探偵事務所へ秋の肌寒さを吹き飛ばす勢いで訪れる二人がいた

「邪魔するで、工藤」

「工藤君やのうてコナン君や……、コナン君。毎回毎回、工藤工藤ってあんた頭おかしいんちゃう？」

「言い間違えただけやろ、呆け」

「その言い間違えが毎回やないの!!」

「喧しいわ、呆け!!」

毎度の如く、アポなしで訪れる少々煩い服部平次と遠山和葉は、来る早々夫婦漫才を繰り広げた

「つたく、またうるせえのが来やがった？」

ラジオで競馬中継を聞きながら競馬新聞を読んでいた小五郎と、ソファーに寝転んで堂々と推理小説を読んでいたコナンは、騒々しい二人に呆れた視線を投げていた

（またアポなしで来やがって？）

「和葉ちゃん・服部君!!」

そんな男二人の態度に構わず、大阪の友人和葉の来訪に大喜びの蘭だった

「久し振りやなく、蘭ちゃん」

「うん!!」

手を取り合って再会を喜ぶ二人の横では、平次が言い難そうに、親友の頭を撫でていた

「工藤……やのうしてコナン君も元気そうやな」

「うん……平次兄ちゃんもね」

（まったく、いい加減に慣れろっての？）

（済まん済まん）

コナンの目線に合わせてしゃがみ込み、周囲には聞こえない様に囁き合う平次とコナンの光景は、端から見れば仲の良い兄弟そのものだった

「ほんま仲ええね」

「うん、まるで本当の兄弟みたい」

コナンの正体を知らない二人は、何を話してるのか知る由もない……

（まったく、電話位しろっての？）

（折角、遙々大阪から会いに来たっのにつれないの〜）

（おめえは毎回だろうか？）

（まあそう言うなって、工藤）

見た目は小学生の親友を宥める平次は嬉しそうにしていた

（で……何しに来たんだよ？）

（何しにとってご挨拶なの〜）

（お前に会いに来たに決まっとなるやろ〜？）

二人がぼそぼそと話していると、コナンがテーブルに置いていた推理小説に気付いた和葉が声を掛けて来た

「へえ〜コナン君、推理小説読んどるんやね」

「う……うん？」

突然和葉が近付いて来たコナンは慌てて子供らしい演技を始めた

「コナン君ったら、日本だけじゃなく海外の推理小説も読んでるのよ」

「コナン君、外国語話せるん？」

「うん、もうぺらぺら」

「ねえ、コナン君」

「うん」

蘭が同意を求める様に笑顔を向けると、コナンは大きく頷いた

「けっ、ガキのくせに！！」

「お父さん、自分が話せないからってコナン君に当たらないでよね！！」

「うるせえ!!」

英語が話せない小五郎は不貞腐れて吐き捨てるが……

「……って良い所でニュースかよ」

突如、競馬中継が中断されて、臨時ニュースが始まった

「臨時ニュースって何や？」

「ロサンゼルス発成田行きの飛行機が成田で着陸に失敗して落ちたんだとよ?」

何気無く聞いた平次だったが、両親が海外にいるコナンは反射的にテレビを付けた

（ロサンゼルス発の飛行機が落ちた!!）

「平次兄ちゃん退いて!!」

「おわっ？」

平次を押し退けてテレビの向きを変えたコナンは、素早くテレビを付けてチャンネルをニュースへと変えた

「コナン君、大丈夫よ？」

「何、どないしたん？」

「コナン君のお父さんとお母さん、仕事で海外にいるからコナン君ったら飛行機事故に凄く敏感なの？」

コナンの突然の行動に驚いた平次と和葉だったが、蘭の言葉に胸を痛めた

「そうやったん……」

（工藤……、心配なんやな）

飛行機墜落事故のニュースに釘付けになるコナンは、ただアナウンサーの言葉に聞き入っていた

「着陸に失敗して爆発炎上する機内は未だ火の手が衰えず、消防による懸命な消火活動が行われていますが、救助された乗客の皆さんの安否は判っていません」

「火元は右翼側のエンジンと見られており、爆発の衝撃で多数の負傷者が出た模様です」

凄惨な事故現場の映像が映し出され、コナンは元より蘭や平次達全員がニュースに釘付けになった

（父さん……母さん……）

固唾を飲んで見守るコナン

そんなコナンから平次は片時も目を離さなかった

（工藤……？）

（まさか、これに乗っとるんか？）

「こりゃひでえ」

「あんまり怪我した人出ないと良いね」

「せやね……、助かるってえけど」

ニュースに胸を痛めはすれども、まるで他人事の様に言い放つ小五郎と蘭・和葉に、平次は内心眉を顰めた

（工藤がこないに心配しとるって言うのに、こいつ等は他人事やな……）

仮に、万が一の事態になれば、コナンが飛び出す事は容易に想像が付いた平次は、邪魔な荷物を置いて財布をポケットに押し込む

（もしもん時は……途中であったレンタカー会社でバイクを借りて飛ばす）

時間が経つにつれて凄惨な事故現場が次第に明らかになり、何時もと違ってコナンの不安は大きくなっていった

（父さん……、乗ってねえよな？）

(LAにいるよな、母さん)

暫くの間は事故現場を生中継が報じられたが、乗客名簿が手に入ると氏名を読み上げ始めた

「「搬送された病院名と負傷された方々の氏名です……」」

近隣の病院に搬送された人々の氏名が読み上げられ始めると、コナンは食い入る様に一覧画面を見つめる

やがて五件目の病院名が読み上げられると、そこには工藤優作と工藤有希子の名前があった……

「「成田救急病院に搬送された方々です……、ジョージ・スミスさん工藤優作さん工藤有希子さん……」」

「———」

「嘘？」

「何てこった……」

小五郎や蘭・和葉が茫然と立ち竦んだ瞬間、コナンと平次は毛利探偵事務所を飛び出していった

（父さん！！ 母さん！！）

「コナン君！！」

「あ……平次！！」

「蘭、俺はレンタカーを借りて来るから英理に知らせろ！！」

「解った？」

衝動（前書き）

早速のお気に入り登録&評価して頂いててびっくりしました？
本当に有り難う御座いますm（　）m

衝動

優作と有希子の名前を見付けて毛利探偵事務所を飛び出したコナンは、階段を駆け下りて成田方面へ駆け出した

（父さん……母さん!!）

最早、成田救急病院へ行く事しか頭がないコナンを平次が導く

「こっちや、工藤!!」

親友・平次の声に振り向くと、逆方向を指差しながら駆け出していく平次の姿が目飛び込んだ

「バイクで飛ばしたるさかい!!」

（服部……）

反射的に平次の後を追って駆け出すコナンは激しく動揺を来していた

普段の自信に満ちた表情や仕草は鳴りを潜め、不安に駆られた幼子そのものだった

「バイク一台貸してくれ!!」

「は……はい？」

レンタカー会社でバイクを借り素早く手続きを終えると平次は、コナンを乗せて成田へ駆け抜けた

「あ……おい、おめえ等!!」

「先に行くで!!」

途中、小五郎とすれ違うものの構わず駆け抜け、コナンは平次にしがみ付きながらひたすらに祈り続ける

（無事でいてくれ……父さん母さん!!）

しがみつく親友の小さな紅葉の手を平次は肌で感じていた

（工藤……）

案の定、空港に近付くにつれて渋滞が発生しており、平次は巧みに車の間をぬって成田救急病院へ到着した

——キキキ！！

タイヤを軋ませて急停止するとコナンはバイクを飛び降りて病院内へ駆け出す

（父さん？ 母さん？）

「ちよい待て、工藤！！」

病院内は搬送された急患の処置でごった返しており、看護師達は慌ただしく行き来している

そんな病院の受付ロビーへ直ぐ駆けよったコナンは受付の看護師へ優作と有希子の安否を確認した

「あの？ 父さんと母さんは？」

「坊やお父さんとお母さん？」

酷く動揺しているコナンの言葉は幼子そのものになって仕舞い、すかさず平次がフォローに入る

「工藤優作はんと工藤有希子はんの容態はどうなんや？」

少し遅れて受付へ駆け寄ると、混乱しているコナンに代わって冷静に情報を聞き出した

「工藤優作さん有希子さんご夫妻ね、奥様の有希子さんはご主人の優作さんが庇われた為か比較的軽傷で、412号室に入られたわ」

「ご主人の優作さんは爆発の衝撃で負傷されてて現在第二手術室で手術中よ。真っ直ぐ行って突き当たりが第二手術室で412号室は四階の東側にあるわ」

「有り難う？」

「おおきにー!!」

看護師にお礼を言うとコナンは一目散に駆け出して行った

一先ず、一番近い第二手術室に到着したコナンと平次は点灯したランプを見て拳を握り込んだ

「……父さん」

「未だ手術中の様やな……」

「ああ……」

不安そうな眼差しで手術室の扉を見つめるコナンの思考は、全くと言っていい程働いていなかった

自身の礎を揺るがす程の事態に直面し混乱を来す親友に代わり、平次は直面した危機を打開するべく思考を掘り下げる

（さあ、これからどうするかやな）

（工藤が飛び出した事で、和葉も毛利の姉ちゃんも怪しんどる筈や……）

思案しながら手術室の扉の前に佇んでいるコナンを一瞥すると、
万人が納得する理由を模索し始める平次

（普通なら七歳の子供が居候する事は先ずあらへん、嫌や言うても
一緒に連れて行くんが普通や……それを敢えて選択せざる得なかつ
た、黒尽くめっちゅう奴等が納得する理由は……）

（無国籍・偽名・正体・実の親との関係、そして組織の存在……）

（これ等を上手く絡ませながら、尚且つ組織を欺きその存在を隠す
方法……）

（江戸川コナンが無国籍児と言う事は動かぬ事実やしのに、せやけ
どこいつロンドンに行つとるしの）

（ああもうどないせいっちゅうんじゃ？）

頭を掻きむしり知恵を絞る平次

片や何も考えられないコナン

そのコナンを問い詰めるであろう蘭達の到着は間近に迫っている

（工藤のおかんが目え覚めたら、相談する事出来るんやろけどな〜）

ここで一旦思考を中断させると平次は、手術室の扉を見上げた儘動かないコナンを促した

「おい工藤、手術は未だ掛かる様やし上に様子見に行こか？」

平次に促されて有希子の存在を思い出したコナンは、小さく頷き優作を案じながらも有希子の元へ向かう事にした

「ああ……、そうだな」

「お前のおとなら受け身取っとるやろし、心配要らへんって」

「……だと良いけどよ」

不安に駆られるコナン

そんな痛ましい姿の親友を目の当たりにした平次は、己の父親を

思い出す

（親父……、俺は幸せ者やな）

（俺の親父は基本大阪を動けへん、たまに現場に出る事はあってもこないな事は先ずあらへんからの）

（親父が危険と判断したら最後、俺は従わざるを得ない。恵まれとるな……俺は）

（親父……どないしたらええ？）

（どないしたらこいつを守れる？）

（俺に白乾児を持って行かせた親父は何か知つとる筈やけど……）

ふと思い立った平次

（あるやないか……一個だけ）

（全員が納得するだけの理由が一個だけあるやないか！！）

有希子の病室に着いた所で思案し立ち止まって動かない平次に、コナンは怪訝な顔を向けた

「どうした、服部？」

「あ……ああ、済まん」

何故考え込んでいるのか？

理由が皆目解らず怪訝な表情で自分を見上げて来るコナンへと、平次はにやりと不敵な笑みを浮かべる

「ええ、方法を思い付いたんや」

「……方法？」

「お前が飛び出した言い訳や？」

正体を隠しているにも拘わらず

つい……、飛び出して仕舞ったコナンは力なく俯いて拳を握る

思わず取って仕舞った行動が、何れ程周囲を危険に晒す事になるか、コナンは良く解っていた

だが、両親が墜落した飛行機に乗っていたと知り思わず飛び出していた

……ただ、心配だっただけ

それだけの事が闇を招き入れ様としていた……

母の願い

「わりい……つい……」

冷静さを取り戻してつい取って仕舞った行動を振り返るコナン

視線を落とし俯いて拳を握ると、平次は優しい眼差しを湛えて
明るく告げる

「かめへんって、子が親を心配するんは至極当然の事や、親が墜落
した飛行機に乗っとるって判ったら、もう心配で飛び出して当たり
前やろ？ 後は俺に任せて、お前はおとんとおかの事だけを考え
とったらええ」

冷静さを失った自分に代わり、サポートしてくれる大阪の親友の
有り難さが目に染みたコナンは、照れ臭そうにぼつりと呟いた

「Thank You……服部」

「そない気にせんと？」

「先ずは、お前のおかんの無事を確認するんが先決や」

「ああ……（母さん……）」

そうっと静かに扉を開けると、二つ並んだベッドの一つに点滴を受けている有希子が横たわっていた

何か所か包帯が巻いてあるが、然程大きな怪我はなさそうだ

（良かった……、大した事はなさそうだな）

「……母さん」

「新ちゃん……服部君」

ベッドへ近付き傍らに佇むと、優しい眼差しで息子の頭を撫でる一人の母親の姿があった

「……無事で良かった」

シーツを握り締めて顔をマットに沈めるコナンの肩は、微かに震えていた……

「ごめんね、心配掛けちゃって」

コナンが落ち着く迄暫くの間、母と子の何者も立ち入れぬ空間を妨げぬ様、平次は無言の儘沈黙し気配を殺して見守った

（恥ずかしゅうて堪らんの〜？）

（けど、ほんま無事で良かったわ）

暫くして落ち着きを取り戻したコナンは、ばつが悪そうに頬を染めてベッドから顔を上げる

「ふふ……、服部君」

「有り難う、新ちゃんを連れて来てくれたんでしょう？」

「そんなにかめへんよって？」

「ただ、こいつ飛び出しおって、江戸川夫妻を事故死した事にして養子にするとか、何か言い訳考えんと下手したら正体がばれて仕舞

うんや」

明るく振る舞う有希子のお礼に笑顔で返す平次は、当面の問題を告げて母親である有希子の判断を仰いだ

「そうね……、いつその事ロスで産んだ事にしましょ♪」

「あー!! ちよつ母さん!!」

「そらええわ♪」

「服部、てめえ迄何言ってるんだ!!」

「ええやないか」

何時もの軽い乗りで提案する、有希子の爆弾発言

当然の事ながらコナンは大反対、平次はと言うと、有希子の案に大乗り気だ

「バーロ、何考えてんだ!!」

「大丈夫よ」

「母さん、んな訳ねえだろ!!」

最悪の事態だけは避け様とするコナンは、母親の提案に異議を唱えるものの予想外の言葉が放たれた……

「以前広美にも言っちゃったし、それに私ロスで早産した事あるから問題はないと思うわ」

「え……母さん、早産してたのか？」

有希子の言葉に愕然となるが、コナンに弟か妹の記憶は全くない為驚いた表情の儘問い返す

「ええ、あの頃から日本とロスを往き来してたでしょ？ だから負担が掛かっちゃって早産したんだけど、赤ちゃんの体力がもたなかったのよ……」

「……そっか」

自分の所為で儚く逝った我が子を想い表情を曇らせる有希子

コナンと平次は有希子の心中を察して沈痛な面持ちで視線を落とした

（母さん……）

（工藤に弟か妹がおったんか……）

「……何時かきつと会えるとなえな」

「そうだな……」

少し悲しみの色に染まる病室、早産の話を聞き素直に胸を痛める心優しい若き探偵

数多くの事件に遭遇しながらもその輝きは欠片程も歪む事なく、他人の苦しみや悲しみを理解して困っている人を見ると放っては置けず、危険とは知りながら迷わず首を突っ込む心優しいコナンと平次

二人の小さな優しさに有希子の胸は、ほんのりと温かさを増した

「二人とも有り難う……」

穏やかな笑みを浮かべる有希子は一人息子である我が子の為に、
確かな盾と為り得る手段を提示した

「まあゝそんな訳でね」

「あの子はロスの病院で早産したから問題はないと思うわ。ただ、
アメリカ国籍になっちゃうけどね」

「それは構わねえけどよ……俺は、工藤新一は死んだも同然になる
んだぜ？」

自分の所為で工藤新一を消して仕舞う事を躊躇するコナン

有希子は優しく微笑んで息子へ告げる

「新ちゃんには夢く逝って仕舞った、あの子の分迄生きて欲しいの」

「確かにね、工藤新一は死んだも同然になっちゃうかも知れない。」

でもね、私はコナンちゃんの中で生きてくれたらそれで十分なの」

「新ちゃんが生きて元気で……、幸せでいる事が一番大切なの」

「蘭ちゃんは、きっと新ちゃんに……コナンちゃんに恋をするわ。そうなれば、新ちゃんがあの子達と人生をやり直しても良いと思うの」

「……新ちゃんには、あの子達と楽しい日々を過ごして欲しいの」

「……母さん」

十歳離れた小さな友人達……

元太・光彦・歩美

キャンプや海へと行く先々で、必ずと言っていい程事件に巻き込まれている少年探偵団

そんな日々は工藤新一時代には、一度足りともなかった日々でもあった

「確かにさ、あいつ等と過ごして来て楽しいけどよ……」

「今迄元の体に戻る事しか考えてなかったから、急に江戸川コナンとして生きる選択肢を言われても判らねえよ……」

「母さんの気持ちは解るけどさ……」

突然の母親の提案に困惑を隠せないコナン

危険な事はして欲しくない

母親として息子を案じる有希子の想いをくみ取り、コナンは即答はしなかった

「……少し考えさせてくんねえか、工藤新一として生きるのか……江戸川コナンとして生きるのか、直ぐには判断出来ねえ」

「勿論よ」

「貴方の一生に関わる問題だから良く考えなさい」

「わあった……」

幾分、不安を滲ませた思案する表情で有希子の傍らに佇むコナン

ふと見上げると点滴が終わろうとしていた

「あ……点滴が終わったな」

「看護師はんに知らせて来るわ、優作はんの所に行くにも車椅子が必要やろしな」

「ごめんなさいね、服部君」

「わりいな、服部」

「かめへんって」

平次が病室を後にすると、コナンは有希子のベッドへしがみ付いた……

(……父さん)

(優作……)

一縷の望み（前書き）

お気に入り登録して頂いて
本当に有り難う御座います m
〔
m

一縷の望み

一足先に駆け付けたコナン達が手術室の前で優作を案じている頃、渋滞に引っ掛かった車列の中に小五郎や蘭・英理・和葉は元より、出版業界の編集者達が優作の負傷を知って駆け付け様としていた

「ええい、くそっ？」

一台の乗用車には、上司らしき中年男性と部下らしき男が、全く動かない渋滞に苛立ちを覚えていた

「工藤先生はご無事なんでしょうか……」

「きっと奥様を庇われただろうから、怪我は負われてるだろうな」

「もし……、工藤先生が亡くなるなんて事があったら？」

「冗談じゃない、工藤先生に万が一の事があったら大変な事になる？」

飛行機墜落事故に遭遇した優作

最悪の事態を想像して仕舞った男達は、顔色を真っ青にして無事を祈った

「先生、どうか無事で……」

数十キロ連なっている渋滞の車列の中には、蘭達だけではなく、黄色いビートルも含まれていた

「全く動かんの」

「まあ、事が事だから仕方ないわね？」

（まったく、後先考えずに飛び出すなんて……もし組織が目を着けていたらどうするつもりなのよ）

（奴等に目を着けられる前に連れ戻さなきゃ……あの子達が危ない）

（有希子さん……優作君、何とか無事でいてくれると良いんじゃないの）

心配そうにハンドルを握る阿笠と幾分機嫌が悪い哀

同じ車内で対極の感情を持った二人、コナンを案じるが故の行動ではあったが、家庭の温かさを知らずに育った為に些か配慮に欠けている哀だった……

しかしながら哀が危惧した通り、工藤優作と工藤有希子が飛行機墜落事故に遭遇したと言う事態を、ジンが見逃す筈がなかった

「工藤優作と工藤有希子が飛行機事故で負傷か……」

パソコンの画面に映し出された特集番組に鋭い視線を向ける男……ジンは用心深く猜疑心が強い

そんな男がまたとないこの機会を逃す筈がなかった

「どうしやす、兄貴」

「もし、工藤新一が生きているのなら姿を表しやすぜ」

「ああ……、だろうな」

愛車ポルシェ 356Aの運転席で、煙草を燻らせるジン

テレビ・新聞・ラジオ等……、世界屈指の推理小説家工藤優作と
嘗て十九歳の若さであらゆる賞を総なめにした元女優藤峰有希子が、
不運にもこの飛行機墜落事故に遭遇したとあって挙って報じる中、
二人の一人息子である工藤新一の存在は……不思議と報じられてい
ない

この事実気付いるのかいないのか、ジンは数秒の沈黙の後……
煙草を投げ捨てて弟分のウォッカへ命令を下す

「ウォッカ……」

「成田救急病院へ監視を付けろ、奴が本当に死んだかどうか確かめ
るチャンスだ」

「解りやした」

にやりと口角を上げて笑みを浮かべたウォッカは、携帯を取り出
し配下のメンバーへ監視を命じた

電話を掛けるウォッカの傍らで、新たな煙草を取り出し火を着け
るジンは、煙を吐き出して考え込む

用心深く一際猜疑心が強い男がこの不可解な事実疑問を持つ事は、至極当然と言えた

(どう言う事だ?)

(これだけ工藤優作と工藤有希子の飛行機墜落事故遭遇が報じられているにも拘わらず、一人息子である高校生探偵工藤新一の存在は、どのテレビ局も報じていない)

(親子共々有名人ならば、家族のコメントを取ろうとする筈だ)

とんとんと指でハンドルを叩き思考を掘り下げるジンは、電話を終えたウォッカの声で意識を戻した

「どうかしやしたか、兄貴」

「ウォッカ……、一年前俺達がトロピカルランドで工藤新一をバラした後、マスコミの連中はガキが死んだと報じたか?」

「工藤新一ですかい?」

兄貴分のジンの問いに対して、　ウォッカは記憶を掘り起こして
答えた

「そういや、あの日の殺人事件の記事以外は見てやせんぜ」

「遺体発見はおろか、死んだとも葬儀のニュースすら見てやせんぜ」

「ふん……、やはりそうか」

「兄貴？」

殺害した人間の事は忘れる事になっているジン

相棒のウォッカに確認を取り確信を得ると、冷酷な笑みを湛えた
ジンがいた……

（工藤優作……、思ったより厄介な奴の様だな）

水面下でジンが動き始めた頃、もう一人のメンバーが既に動いて
いた

（早く何とか手を打たなければ……シルバーブレッドとエンジェルが危ない）

普段の魅惑的な笑みは消え失せ幾分焦燥の色を隠せないベルモットは、成田救急病院へと急ぐ

目立たない裏通りを駆け抜けてコナンやジン達より先に到着したベルモットは、現状を把握するべく有希子の元へと向かう

（……有希子、無事かしら？）

扉の前に佇み様子を窺っていると客人を招く有希子の声が響く

「シャロン？」

「……！！」

有希子に存在を悟られ姿を表したベルモットは、久し振りに旧友の無事を確認する事が出来た

「……何故私だと解ったの？」

「解るわよ、大切なお友達なもの」

有希子の変わらない笑顔

数十年来の友人との再会して、ベルモットは女優シャロン ヴィ
ンヤードへ戻っていた

「……無事で良かった」

「ごめんね、心配掛けちゃって」

懐かしい旧友との逢瀬に自然と表情が綻び笑顔になる二人の女優

「良いのよ……お相子なものね。でも有希子、早く手を打たないと
シルバードブレッドが危険よ」

「そうね……」

真剣な表情で思案に暮れる二人

……やがてある事実を思い出した

「有希子、貴女ロスで一人亡くしてたわよね。それも八年前に……」

有希子の胸の奥に秘められた悲しい記憶

「ええ、早産で……シャロン!!」

「その子が息を吹き返したとすれば……」

「シャロン？　お願い？」

有希子が藁にも縋る想いで託すとベルモットは踵を返した

「……名前は？」

「名前は……新しいの新で新・コナン・工藤」

「オーケー」

「有り難う……シャロン」

届かぬ声

ベルモットがコナンと入れ違いに成田救急病院を立ち去った同時刻、レンタカーで駆け付ける毛利家と和葉は、飛び出して行ったコナンを案じていた

「つたく、飛び出しやがって?」

「コナン君……」

「無事着いとなるとええんやけどな、平次が一緒やさかい大丈夫とは思うけど……」

「……うん」

ニュースを見るなり飛び出したコナン

心配で堪らない蘭の傍らでは、今迄にない位に動揺し飛び出したコナンを、和葉は些か訝しんでいる

「けど、どう言う事やろな?」

「あ……何の事だ？」

「和葉ちゃん？」

顎に手を当ててふと呟く和葉

未だそこ迄気持ちが回らない蘭と深くは考えていない小五郎は、
和葉の言葉が理解ずに問い返す

「さっきのコナン君や」

「工藤君の両親とは遠縁も遠縁なんやろ？」

「うん、新一のお母さんが以前にそう言ってたけど……」

「幾ら遠縁のおじちゃんとおばちゃんが飛行機事故に巻き込まれた
言うたかて、まるで自分の両親が巻き込まれたみたいにショック受
けるやろか？」

「コナン君、新一のお母さんに懐いてたし旅行とか良く連れて行っ
て貰ってたから……」

「ふうん、でもなく懐いとする程度であそこ迄ショック受けるやろか？」

コナンを見て感じた率直な疑問を提示した和葉だったが、運転席の小五郎は心底呆れた様に吐き捨てた

「まったく、ガキはこれだから？」

和葉の疑問にうんざりした様にルームミラー越しに視線を投げる小五郎に、和葉は納得いかないとはかりに噛み付いた

「だっておかしいやん!!」

「普通、あそこ迄ショック受けへんで？」

「馬鹿、だからてめえは大阪の探偵坊主に呆けだと言われんだよ!! あのかな、遠縁だとかそんなのは全く、関係ねえんだよ、コナンは有希ちゃんに懐いていたからな、心配して飛び出してもおかしくねえんだよ。有希ちゃんもコナンを殊の外可愛がってたし、それに……丁度同じ年頃だから尚更な」

「「え？」」

少し陰りを帯びた表情でぽつりと呟いた小五郎の言葉に、和葉と蘭は互いに顔を見合わせて首を傾げると、小五郎へ怪訝な表情を向けた

「お父さん？」

「丁度同じ年頃って……どう言う事なん？」

「ねえ、お父さん、何かあるの？」

普段より明らかに表情を曇らせている小五郎に問い掛ける蘭と和葉、小五郎は数秒の間沈黙して思案した後、一言だけ言葉を紡いだ

「……………有希ちゃんは八年前、ロスで早産して一人亡くしてんだよ。その子も男だったから……、コナンとダブって余計に可愛くて仕方がなかったんだろう」

「「！！」」

「そうだったんだ……」

予想外の答えに胸を痛める蘭

少なからずショックを受けるものの、未だ納得がいかない表情を浮かべる和葉に対して、小五郎は人生の先輩として一人の人間として、未だ若い和葉を戒める

「いいか、ガキってのは感受性が強いもんだ。特にコナンは推理力・観察眼・洞察力が鋭いガキだ。未だ七歳しかないコナンが、親と離れて暮らして滅多に会えない状況で、本気の愛情を注いでくれる有希ちゃん達を親同然に慕うのは至極当然の事なんだよ」

「親子の情と絆ってのは、血の繋がりだけが全てじゃねえんだよ。時として実の親子で殺し合えば、実の親子以上の絆を築く事もあるんだ」

競馬に麻雀・酒・女が何より好きな小五郎は、男として夫として間違いなく最低の部類に入る男だ

しかしながら父親として、男手一つで一人娘である蘭を立派に育て上げた男だった

正義感が強く犯した罪の重さを知っている真っ直ぐな小五郎が、

ここぞと言う時に見せる男気に魅せられる人が多い事は紛れもない事実であり、和葉もその一人だった

小五郎に諭されて悄気る和葉を蘭が励ましながら、車は成田救急病院へ到着した

「やっと着いたか？」

「大丈夫だね……お父さん」

「ああ、大丈夫に決まってんじゃないか？」

「うん……」

不安な表情を見せる蘭の頭を撫でながら、背後の和葉と病院内へ入ろうとした所で、英理の車が到着した

「あ……お母さんの車じゃない？」

「あなた、蘭」

「お母さん」

「早かったじゃねえか」

「偶々、空いてたのよ」

「なら行くぞ?」

多くの人々でごった返している受付で二人の容態を聞き出すと、
一先ず手術室へと向かう事にした

「有希ちゃんは四階の412号室で、優作さんは一階で手術中だそう
うだ」

「手術中って……」

「有希ちゃんを庇って怪我したそうだ」

「そう……、優作さんなら受け身取ってる筈でしょうから大丈夫だ
と思うけど……行きましようか」

「ああ、手術室はこの奥だ」

まさか……と言う思いが頭を過りながら向かった手術室の前には
……、変わり果てたコナンがいた

「有希ちゃん!!」

「よく、遅かったやないか？」

「車が動かなかったんだよ？」

「それもそやな？」

駆け付けてくれた友人家族を、有希子は笑みを浮かべて出迎えた

「無事で良かったわ？」

「英理ちゃん小五郎君・蘭ちゃん、わざわざ有り難う。ごめんね、
心配掛けちゃって」

「いいえ、無事で良かったです」

「良いつて有希ちゃん？」

有希子の無事を確認して一先ず安堵した小五郎達の目に、心配顔で手術室の扉を見上げるコナンの姿が映った

「コナン君？」

「まったく、飛び出しやがって？」

二人の呼び声にも反応しないでただ扉を見上げ続けるコナン……
その痛ましい姿に皆、胸を痛めた

「コナン君……」

「坊主、ずっとこの調子での〜」

「無理もねえさ」

有希子の車椅子の傍らで生気のない悲痛な表情を浮かべるコナンに、蘭が膝を付いて語り掛けるがコナンは反応を示さなかった

「……コナン君」

「優作ならきつと大丈夫よ……」

コナンの頭を優しく撫で続ける有希子、まるで親子にしか見えな
い二人を見ていた小五郎の脳裏にある仮説が過る

（まさか……な）

眼前の光景に浮かんだ疑問は、徐々に確信へと変わり始めていた

思慕（前書き）

お気に入り登録有り難う御座いますm
〔
m

思慕

長く……短い沈黙の時間が流れ

小五郎達に遅れる事十五分後、阿笠と哀が到着した

白衣姿で慌てて出て来たらしい阿笠に対して、組織を恐れる哀がパークのフードを目深に被る姿は、着の身着の儘で駆け付けて来た人々の中で異様に目立つ事になる

ばたばたと聞こえる複数の足音に振り向き、息を切らせる阿笠が駆け付けてくれた

「有……有希子さん、無事じゃったか？」

「阿笠博士」

「良かった？良かった？」

顔を被って泣き出してしまった心優しい隣人に、有希子は優しい笑みを浮かべた

「ごめんね、心配掛けちゃって」

「ええんじゃよ、有希子さん」

「無事で良かったわい、のゝ新一」

有希子の無事を確認した所で、傍らに佇むコナンへ視線を向けた
阿笠は愕然となった

「!!」

「ずっとこの調子なのよ……」

片時也有希子の傍らから離れずただ、手術室の扉を見つめ続ける
コナンは顔面蒼白で今にも倒れそうにしていた

（工藤君……）

変わり果てたコナンの姿に茫然と立ち尽くす哀に、平次が蘭達に
聞こえない様に小さな声で話し掛けた

「ちっこい姉ちゃんにも言い分はあるやろうけどな、今回ばかりは目え瞑ってくれへんか？」

「何、馬鹿な事を言ってるのよ。奴等に目を付けられるのも時間の問題なのよ、早く連れて帰らないと皆が危ないのよ！！」

「わあっとる、せやけどな」

最悪の事態は避け様とする哀とコナンを擁護する平次、互いに守ろうと譲らない二人を隠す様に立つ阿笠は英理と小五郎に話し掛け、有希子は蘭と和葉を引き付けた

「何も心配要らへんよって」

「貴方は全然、解ってないわね！！こうしてる間にも奴等は迫って来ている……時間が無いのよ！！」

徐々に歯止めが効かなくなった二人を見て有希子は、然り気無く小五郎達を人払いして興奮する哀に言い放つ

「平次君が言った通り大丈夫よ、手立てはちゃんと打ってあるわ」

「……え？」

平次と哀が冷静さを取り戻すと、小五郎達全員が消え失せており、この場に残っているのは事情を知っている者達ばかりだった

「和葉達は？」

「英理ちゃん達には、私と優作の着替えを取りに行って貰ったわ」

「新一がこの状況だと無理じゃからの、男の儂がする訳にもいかんし英理さんと蘭君に頼んだんじゃよ」

「それもそやな？」

「ちょっと工藤君、確りしなさい！！」

何とかコナンを正気に戻そうとするものの、コナンの双眸は虚ろな眼差しの儘だった

「仕方ないわね？」

正気にも戻らず動こうとしないコナン

業を煮やした哀がコナンを連れ帰ろうと腕を掴んだ所で、有希子は哀の腕からコナンを抱き寄せた

「これ以上、私の息子から大切な物を奪わないでくれる？」

「!！」

「有希子さん？」

毅然とした態度で哀に向き直る有希子はコナンを優しく抱き締めた

「既に手立ては打ってあるから、何も心配ないわ」

「でも……もし……」

もし組織にGinに見付かったら？

……そう考えて仕舞う哀の肩は微かに震えており、自分をきつく抱

き締める

「貴女はあの子達を守りたいんでしょうけど、私達は新ちゃん的心も守りたいの」

「……心？」

「そうよ」

有希子の意図する所が理解出来ない哀に、平次はきっぱりと言いつ放った

「ちっこい姉ちゃん、ええか？」

「例えどんな理由があろうとも、親が子を想う心を、子が親を想う心を踏みにじる事は決して許されへんのや」

「!!」

「心配してくれるのは嬉しいわ、でもね……何もかも奪うのは止めて欲しいの。私と優作には、親として息子を守る義務があるのよ。大丈夫……、どんなに似ていてもコナンちゃんは新ちゃんではなく

て弟なんだから……」

「え……?」

怪訝な顔で問い返した哀だったが、背後から感じた気配に表情を強張らせた

（奴等が……直ぐ近くにいる!!）

「哀君?」

がたがたと怯えて震える哀を守るべく、盾になる様に立ちはだかり組織のメンバーの視線を遮断する阿笠と、コナンを親友を守るべく平次もまた盾となっていた

然り気無く有希子の話に合わせ平次は組織のメンバーらしき男に聞こえる様に有希子へ問い掛ける

「工藤は坊主を知ったんか?」

「それがねー、驚かそうと思って言わなかったから知らないのよ。コナンちゃんは早産で産まれたんだけど、一度体の機能が停止した

所為で体が弱くて療養所にいたの。やっと普通の生活が出来る様になった時に新ちゃんが……」

「そうやったんか……」

悲し気な眼差しで目に涙を浮かべる様は、流石元女優だけあって有希子は”我が子の死を悲しむ母親”と言う配役を、迫真の演技で演じてのけたのだった

「新ちゃんの死に顔は決して安らかとは言えなかったの……しかも新ちゃんの遺体は発見が遅くて、DNA鑑定に時間がかかっちゃったから誰にも言わないで埋葬したわ。せめて最期だけは安らかに……、静かに眠らせてあげたかったの……」

「有希子はん……」

（流石、大女優藤峰有希子や……どう見ても息子を亡くしてもうた母親でしかあらへん）

息子が死んだ状況を語りながら腕の中にいるコナンを撫で続けていた有希子

その間、コナンは有希子と傍らに佇む平次にしか聞こえない位に

小さな声で、ずっと呟いていた

——父さん……父さん……

ひたすらに父親の無事を祈ってコナンは小さな声で呼び続けた……

（工藤……）

突然勃発した不慮の事故により深く傷付いた親友の姿を見て平次は大阪にいる父親に思いを馳せる

（親父が同じ状況になったら……俺はどないすんやろな）

（平静でおれる自信なんかあらへんわ……、工藤みたいになるんやろか？ 頼むから元氣でおれよ……親父）

親が我が子に注ぐ無償の愛情は表裏一体、無限に注がれる反面、我が子に仇を為す者には容赦せず身を呈して守り通す……

コナンから優作を取り上げ様とした哀を、有希子はどうしても許せないでいた……

偽りの道標（前書き）

お気に入り登録有り難う御座います m (m ?

今日は何とか書けましたが……………明日は……………微妙かも……………

更新出来なかったらごめんなさい？

偽りの道標

組織のメンバーに監視される中、有希子と平次は事実に基づいて工藤コナンの経歴を作り上げた

一年前の優作と有希子の帰国日に合わせて作り上げる虚像……即ち、工藤新一の遺体発見と極秘埋葬の経緯及び工藤コナンの生い立ちを作り上げていく

「ほな、工藤は毒薬か何か飲まされてもがき苦しみながら、関係者でも立ち入らぬ所に倒れてもうて発見が遅れた……っちゅう事やな？」

壁に凭れ掛かり腕を組んで探偵の顔をした平次は、最愛の息子を守る為に有希子が紡ぎ出す言葉を補足していった

「ええ……、新ちゃんには持病なんてないし心臓発作なんて有り得ないから、何者かに毒殺されたと言う事は直ぐに判ったわ。でも、そうなるとコナンちゃんを巻き込んでしまう事になるわ。だから、優作の知り合いのドクターにお願いして心臓発作による病死として処理して欲しいって……、そう頼んで表沙汰にはならなかったのよ」

（流石、世界的推理小説家工藤優作の妻だけあるわね……でも……組織に調べられたらアウトだわ）

（流石、有希子さんじゃの）

可能な限り第三者を巻き込まない様にしようと言葉を選んで紡ぎ出していく有希子は、哀と阿笠の心配を気遣う余裕等ある筈もなく、然も事実の如く流暢に言葉を紡ぎ出し続けた

「新ちゃんは、優作から其れなりに身を守る術を教わってたから、毒殺した相手が只者ではないと言う事は容易に想像が付いたしね」

悲しみと悔しさと不安が入り交じった複雑な表情で小さな溜め息を吐く有希子が述べた偽りの真実

不敵な笑みを浮かべた平次は、探偵として率直な意見を述べると然り気無く話題をコナンへと変えた

「それが正解やなく、日本警察の救世主・平成のシャーロック・ホームズ事高校生探偵工藤新一を毒殺した程の相手や。周囲の人間を守る為にも、下手に刺激せん方がええ。極秘で捜査するせんは別にして、一旦熱り冷めるんを待つのも手やしの。先ずは非公表の坊主を守るんが先決や」

「ええ、この時はコナンちゃんを公表してなくて、新ちゃんを驚かせようと極秘に来日したのは良いけど、外に出たのは始めてだったか

ら工藤の姓を名乗る事は出来なかったの」

「それで江戸川乱歩から取ったんやな？」

「そう言う事、蘭ちゃんに詰め寄られて咄嗟に言っちゃったみたいね？」

「どうりで変な名前や思ってたわ」

ちらりと平次がコナンを一瞥すると、有希子の腕の中で幾分落ち着いたコナンが不貞腐れて睨み返していた

（ニヤロ……てめえ覚えてろ）

コナンの視線にもものともせず、からかう様な笑みを浮かべて有希子の腕の中にいる親友を見下ろす平次

二人の想いが通じたのか？

周囲の音を聞き取れる程度には冷静さを取り戻していた

自分を守る為に盾になっている平次と有希子に感謝しながらも、二人の会話を有希子の腕の中で聞いていたコナンは決断を迫られていた

「大丈夫、コナンちゃん」

「ああ……」

「優作なら大丈夫よ」

「……だと良いけどよ」

（もし……もし父さんが死ぬ様な事になれば……俺は……俺は……）

（――父さん!!）

小さな紅葉の手で有希子の診療服にしがみつくコナン

幾多数多の殺人事件に遭遇してもコナンの礎が揺らぐ事等なく、己の信念の元、ベールに覆われた隠された真実を追い続けたコナン

優作が死ぬかも知れないと言う、底知れない不安と恐怖が複雑に絡み合い、その堅固な礎を揺るがし始めていた

「で……どうするの？」

「出来るだけ公表はしないけど、当面の足場を固める必要が出て来たわよ」

「ああ……、この儘じゃやべえ」

「日常生活に支障はないけれど、未だ少しだけ体が弱いと言う事にしておいたらどう？」

組織の監視に気付かれてはならない為、有希子は眠りに誘う様にコナンの背中を軽く叩きながら提案し、それを察知したコナンは眠った振りをする

これを受けて、平次もまた疲れた振りをして床に座り込み小声で補足した

「せやな、その方が元の体に戻るって時に死んだ事に出来るしの。普段から風邪を引いたとか……しとったらええやろ」

「そうだな……、それきやねえな」

組織の監視の目に晒されながら紡がれた偽りの道標を、コナンは受け入れざるを得なかった

……大切な人達を守る為に

（じゃあねえな……）

（ごめんな、蘭……もう帰れねえ……）

今はただ優作が心配で堪らないコナンはそれ以上の思考は働かず、再び表情を歪ませる

（駄目だ、今は何も考えられねえ……父さん……父さん）

自然と有希子の診療服を握る手に力が入り表情が歪むと、優しい母の声と腕がコナンを包み込んだ

「今は何も考えないで良いのよ、私達に任せて優作の事だけを考えてなさい」

「うん……、母さん」

「服部、わりいけど頼む……」

「おお、俺に任しとき」

「ありがとな……服部」

危険だと承知しながらどんな時でも必ず引き受けてくれる親友に
精一杯の笑みを向けたコナンは、動揺が著しい自分に明るく微笑ん
で返す平次に頼もしさを感じつつも、再びすぎる様な眼差しで手術
室の扉を見上げた

「……父さん」

再び沈黙が訪れたのも束の間、渋滞に引っ掛かっていた関係者が
漸く到着し始めた

「奥さん!!」

「有希子さん？」

「良かった？ ご無事でしたか？」

夥しい数の足音と聞き覚えのある声に振り向くと、真っ青な顔で駆け付けて来る編集者達の一団があった

「あら、皆さんごめんなさいね？」

「良かった？」

「有希子さん、先生は……」

「私を庇って怪我して仕舞って、未だ……手術中なの」

「そうですか……」

切な気な表情で見上げる編集者は元より誰もが優作の無事を祈った

「……先生」

「どうかご無事で……」

世界的推理小説家工藤優作と、元女優工藤有希子が飛行機墜落事故に巻き込まれて負傷した事は、世界中のマスコミ各社が報じ始め、関係者等が時間が経つにつれて世界中から続々と駆け付け始めていた

母と子の決断（前書き）

お気に入り登録有り難う御座います m
〔 m

更新遅くなって済みません……

母と子の決断

——アメリカ ニューヨーク

英字書籍最大手の出版社

最上階に位置する社長室では、駆け込んで来た部下の予想外の報告に怒号の指示が飛んだ

「何だと、工藤先生が飛行機事故！！直ぐに日本へ飛んで安否情報を確認しろ！！」

「はい！！」

同様の光景が世界中の出版社で見られ日本行きの飛行機は即日満席となり、その傍らでは工藤有希子の名前を見付けて駆け付ける者も少なくなかった

「有希ちゃん！！」

息を切らせて駆け付けて来たのは初老の男性と役員らしき男達で、嘗て藤峰有希子が所属していた芸能プロダクションの面々だった

「あら社長、マネージャーじゃない」

「無事で良かった？」

人混みを掻き分けて、有希子の無事を確認すると社長と呼ばれる初老の男はへなへなと座り込む

「社長、確りして下さい？」

「もう減茶苦茶驚いたんですよ？」

経たり込んだ初老の男を助け起こしたマネージャーと呼ばれた男は、ほっと安堵した表情を浮かべた

「ごめんね、心配掛けちゃって」

大女優藤峰有希子の引退から早十八年が経過したにも拘わらず、自分に何事かあれば直ぐに駆け付けてくれる嘗ての上司達に有希子は、精一杯の笑顔を見せた

「もう十八年経つのに来てくれて嬉しいわ」

「なあに、有希ちゃんの為なら、地球の裏側からだって駆け付けるよ」

「ありがとう♪」

「ともあれ無事で良かったですね」

「ああ……」

一安心した所で、当然の事ながら視線は有希子の腕の中にいるコナンへと注がれた

「ところで有希ちゃん……」

「もう一人息子さんいたのかい？」

「え〜とね？」

この地点で駆け付けた関係者の視線は有希子に抱っこされている

コナンに向けられており、有希子は説明を余儀なくされたのだった

「秘密……と言いたい所だけど、そろそろ潮時かしらね」

「有希ちゃん？」

「秘密って？」

有希子の性格を熟知している、芸能プロダクションの面々は元より、この場にいる全員が苦笑したのは言う迄もない

「奥さんらしい？」

「ああ？」

（ははは……工藤のおかんってどんな人やねん？）

関係者の反応を見てくすくすと笑っている有希子の腕の中では、
やたら遊びたがる母親に呆れ果てたコナンがいた

（ったく？）

「秘密って奥さ〜ん？」

「元々、工藤先生のプライベートは公表しないんですから？」

「そんな事したら原稿貰えませんか？」

「それもそうね〜」

編集者がぼつりと呟いた一言を聞き取った平次は、すかさず話に割り込んだ

「ちよっ、今のほんまなんか？」

平次から問い掛けられた編集者達は工藤家の私生活が報道されない訳を明かした

「ああ、そうだよ」

「工藤先生は私立探偵でもある方だからね、探偵業に支障がない様に私生活に関連する事は報道しない契約なんだよ」

「これは我々出版業界だけでなく、芸能業界も同様だね」

「へー、そうやったんか？」

「どろりでコメント取ろうとせん筈や」

最悪の事態を想像した編集者達は一斉に顔色を真っ青に変えるのだった

「そんな事したらもう？」

「当分の間は原稿貰えない羽目になる？」

「ただでさえ輪転機止まってんだ？」

「先生く？」

「待ちますからご無事で？」

「連載が？」

この言葉で逃げ出して来た事は言う迄もなく、コナンと平次はただ呆れ果てていた

（また逃げ出して来たな？）

（逃げ出して来たんかい？）

編集者達の叫びも何処吹く風の優作は未だに手術中で、有希子は笑みを絶やさぬ様にしていたが、コナンを抱く腕が微かに震えていた

（母さん……）

コナンが知る限り、常に明るく振る舞い笑みを絶やす事はなく、不安な表情等見せた事がない有希子

これ迄、例え何があるとも、優作と共に笑って乗り越えて来た有希子ではあったが、その優作を失うかもしれないと言う嘗てない事態に不安を隠せずにいた

（優作……大丈夫よね？）

懸命に涙を堪えている母親の姿

コナンは己を奮い立たせるべく拘っていた工藤新一を捨てる決意を固めた

（そうだ……、俺が母さんを支えなくてどうすんだよ。俺が動揺してる暇なんかねえっうの。俺が幼児化してもう一年になる、工藤新一はもう死んだも同然の存在だ。何もかもなくしたってんならよ、コナンとして新たに築けばいいだけじゃねえか）

（ごめん……蘭、コナンとして側にいるから、十年だけ待ってくんねえか。直ぐ追い付くからよ……）

この場で有希子を母と呼ぶ事は工藤新一を殺す事になる

蘭を待たせている事は解ってはいたが、懸命に笑おうとする有希子に全てを背負わせる事等、コナンには到底出来なかった

「父さんなら大丈夫だって、母さん」

「コナンちゃん……」

（工藤……）

全てを捨てる決意を固めた後、懸命に母親である自分を元氣付け
様と笑い掛けて来る息子の姿に、有希子は少しだけ救われた様な気がした

（ありがと……新ちゃん）

普段の笑みを自然と浮かべる事が出来た有希子を見て、コナンも
また子供らしい笑みを浮かべる

「心配ねえよ、父さんなら直ぐ目を覚ますって」

「そうよね、受け身は取ってるし優作なら大丈夫よね」

「ああ、これ幸いにのんびり寝るんじゃないの？」

「かも知れないわね」

思い出す様に天井を見上げると、原稿を待っている編集者達は直

ぐ様待ったを掛けた

「奥さん？」

「寝られたら困ります？」

「「ぷくくく？」」

半泣きで訴えて来る姿に思わず吹き出した有希子は、商売道具が無事である事を告げる事にした

「パソコンは無事だから大丈夫よ」

「「なら良かった……」」

有希子の一言に糸が切れた様に安堵した編集者達と駆け付けてくれた人々に、二人目の息子を紹介するのだった……

「くすくす、兎も角息子を紹介するわね。私がロスで産んだコナンちゃんよ、名前は新・コナン・工藤・アメリカ国籍になるわ……」

魔女の贈り物（前書き）

済みません、昨日は更新出来ませんでした。お気に入り登録して頂いて有り難う御座いますm（
m

魔女の贈り物

「私がロスで産んだコナンちゃんよ、名前は新・コナン・工藤・アメリカ国籍になるわ……」

母と子の命懸けの決断

立ち開かる盾となる探偵

漆黒の闇にのみ込まれる薬学者

何も知らずにこやかにコナンに笑い掛けて挨拶する関係者達

この光景を無言で監視する存在を見咎めた者がいた……

「思ったより早く戻れたね」

「ええ、もう少し時間が掛かると思っただけど……あら？」

有希子と優作の入院手続きの為に一旦米花町の工藤邸へ戻っていた英理と蘭和葉そして小五郎は、数時間前と寸分変わらず佇んでいる

二人の男達に気が付いた

「どうしたの、お母さん」

「あの二人……さっきもいなかった？」

英理が指差す先に佇む怪しげな二人組の男達は、有希子達に集中
していて英理達が戻って来た事に気付いていなかった

「ほんとだ……」

「そーいやいたな……」

「何してんのやろな？」

「大方、有希ちゃんのファンって所だろう？」

然程気に留めない小五郎に対し、訝しむ英理と蘭そして和葉

「でもお父さん、新一のお母さんのファンにしては変じゃない？」

「それもそうやね、手に持つとる携帯はカメラ無しのストレート携帯みたいやし、写メ撮るにしてもおかしいんちゃう？」

和葉が指摘した通り、男が持つ携帯はカメラ無しのストレート携帯で、型としては通話とメールだけの少々古いタイプの携帯だった

「そういやそうだな……、ファンなら写メで記念写真とかしてもおかしくはねえが、カメラなし携帯では不可能……」

「にも拘らず有希ちゃん達を監視、その上病院内での通話……しかも手術室の前と来てるわ」

非常識極まりない怪しげな男達、次第に目付きが鋭くなっていく英理と小五郎は、自分達の背中に蘭と和葉を隠して近付き始めた

「おい、まずいぞ」

傍らの相棒の合図で英理と小五郎の接近に漸く気が付いた男は、監視を慌て中止して素知らぬ振りで、通話相手のジンに指示を仰ぐ

「ジン様、妃英理と毛利小五郎に気付かれました」

英理と小五郎に見付かった為に少し慌てた下っ派のメンバーに対し、ジンは舌打ちして指示を出す

「「チッ、一旦ずらかれ」」

「解りました」

英理と小五郎が近付いた所で、慌てて監視を中止して足早に立ち去った男達は、院内の人混みに紛れた

「あ、逃げてったで」

「……追うか？」

鋭い眼差しで男達を見据えた儘問う小五郎に対し、英理は数秒思案した後、夫に告げた

「いえ、止めておいた方が良さそうだな……あの雰囲気は只者ではなさそうだから深追いは危険よ」

「それもそうだな？」

愛娘蘭を背中に隠して忍び寄り冷静な判断をして深追いしなかった二人の姿に、蘭と和葉は何かと喧嘩ばかりしている二人の間に、確かな絆を見た

（お父さん……お母さん）

（ふーん、蘭ちゃんの事に関しては信頼し合ってるんやね）

息の合った英理と小五郎の他者の介入を許さぬ雰囲気、蘭と和葉は顔を見合わせて微笑んだのだった

「「ふふふ」」

「あら、なあに？」

「ううん」

「蘭ちゃんの事になると信頼し合ってるんやな〜って」

少しからかう様な二人の笑みに、英理と小五郎は真っ赤になって

否定するが説得力は欠片程もない

「べ……別に信頼何てしてないわよ？」

「誰が英理なんか？」

「二人とも顔真っ赤して説得力ないよ？」

「「蘭？」」

「親をからかうんじゃない？」

蘭と和葉に指摘されて真っ赤になった英理と小五郎を後にして、
蘭と和葉は賑やかな輪の中に加わった

「よく早かったやんけ」

「取り敢えずあるものを幾つか持って来ました」

蘭が差し出した袋の中身を確認した有希子は、真っ赤になった儘
の英理と小五郎の姿に察しを付ける

「英理ちゃん・小五郎君・蘭ちゃん・和葉ちゃん、有り難う……………
って言うか、顔が真っ赤かだけど何かあったのかしら？」

「英理ちゃん小五郎君？」

「な？何でもねえって？」

「別に何も無いわよ？」

慌てふためいて更に真っ赤になる英理と小五郎に対し、有希子は
素直じゃない二人に一言だけ告げる

「いい加減に素直になりなさいね、二人とも……………失ってからじゃ遅
いのよ」

「有希ちゃん……………」

「……………そうね」

悲しい笑みを浮かべた有希子、その言葉の裏側に秘められた悲し

みを読み取った英理と小五郎は、有希子の忠告を素直に受け入れた

互いに思っているながら素直になれない二人を尻目に、蘭と和葉はコナンに声を掛けた

「コナン君、落とし物預かって来たで？」

「……落とし物？」

（探偵団バッヂでも落としただのか？）

首を傾げて和葉と蘭の方を振り向くと、蘭の掌にはパスポートと外国人登録証明書及び出生証明書があった

「はい、コナン君」

「……！！（これは……！！）」

驚いた表情で受け取るコナンと僅かに表情を和らげる有希子

「これを落としたの、新ちゃん」

「気を付けなきゃ駄目よ、コナン君」

「……うん、有り難う蘭姉ちゃん」

確かな地盤もなかったコナン

パスポートの頁を開いて見ると出生間もなく来日から始まって、優作と有希子と共にロス渡米して一年前の単身での来日とロンドンへの渡英に渡る迄、正規ルートで事細かに書き記されていた

（誰が一体ここ迄……母さん？）

怪訝な顔で自分を見上げる息子にウィンクして見せると、コナンは小さな声でサンキューと呟いた

「ごめんなさいね、蘭ちゃん」

「いいえ」

「誰かが拾ってくれはったみたいで受付に預けてあったさかい」

「そうだったの（有り難う……シャロン）」

大切そうに握り締めるコナンを見ていた蘭が口を開き掛けたその時……

数時間に及ぶ手術が漸く終わりを告げる

「コナ「あー！！ 手術終わったで！！」」

長く点灯していた赤いランプが消えた途端にコナンと有希子は、固く閉ざされていた扉が開かれるのを固唾を飲んで待った

「……優作」

（父さん……）

分かれた命運

全員が優作の無事を祈りながら静かに扉が開くのを待っていると

……

手術着を鮮血で染めた執刀医が疲れた表情で姿を表した

「ふう、ご家族の方ですか？」

「はい？」

心配で堪らないと言う顔をした車椅子の有希子と小さなコナンを見据えると、執刀医は抑揚のない声で手術の結果を告げた

「手術は成功しました……ですが爆発の際脳へ衝撃を受けていて、一週間以内に意識が戻らなければ植物状態も覚悟しておいて下さい」

「……！」

執刀医の一言で有希子とコナンの淡い期待は打ち砕かれると共に、コナンの心に一つの楔が深く……深く打ち込まれた

「……植物状態？」

微かに震える有希子の言葉

「先生……」

「そ……そんな……工藤先生」

コナンを始め、蘭や平次・和葉・英理・小五郎・編集者達……、
全員がショックを隠し切れなかった

「そんな……」

「植物状態って嘘やろ……」

「……あくまでも最悪の可能性、と言う事や。悲観する事はあらへ
ん、そう心配すんなって」

「そうよ、コナン君」

「そうやで、信じて声掛けたろ？」

「蘭……姉ちゃん、平次……兄ちゃん、和葉姉ちゃん」

自身もショックを受けながら、懸命にコナンを励ます平次と蘭・和葉を始めとする面々

……だがコナンはどうしても

——もし、目覚めなかったら？

そう思って仕舞うのを止められなかった

「……うん、でも……もし……、もし目覚めなかったら？」

「大丈夫やて、工藤」

「……服部」

親友のすぐる様な眼差しに、コナンの目線迄しゃがみ込んだ平次は、頭をがしやがしやと撫でた

執刀医もまた、コナンを安心させる為に言葉を紡いだ

「大丈夫、心配なのは解るけど、お父さんは必ず目を覚ますからね。今言った事はあくまでも最悪の可能性の一つであって、植物状態になると確定した訳ではないよ。人の想いは時として科学では解明出来ない効果を生む事もあるんだ、それには先ず坊やがお父さんを信じて声を掛け続けてあげないとな」

平次や執刀医の言葉に無言で小さく頷いたコナンは、手術室から出て来る優作に駆け寄った

「父さん？」

「優作？」

体の至る所に包帯を巻かれて、酸素マスクや沢山のコードや管を付けられた優作の双眸は固く閉ざされ、手術直後の顔色は幾分青白い儘だった

「暫くはICUに入りますね」

ストレッチャーを押す看護師が笑顔で告げると、有希子是不安そうな表情で優作を見送った

「宜しく願います」

（……父さん）

優作を見送るコナンの震える肩を抱いて寄り添う蘭

あまりにも痛々しいその姿に、蘭は事実を確かめられずにいた……

（パスポートに書いてあった名前……新・コナン・工藤・アメリカ国籍、新一の弟と言う事になってるけど本当なのかな）

（弟と言う割りには、コナン君は新一にあまりにも似すぎている。ううん、コナン君は新一そのもの……だって……新一なんだから、十七年間も一緒にいたんだよ？）

（もう、誤魔化されないからね、新一）

この瞬間、コナンの背筋にゾクリと悪寒が走りった。恐る恐る、傍らにいる蘭に視線を向けると……にっこりと微笑んだ蘭の笑顔に

コナンは凍り付く

(ら……蘭?)

(何か……すげえこえーんだけど?)

(ははは……大丈夫だろうな?)

引き攣った笑みを浮かべるコナンの姿を傍らで見ている平次と哀

「……」

無言の儘、冷静に観察する平次

対して、怯えきった表情の哀

その命運は分かれていた……

成田救急病院を後にした男達は駐車場迄戻ると、戦々恐々と言った面持ちで監視して得た情報を、ジンに報告の電話を報告していた

「成る程な……、工藤新一の死亡報道が為されないのは契約の所為か」

「はい、どうも私立探偵でもある工藤優作との契約で、私生活に関する事柄は一切公表出来ない様です」

普段より数段低い殺気立った声を聞きながら報告する下っ派達は、務めて平静を装って工藤新一の死亡経緯を報告した

「工藤新一は出来損ないの名探偵をジン様に飲まされた後、もがき苦しんだ際関係者も立ち入らない場所に倒れて遺体発見が遅れた様です。関係者が工藤新一の死亡を知らなかったのは、遺体の損傷が著しくDNA鑑定に時間が掛かった為で、それに工藤優作と工藤有希子が静かに送ったかったからの様です」

「ふん……そう言う事か、それでガキの素性は判ったか？」

「はい、新・コナン・工藤・アメリカ国籍。母親がロスで早産して一旦は死亡の確認された様です。しかし辛うじて蘇生したものの、虚弱体質で日本とアメリカ両国の療養所で過ごした為、その存在を知る関係者はいなかった様です。四年程前からはロスにある工藤邸で自宅療養してほぼ健康になった一年前、兄工藤新一を驚かそうと単身来日。しかし工藤新一が帰宅せず、様子を見に来た幼馴染みの毛利蘭に名前を尋ねられた際に、咄嗟に江戸川と言う偽名を名乗っ

たと言っていました」

工藤新一と工藤コナン

不明だった一連の疑問が解決されたジンは、数秒の沈黙の後……裏付けを取る様に命令を下す

「解った……、ご苦労だったな。お前達はガキの裏付けを取れ」

「「解りました、それと……」」

報告を聞き終えて通話を切ろうとしたジンは、歯切れの悪い声に怪訝な声で聞き返す

「何だ、未だ何かあったのか？」

「「はい……、はっきりと確認した訳ではないんですが、裏切り者のシェリーに良く似たガキがいました」」

シェリーの名前を聞いた瞬間……ジンの眉尻がぴくりと跳ね上がった

「何……シェリーに似たガキだと？」

「はい、フードを目深に被っていた為に顔の確認ははっきりと出来なかったんですが、同じ年頃の工藤コナンと比べると、女のガキの方は七歳の子供にしては大人びてまして……」

「解った、工藤コナンと言うガキは熱りが冷める迄一旦放っておけ、お前達はシェリーに似ているガキの素性を洗え」

「「解りました」」

天使の砦

優作の手術が終わりを告げて、一旦阿笠と共に帰路に付いた哀に
闇鴉の羽根がまわり付き始めた

関係者等も全員が各々の会社へ連絡する為に一旦病院を後にし、
その最後尾を走る黄色いビートルを二台のバイクが尾行している

「本当にシェリーなのか？」

「さあな、だがあまりにも似すぎている。何だかの関わりはあると
見て良いだろう」

「なら、先ず身元だな」

「ああ……、身内ではなさそうな爺と工藤優作と工藤有希子の元へ
駆け付けて来て、妃英理と娘達に入院の支度をさせた所をみると、
恐らく米花町近辺に住んでる筈だ」

「懇意にしている隣人……って所か？」

「その辺りだな」

「工藤邸の住所は？」

「米花二丁目二十一番地だ」

無言の儘で頷き合った男達は、二手に別れると片割れの男は走り去っていった

阿笠の黄色いビートルを追い抜き駆け抜けた漆黒のバイクを見て、ハンドルを握る阿笠はほっと胸を撫で下ろした

「尾行されるところだと思っておったんじゃが、どうやら気の所為の様じゃな」

助手席でフードを目深に被って震えている哀に声を掛けるものの、怯えきっている哀には聞こえていなかった

「哀君……」

心配そうに見つめる阿笠の視線に気付かない程黒の組織の気配に怯えきっている哀……

哀の怯え方が尋常ではない為、阿笠は唯一哀を守る手段に為り得る人物……ジョディ・サンテミリオンに連絡を取る事にした

（ジョディ先生に連絡を取った方が良さそうじゃな……）

哀を守る為、阿笠は背後に付いて来ているバイクを警戒しながら自宅へと戻っていった

（……遂に見付かった。この儘じゃ博士やあの子達が……工藤君が、皆が殺されて仕舞う！！）

（助けて……お姉ちゃん！！）

阿笠が懸命に尾行を振り切ろうと遠回りをする等している間も、膝の上で拳をきつく握り怯える哀

漆黒の齒車は静かに回り始め、闇鴉の羽根は執拗に哀に絡み付き出す

「兄貴……、どう言う事ですかね」

「シェリーに似たガキか……恐らく、出来損ないの名探偵の副作用

で幼児化したと見る事も出来るが、工藤コナンと言ったガキの近くに
いるのは……ただの偶然か？」

「確かに……そのガキが本当にシェリーってなら出来すぎてやすね。
しかし兄貴……、あの薬にそんな副作用が本当にあるんですかい？」

「出来損ないの名探偵は未知の薬だ、有り得ない話じゃねえ……、
現にベルモットと言う前例があるからな」

「それもそうですね」

ハンドルを指で叩きながら考え込んだジンは……徐に新たな指示
を出した

「ウォッカ……出来損ないの名探偵を百体のラットに投与させろ」

「解りやした」

不気味な笑みを浮かべたウォッカ

兄貴分であるジンの命令を実行させるべく、APTX4869を
研究している研究所へと電話を掛ける

「俺だ……出来損ないの名探偵を百体のラットに投与して報告しろ、
そうだ……今直ぐにだ」

「「解りました」」

「時期に連絡が来やすぜ、兄貴」

ウォッカが通話を切り視線を戻すと、何か思う所があるのかジンは煙草を燻らせながら更に考え込んでいた

「ああ……」

「どうかしたんですかい？」

「ウォッカ……、毛利探偵事務所に盗聴機は仕掛けた際に指紋は採取したか？」

「いえ、指紋は採取してやせん。まさかこうなるとは思いも寄りや
せんでしたし……」

ウオッカのぼつが悪そうな答えを然程気にも留めず煙草を捨てた
ジンは、最も効果的な手段を選択したのだった

「ふん……確かな。あのガキが工藤新一が出来損ないの名探偵で
幼児化した姿かどうか指紋を採取する、それがてっとり早い」

「解りやした」

不気味な笑みを浮かべながら、ジンの愛車ポルシェ 356Aは
独特のアイドリング音を響かせ、米花町の毛利探偵事務所へと向か
った

——同時刻

成田救急病院を後にした小五郎達は、仕事が残っていた英理とも
別れ自宅へと戻る車内で、蘭はコナンを守るべく、小五郎にある相
談を持ち掛けていた

「はあ、何で大掃除しなきゃなんねえんだ!!」

「蘭ちゃん、何で大掃除するん?」

突然の大掃除宣言に異議を出す小五郎と、理解出来ず戸惑う和葉

蘭は心配そうな顔で二人に訴えた……

……コナンを守る為に

「だって、もし……もしコナン君が新一本人だとしたら、ううん、そうでなくてもコナン君が誰かに命を狙われてるかも知れないですよ？」

「……指紋を消すってか!!」

「うん」

「でも蘭ちゃん、体が縮む訳ないやん」

和葉の尤もな言葉

蘭も頭では良く理解していた

だが、先程コナンを監視していた男達の姿が脳裏に焼き付いて離

れず、もう気が気ではなかった

「解ってる……。でも、コナン君が新一かどうかは別問題にして、今は出来るだけの事をしてあげたいの……。守ってあげたいの」

「蘭ちゃん……」

数秒間の沈黙が流れた後……。小五郎はコナンを案じる娘の意をくみ取る事にした

「解った、事の真偽は後回しだ。今は坊主と有希ちゃん達の命が最優先、勿論大阪の探偵坊主もだ。何者かに狙われている事は間違いねえ様だからな？」

「有り難う、お父さん!!」

面倒な事は嫌がる小五郎だったが、娘の頼みには滅法弱かった

「命に代わりはねえからな」

突拍子もない話に困惑していた和葉だったが、平次の名前が出た事で自分が出来る事をする事に決めた

「せやね、出来る事からやろか」

「有り難う、お父さん 和葉ちゃん」

小五郎と和葉の理解を得られて満面の笑みを浮かべた蘭を乗せた車は自宅へと急ぐ

「そうとなったら急ぐぞ」

「うん!!」

「蘭ちゃん……帝丹小学校は？」

「あ!!」

ふと思い立った和葉が呟いた、最も危険な場所

そこにはコナンの指紋だけではなく、哀の指紋もある

真っ青に顔色を変えた蘭

「ちっ……、学校があつたな？」

小五郎も舌打ちして頭をがりがりと掻きむしり、ない知恵を絞るが危機を打開する名案は簡単には浮かばなかった

小さな盾（前書き）

お気に入り登録&沢山のアクセス有り難う御座います m
〔 m

やっ と探偵団の登場です

小さな盾

各々の場所で事態が急速に動き始める中で、ここ毛利探偵事務所では、小さな壁が立ち開かろうとしていた

「やっぱりおかしいですよ」

「うん!!」

「そうだよな!!」

小さなメモを手には訝しむ子供達元太・光彦・歩美の三人は、昼間コナンに宛てに残していったメモを手には首を捻っていた

「光彦は確かに落ちねえ様に挟んだもんな!!」

「うん、歩美も落ちない事を確認したから間違いないよ!!」

「ええ、お二人が言われる通り、僕は確かに落ちない様に挟みましたから落ちる訳がないんです……この扉を開けない限り」

視線の先にある一枚の扉

それは留守の毛利探偵事務所に何者かが侵入した事を示していた

手帳の一枚を破り取ったと見られる小さなメモ用紙は、二つに折られ扉の隙間に挟まれていた物で、くっきりと付いている折り目は確りと挟まっていた事を物語っていた。だが……、その折り目とは別にもう一つ浅い折り目が付いていた

「この浅い折り目……」

「何者かが侵入して未だ間もない様ですね」

「うん、中に入ったのを悟られない様に差し込んだみたい」

「恐らくそうでしょう」

何時もの通り光彦が先導する形で、メモを見ながら歩美と二人で推理し始めると、話している内容がいまいち理解出来ない元太は、困惑した表情で光彦に説明を求めた

「何で時間が経ってないって解るんだよ、光彦」

「このメモの折り目ですよ、元太君」

「この折り目がどうかしたのか？」

「良く見てください、中心に強く付いている折り目が僕が付けた折り目です。それに対してこの浅い折り目は未だ強く付いていません。これは、毛利探偵事務所に侵入した何者かがばれない様に差したにも拘らず、差し込みが浅かった為に落ちて仕舞った。落ちたこのメモは然程汚れてもいませんし、階段を吹き上げる風で飛んだ形跡もあります、これは何者かが侵入して間もない事を示しているんですよ」

「成る程な、そう言う事か」

「じゃあ、何者かって誰なんだ？」

「俺達で犯人捕まえようぜ」

腕を組み大きく頷き一人で納得する元太は早くも犯人を捕まえる事しか頭になく、目を輝かせながら光彦に侵入者の正体を尋ねた

「それは解りませんよ、元太君」

「もう元太君ってば、メモ用紙の一つで犯人が解る訳ないじゃない」

「メモ用紙一枚で犯人が解るなら警察は要りませんよ?」

「それもそうか」

早とちりしてばつが悪そうに頭を掻く元太に苦笑する光彦と歩美、これから起こる悪夢等、小さな子供達に予想出来る筈もなかった

「ねえ……これどうしよう」

「毛利探偵の帰宅を待つしかないでしょう、警察沙汰にしたくないかもしれないし……」

「一体誰が犯人なんだ?」

「毛利探偵に恨みを持つ人でしょうか?」

「うゝん」

元太・光彦・歩美が誰が犯人なのか思案に暮れていた、その時、けたたましいブレーキ音が響いた

タッチの差でジンやウオッカより先に帰宅した蘭と小五郎・和葉は、毛利探偵事務所に戻るなり階段を駆け上がると、少年探偵団の元太・光彦・歩美が待ち兼ねた様に、メモ用紙を手に訴えて来た

「あら……、元太君・光彦君・歩美ちゃん」

「あ……蘭お姉さん？」

「事件だぜー!!」

「え？」

「事件って何やあったん？」

「おい、何があったってんだ」

慌てて蘭に声を掛けて来た歩美、拳を握って目を輝かせる元太、そして冷静に事態を説明する光彦の三人は、コナンに迫る闇の羽根

を払う小さな壁となるのだった

「毛利探偵事務所に何者かが侵入した形跡があります」

「何だと!!」

「ええ!!」

「それ……ほんと?」

「間違いねえのか!!」

光彦の言葉に驚愕し問い詰める小五郎と蘭

「間違いないもん!!」

「光彦の奴、確かにメモを挟んだんだ」

「今日、約束していたコナン君が米花公園に来なかったので迎えに来たんですが、コナン君も皆さんも留守だったのでこのメモを落さない様に挟んで帰ったんです」

「それが、さっき来てみたら落ちてたの!!」

「これって何者かが中に入ったって事だよな!!」

顔を見合わせる蘭・小五郎・和葉

普段なら気の所為だと一蹴する小五郎が一瞬で顔色を変えた事で、少年探偵団として数々の事件に遭遇して来た三人は、この瞬間に何事かあった事を悟った

「お父さん？」

「やっぱり蘭ちゃんの推理通りやったって事なん？」

「普段なら気の所為だとする所だが、如何せん時期が悪すぎる？」

鋭い眼差しをした小五郎は光彦の手からメモを抜き取ると、くつきりと付いた折り目と少しずれた浅い折り目を確認した

「こいつ等が確かに挟んだ事は間違いねえ様だ、中心に確りと折り

目が付いている……それが落ちていたって事は何者かが侵入したって事か？」

「……そんな」

全員の視線が扉に注がれる中、小五郎は上着のポケットから白い手袋を取り出して嵌めると、ズボンのポケットから鍵を取り出して扉を開けた

「おめえ等はここにいろ」

「私達も手伝う!!」

「おう!!」

「馬鹿野郎、遊びじゃねえんだ!!」

「俺はこれでも元刑事だ、戸締まり等は確りしてんだよ。それにも拘わらず侵入されたって事はだ、これはプロの犯行だって事なんだよ?」

「現場を荒らすだけだから、そこにいろ。蘭、上から工具箱持って

来い。上にも侵入してるかもしれないねえから、指紋付けんじゃねえぞ」

「解った？」

階段を駆け上がり、三階の自宅から工具箱を取り出そうとすると
……

「――！！」

（これって盗聴機――！！）

直ぐに工具箱を取り出した蘭は二階にいる小五郎の元に走った

「お父さん？」

真っ青な顔色で飛び込んで来た蘭を見て悟った小五郎は、舌打ちして工具箱を受け取りドライバーを取り出した

「ちっ……やっぱりあったか」

「どうしよう？」

「……蘭、目暮警部に知らせろ。指紋を残してるとは思わねえし、大掃除する羽目になるがしやあねえ？」

「「!!」」

「解った!!」

銀の綻び（前書き）

お気に入り登録して頂きまして

本当に有り難う御座います m () m ?

土日は朝から夜迄仕事なので更新出来ないかもしれません。書けたら更新しますので楽しみにして頂いてる皆様、本当に済みません？

銀の綻び

米花公園でサッカーをしようと皆と約束していたにも拘わらず、何時迄経っても姿を表さないコナンを迎えに毛利探偵事務所を訪れた元太達だったが、コナンは疎か小五郎や蘭も留守だった為、一枚のメモ用紙にメッセージを記し、扉に確りと挟み落ちないのを確認して帰って行った

少年探偵団手帳から破り取った一枚のメモ用紙……

風が吹けば木の葉の如く飛んでしまっただった一枚の紙切れが……、ジンの足元を掬う結果となった

蘭の通報でパトカーが駆け付け、米花五丁目の毛利探偵事務所前の道路は騒然となり、多くの野次馬が集まり始めジンとウォッカは撤収を余儀なくされた

「まずい事になりやしたぜ、兄貴」

「ああ……ずらかるぞ」

「へえ」

已むを得ず撤収しジンとウォツカは、警視庁の目暮・佐藤・高木等が到着する前に姿を消した

「ご苦労様です、警部殿」

「コナン君が狙われていると言う事だが本当なのかね？」

眠りの小五郎を作った張本人と言えど、表向き小五郎が解決している状況では小さなコナンが狙われる理由は皆無と言っても過言ではなかった

「ちょっと厄介な事になってましてね？」

「厄介な事とは何だね、毛利君」

頭を掻きむしりながら深い溜め息を吐いた小五郎は、少々複雑な経緯を順を追って説明し始めた

「事の発端は今朝の飛行機墜落事故なんですけどね？」

「あの事故か……」

一見コナンとは無関係に思える親友・工藤優作夫妻が巻き込まれた飛行機墜落事故の話を振られた目暮は沈痛な面持ちで表情を曇らせる一方で、佐藤と高木は怪訝な表情で首を傾げた

「ちょっと待って下さい、毛利さん」

「毛利さん、今回の事件と今朝の飛行機墜落事故があるんですか？」

職業柄直ぐに駆け付けられない目暮、親友の容態を案じ勤務終了後にも駆け付ける予定だった所に呼び出して仕舞った小五郎は、申し訳なさを感じながらも、息子同然のコナンを守るべく事情説明を続けた

「その飛行機にコナンの両親が偶然乗っていてな、負傷して成田救急病院に搬送されたんだよ」

「コナン君のご両親がかね!!」

「本当なんですか、毛利さん」

「そうだったんですか……」

驚いて思わず確認を取った高木と佐藤はお互いに顔を見合わせ、
目暮は両親の飛行機事故遭遇を知りショックを受けたであろうコナ
ンを思い胸を痛めた

（何と言う偶然だ……）

「それが大マジなんだ。まあ、これも驚いたが、もっと驚いたのは、
コナンは優作さんと有希ちゃんの息子だったって事が解ってな？」

「何だと!!」

「「ええ!!」」

「まあ、その辺の事情は省きますが、優作さんの手術を待っていた
有希ちゃんとコナンを監視していた怪しげな奴等がいたんですよ。
優作さんの手術が無事に終わって帰って来たら、こいつ等が何者か
が侵入したと騒いでたって訳です」

簡単な事情を説明し終わると、小五郎は光彦に目配せをして説明
をする様に促した

「僕達、コナン君が約束の時間を過ぎて来なかったので様子を見に来たんです。でも、コナン君も毛利探偵も蘭さんも留守だったので、このメモを扉に挟んで落ちない事を確認して一旦は帰ったんです」

「それで、もう一度様子を見に来てみたら落ちてたの!!」

「そしたら盗聴機が出て来たんだぜ!!」

拳を握って経緯を説明する探偵団に目暮以下全員が感心していた

「そうだったのか……、良く気が付いてくれた。流石少年探偵団だな」

「ほんと、この子達が気付かなかったら最悪のケースになっていたかもしれません」

「普通なら差し込みが甘いで済ませる所だけど、良く気が付いたね」

「「えへへ?」」

差し込みが甘かったと済ませない所は、多少なりとも事件に遭遇して来た経験から来るものだろう

結果的に、事件を未然に防いだ小さな探偵の卵達に、蘭や小五郎は内心とても感謝していた

（有り難う……皆）

（こいつ等のお陰だな？）

深呼吸して心を落ち着けた佐藤と高木は、光彦に向き直って腰を屈めると証拠品であるメモを受け取った

「ちょっと、そのメモを見せてくれる？」

「はい、どうぞ」

「その強く付いている折り目が、僕が差し込んで付けた跡です」

「成る程ね、この折り目じゃ落ちないわ」

「そうですね、何者かが侵入して元に戻す際、二度目だった為に差し込みが上手く行かずに落ちて仕舞ったんでしょう」

「恐らくそうだろう、そのメモを鑑識に回して指紋を取ってくれ。それから、コナン君が目的ならば帝丹小学校と阿笠さんの家も仕掛けられた可能性が高い、高木は阿笠さんの家に向かって確認して来てくれ、帝丹小学校には本庁から誰か寄越して確認させてくれ。それと成田救急病院へ捜査官をガードに急行させるんだ。佐藤君は詳しい経緯を聞いてくれ」

「解りました!!」

「はっ!!」

目暮の指示を受けた高木は携帯を取り出すと、電話を掛けながら車へ乗り込んで急発進して行き、佐藤は全員から詳しい事情を聞き出す為に必要な場所を確保するべく、近くの鑑識官に声を掛けた

「そのソファーはもう使えるの？」

「ええ、もう直ぐ指紋採取が終わります」

「ありがとう」

証拠品であるメモ用紙を小袋に入れながら、佐藤は腰を屈めると
お手柄を立てた探偵団へ向き直った

「これ預からせて貰うけどいいかしら？」

「はい、大丈夫です」

「飛行機事故なら仕方ないね」

「そうだな、今度見舞いに行こうぜ」

「うん、賛成」

「そうですね」

（ほんと、危なっかしくて優しい子供達ね）

目を細める佐藤の傍らでは、小五郎がコナンの素性を説明している
のだろう、驚愕し捲る元上司に頭を掻きながら話し込んでいた

毛利探偵事務所と自宅で鑑識作業が行われている頃、場所を変えた帝丹小学校一年B組でも驚きの声と共に鑑識作業が行われていた

「白鳥警部、盗聴機がありました。主にコナン君の机と隣の探偵団の子供の机に仕掛けられていますね」

「一つ残らず取り除いてくれ」

「解りました」

漆黒の道筋―前編―（前書き）

遅くなりました……

お気に入り登録して頂きまして、本当に有り難う御座います m
し m

漆黒の道筋―前編―

帝丹小学校と毛利探偵事務所及び阿笠邸で行われた鑑識作業は、夜の帳に包まれた頃漸く終わりを告げた

「では澄子さん、遅く迄済みませんでした」

「いえ子供達の為ですから……、任三郎さんも遅く迄お疲れ様でした」

名残惜しそうに見つめ合う二人

勤務中にも拘わらず二人の世界を作る仮にも警部の白鳥に対し、呆れ果てた千葉は容赦なく連行したのだった

「白鳥さん、行きますよ!!」

「おい、千葉君？」

首根っこ掴まえて車に乗り込み車のエンジンを掛ける千葉は冷ややかな眼差しを向けて言い放った

「仮にも警部なんですからね……、公私混同は止めて下さい」

「……済まない？」

「兎も角、阿笠邸へ応援に行きますよ」

米花二丁目の阿笠邸へと車を発進させた千葉は、つい先程入ったばかりの情報を警部である白鳥に報告した

「鑑識は終わったんじゃないのかい？」

「鑑識は終わったらしいんですが、哀ちゃんが酷く怯えているらしいんです。本当は女性の佐藤さんが良いんでしょうけど、コナン君の捜査の方で手が回らないそうで……」

「ご両親があので工藤夫妻だからね、佐藤さんも対応に忙しいんだろう。でもどうしてあの娘が怯えるんだい？」

狙われているのは工藤コナンであり灰原哀ではないと思っている白鳥は、怪訝な表情で千葉を振り返り叡知な頭脳をフル回転させた

「狙われているのはコナン君だろう？」

「それが、怯えきっていて答えてくれないそうです。阿笠さんも、事情があるらしく自分の独断では言えないと言ってるそうです」

「そうか、でもコナン君の命が掛かっている。話して貰うしかない」

「そうですね」

……その阿笠邸では、地下に閉じ籠って仕舞った哀に阿笠と高木が
困り果てていた

「阿笠さん、話して貰えませんか？」

「……」

何時もならば事件解決の為に快く協力してくれている筈の阿笠、
今回に限って頑なに口を閉ざした儘話そうとはしない

事件解決に貢献してくれたのも一度や二度ではない為無理強いも
出来ず、高木は困り果てていた

（弱ったな……）

対面の席で深い溜め息を吐いて項垂れる高木の疲れた姿を見て、
阿笠は済まないとは思いつつも話せない自分にやるせなさを感じた

（所詮……僕は部外者に過ぎん。新一と哀君を守る為に、何もして
やれん。済まんの……新一・哀君）

（僕は無力じゃ……）

己の無力さを呪う阿笠

……高木に見えない様にそっと拳を握った

（新一……哀君……）

複雑に絡み合った漆黒の糸

突如綻び始めた仮初めの平穏

事態は混沌と化し

小さな薬学者を確実に追い詰めていた

薄暗い地下室で灯りもつけずに哀は小刻みに震えていた

（どうしたら良いの……）

（私の所為で工藤君が危険にさらされて……今それ所じゃないって言うのに……この儘じゃ、博士や吉田さん達が……殺されて仕舞う……助けて……お姉ちゃん）

パソコンの前に座り拳を握り、懸命に涙を堪えて哀しい微笑みを湛える哀は、病院から戻ってからずっと自分を責め続けている哀

（あたしはやっぱり……あの時、バスと一緒に死んでおけば……、こんな事にはならなかったのに……あたしって馬鹿だよね、お姉ちゃん）

（逃げられないって解ってたのに、ごめんなさい……工藤君）

堪えきれず溢れ落ちた一滴の涙

「でも……羨ましいわね」

（私には何もないもの……あるのは、焼き焦げたこのフロッピーディスク……唯一つだけ）

（もう時間がない、何なんでも解毒剤を完成させなきゃ。彼がコナンとして生きるのならば、せめてAPT X 4869の毒性だけは消さなければ……）

手の甲で目尻を拭うった哀は、パソコンを起動し解毒剤の開発に取り掛かる

パソコンの灯りだけが点った地下室で、哀は最終局面を迎えていた研究をその瞬間迄止めなかった……

刻々と哀に迫る漆黒の魔の手はあの男にも迫っていた

工藤優作と工藤有希子が飛行機墜落事故に巻き込まれ世界中のマスコミとファンの注目が集まる中で、絶好の機会とは言え深く考慮する事なく監視及び盗聴し組織の存在がばれかねない事態を招いたジンとウォッカは、あの方への連絡手段であるモニターの前で直立不動の姿勢を取り冷や汗を流していた……

『この事態をどうするつもりだね、ジン・ウォッカ……世界中の注目が集まると解っていないが、あの工藤優作に監視を付けた上に盗聴機を取り付けて、素人相手にこうも簡単に見付かるとは……、お陰で日本警察が我々の存在に気付き始めている。この失態、覚悟は出来ているのだろうか……ジン・ウォッカ』

地の底を這う様な抑揚のない低い声で、組織の存在を世界中に知らしめ兼ねない大失態を演じた、ジンとウォッカに対し最後通告を告げるあの方と呼ばれる通称「黒の組織」のボスは、とある高層ビルの全面を硝子張りにされた最上階一室で、小さなパソコンに映し出されている全身から冷や汗を流す二人を悠然と見据えていた

「はっ……申し訳御座いません」

辛うじてジンは謝罪の言葉を口にする事が出来たが、ウォッカに至っては顔面蒼白で言葉を発する事が出来ない位に畏縮していた

『お前がトロピカルランドで殺した筈の工藤新一が江戸川コナンとして生きている事は、盗聴機を仕掛ける迄もない最初から解っていた事だ。宮野明美をお前に始末させればシェリーは反抗して研究中断し、自殺目的でAPT X4869を服用して幼児化すれば工藤新一を頼るであろうと言う事も……、工藤優作が表立って動かない事も最初から全て解っていた』

『その時が来れば工藤優作が息子を止めるであろう事も……全てな。最初から始末する必要等ないから殺さなかったのだ。工藤新一とシエリーを生かしておくだけで貴重なデータを得られるばかりか、シエリーが開発する解毒剤とAPT4869の試作品を混ぜ合わせれば、組織の長年の研究は完成する……。全ては私の計算通りだったのだよ……。ジン、お前が余計な事さえしなければ……』

漆黒の道筋―後編―（前書き）

二日振りの更新で済みません。

思った以上に仕事が忙しく、今後日曜日の0時更新及び月曜日の0時更新は、とても執筆する時間が取れない為に、ほぼ出来ないと思います。楽しみにして下さっている皆様には申し訳ないのですが、ご理解頂きたいと思います。

お気に入り登録して頂いた皆様、何時もアクセスして頂いている皆様、何時も読んで頂いて本当に有り難う御座いますm（　）m

漆黒の道筋―後編―

『そう……全て計画通りだった。我々は何もしなくていい、ただ……シェリーと工藤新一を生かしておくだけで良かった。それだけで、シェリーは解毒剤を完成させる事になり、組織の長年の研究は完成する筈だった。我々は何もしなくて良かったのだよ。お前が余計な事をしてくれたお陰で、工藤新一の社会的死亡は確実なものとなり、新しい名前を得た工藤新一は元の体に戻る必要がなくなった事で、シェリーは本来の解毒剤ではなく、毒性を消すだけの解毒剤を完成させて仕舞う可能性が高くなった。そうなれば、我々の研究は未完成的の儘初代は生き返らない。全ては水の泡だ……ジン、お前の所為でな』

『この失態……どうしてくれる、ジン』

底知れない怒りを覚えながら、あの方はあからさまに怒鳴る事はない。ジンとウォッカにとっては、怒鳴られた方が未だましだったろう……。あの方のその怒りの深さはスピーカーから流れ出る静か過ぎる声で十分だった

「「申し訳御座いません……」」

深々と頭を下げて謝罪するジンとウォッカだったが、あの方の怒りが収まる事はなく増す一方だった

『謝るだけなら三つ子でも出来る、能無しは要らないんだよ……。ジン・ウォッカ、シェリーと工藤新一の環境を元の状態へ戻し、A P T X 4 8 6 9 の解毒剤を作らせろ、出来なかったら……。解ってるだろうな?』

あの方からの事実上の最後通告ジンとウォッカの命運は……

——最早に尽きていた

ジン・ウォッカに最後通告を突き付けていたあの方は、あるメンバーへ一通のメールを送信していた

短いう着信音の後に届いたメールを見たあの方のお気に入りメニューバー

「OK, Boss」

「ふふふ、貴方もここ迄ね……。ジン」

妖艶な微笑みを浮かべたベルモットは一言だけ呟くと、あの方の命令を遂行するべく走り去って行った

複雑に絡み合う漆黒の糸

事態は混迷の予想を呈し始めた

最後通告を突き付けられたジンとウオツカは、あの方と通信を終えた後メイン・コンピュータ・ルームへ来ていた

「兄貴、良いんですかい？」

「あの女に出来損ないの名探偵の解毒剤を作らせるにしても、肝心のデータがねえと出来ねえからな……」

「それもそうですね」

一枚のフロッピー・ディスクにデータを落としたジンは懷に仕舞うと米花町へ向かった

「行くぞ、ウオツカ」

「へい、兄貴」

メイン・コンピュータ・ルームを後にするジンとウォッカを見る他のメンバー達の目は、これ迄とは打って変わり冷ややかなモノで、幹部クラスのジンとウォッカの失墜は明らかだった

「あのジンももう終わりだな」

「ふん……、俺はあの銀髪野郎は大嫌いだったからな。良い気味だぜ」

「そういやウエルシュ、お前あの二人を殺されたんだっけ……」

「この手で八つ裂きにしてえ所だが……その必要はねえだろうさ」

「それもそうだな、大失態をやらかした奴を、あの方が放って置く訳がねえ」

「そう言うこった」

「「くくく……」」

そこかしこで侮蔑を含んでいる嘲笑いが聞こえる本拠地

その様子を苛立った様子で聞いているキャンティとコルンは、舌打ちして好き勝手にほざいているメンバー達に吐き捨てた

「ちっ……好き勝手言いやがって、たった今迄ジンにへつらっていた癖にさ」

「あの方……ジンとウォッカ殺す」

「ああ、先ず間違いはないだろうね。それはジンとウォッカも解ってる筈だよ」

苛立ちを隠せず親指を噛むキャンティ

片や片言の日本語を話すコルンは一見普段と表情は変わらなかったが、その肩には愛銃のライフルを担いでいた

これ迄数多くの任務をこなして来たジンとウォッカが崖っぷちに立たされただけあって、二人の心中は複雑だった

「どう……する？」

短いコルンの言葉の真意

付き合いの長いキャンティには、その言葉が何を示しているのか……誰よりも良く解っていた

「決まってんじゃないか、コルン」

「あの方にとってあたい等なんか所詮捨て駒さ、遅かれ早かれ何れは殺されるんだ。ならあたいは、ずっと一緒に任務をこなして来たジンやウォッカと行くよ。顔を見た事もないあの方の為に尽くしているあたい等を虫けらの様に始末するあの方の為に死ぬのはごめんだよ」

「……それにコルン、ジンとウォッカが殺されるのはもう確実さ。当然、ジンやウォッカと一緒に任務をこなして来たあたい等だって、どうせ、ただじゃ済まないに決まってんだ？」

何時になく真剣な表情でコルンに言い放ったキャンティが踵を返すと、コルンもまた何時もの様に後を追ったのだった

「俺も……行く」

「それでこそコルン、あんただよ」

にやりと不敵な笑みを湛えるとキャンティとコルンは先回りするべく、ジンの愛車ポルシェ 356Aが停めてあるガレージへと向かった

ジンの愛車ポルシェ 356Aに寄り掛かって待ったキャンティとコルン、待つ事十数分後、漸く現れたジンとウォッカを見たキャンティは、何時もの様に言い放つ

「遅いじゃないか、ジン。待たせる男は嫌われるよ」

「俺も……待ち草臥れた」

殺されるであろう自分達の味方になるメンバー等いない……

そう思っていたジンとウォッカは、僅かに目を見開いてライフルを担いだ頼もしい二人に笑みを浮かべると、ジンとウォッカはぽつりと呟き、何時もの様に告げるのだった

「兄貴……」

「ああ……馬鹿な野郎共だぜ」

「ほんと死ぬってのによ……」

ゆっくりと愛車に近付くにつれ何処か嬉しそうな表情をしている
ジンとウォッカを出迎えたキャンティは、手に持っていたある物を
放って寄越した

「待たせて悪かったな、キャンティ・コルン」

「ふん……行くぞ、キャンティ・コルン」

「あいよ、ジン」

「俺……楽しみ」

四人が乗り込んだポルシェ 356A

某所に存在するこの本拠地に、再び戻って来る事はなかった

暗闇に消え失せたポルシェ 356A

ひたすらにパソコンへ向かい、APT-X4869の解毒剤の開発に専念する哀

上階のリビングで項垂れて座り込む阿笠

平次に守られて眠るコナン

めた
各々の場所で回り始めた歯車はコナンと哀を容赦なく巻き込み始

幼馴染みの謀略

「有り難う和葉ちゃん、掃除手伝ってほんと貰って助かった」

「ええんよ、蘭ちゃん」

「コナン君の命が掛かっとなるやもん、気にせんというて」

「有り難う、和葉ちゃん」

警視庁の鑑識作業が終了して、指紋消去作業を終えて夕食入浴を終えて就寝出来る様になった頃は、もう深夜0時を差そうとしていた

163

蘭のベッドの隣へ布団を敷き、蘭と和葉は各々寝そべりお喋りに花が咲いた

「……でも蘭ちゃん、コナン君が工藤君やなんてどういう事なん？」

「高校二年生の体がどないしたら小学一年生迄縮むん？」

和葉の至極尤もな言葉に蘭は、マットレスの隙間から一通の封筒

と本棚からアルバムを取り出した

「普通高校生の体が縮むだなんて先ず思わないよね、でも、新一と別れたトロピカルランドで聞き込みしたら……、だぶだぶの服を着たコナン君が頭から血を流して倒れてたって言う警備員の人の証言が取れたの」

「ええ!!　ほんまに!!」

「うん、私も驚きはしたんだけど、これで納得出来たの」

「え……何で納得したん？」

「偶々コナン君が居合わせたかもしれないやろ？」

目を見開いて驚く和葉に、蘭はアルバムを開いて七歳の工藤新一と江戸川コナンを比較出来る様に和葉に見せる

「かもしれないけど、コナン君は新一の子供の頃に瓜二つなの」

そう言って和葉に差し出された新旧のアルバムには、あまりにも酷似している二人の姿があった

「え……これってそっくりやないの!!」

「似てるなんてレベルじゃない、コナン君は何から何迄新一そのもののなのよ」

「恐らく新一は、何だかの事件に巻き込まれて仕舞い、飲まされた毒薬の副作用で幼児化して一命を取り留めたと思うの。そして……、阿笠博士の助言を受けて正体を隠し元の体を取り戻す為に探偵をしているお父さんの所に情報収集の為に来た……って所だと思うの」

母親の血の賜物か、はたまた幼馴染みの影響か。散りばめられた点と点を結び真実を導き出した蘭

蘭の推理を聞いて疑問を持った和葉は言い難そうに問い返した

「蘭ちゃん……、それって蘭ちゃんを利用したって事なん？」

蘭を想い眉間に皺を寄せた和葉はコナンに対して不快感を露にした

「仮にや、コナン君が工藤君やとしたら元の体に戻る為に蘭ちゃんを利用したって事になるんやで？」

「蘭ちゃんはそれでもええん？」

蘭を欺いていた……そうと思うと和葉はどうしてもコナンを許せなかった

怒りを露にする和葉に対して、蘭はベルモットに天使と言われた笑みを浮かべると、一年悩み抜いたその胸の内を明かした

「和葉ちゃん……有り難う。でもね、もしそうだとしても、私達を守る為に仕方がなくした事だから、新一が信念を曲げて迄……私が泣いているのを承知の上で隠す事を選んだと言う事は、それだけ危険極まりない相手だと言う事だから……、平成のシャーロック・ホームズと称された新一が地位も名誉も名声も、命以外の全てを捨てて苦悩の果てに選んだ道だから、私は感謝しこそすれども怒ったり恨んだりしない。だって、コナン君が新一であれコナン君であれ、何時も私を励ましてくれて、何かあれば小さな体で守ってくれる……。私は過去の新一も好きだけど、小さな体で私の事を一番に考えてくれて側にいてくれるコナン君が、今の新一の方が大切なの……」

「蘭ちゃん……」

「十七年、一緒にいたんだもん。新一が苦しんでいる事位解るから、

私が十年待てば良いだけだしね」

にっこりと微笑んで、新一への一途な想いを示した東京の友人の姿を見て、和葉は鈍い幼馴染みを思い浮かべるとちよっぴり羨ましかった

（蘭ちゃん……それがもし本当なら、工藤君の想いは半端やあらへん。以前、殺人犯に刺されそうになった蘭ちゃんを身を呈して守って刺された事あったな。ちよっぴり羨ましい……、あの唐変木は何時になったら自覚するんやろ？）

一年前、平次が大怪我したばかりか、現職の刑事が連続殺人犯を監禁して罪を擦り付け様とした、大阪中を震撼させた連続殺人事件

偶然、大阪に呼ばれて遭遇したコナンが身を呈して盾となり蘭を守って刺された出来事は、和葉の記憶に鮮明に刻み込まれている

ほんの数秒間回顧に耽った和葉は、蘭の想いと決意をくみ取り、それ以上は何も言わなかった

「解った、蘭ちゃんがそう言うんやったらあたしは何も言わへんよ。まあ真相は工藤君が喋らへんと解らへんけどな」

「有り難う、そうなのよね」

「新一が簡単に話す訳がないし……」

「でも、平次は知っとるみたいやで？ それに蘭ちゃん、コナン君のお母はんが養育費って渡して行ったって言うってた、あの通帳の名義の事もおかしいと思わへん？」

「あ……、そう言えばそうね」

「どないして作ったんやろ……、あの通帳」

「うん……、服部君何か知ってるのかな？」

「少なくとも、コナン君の素性は知った筈やで？ 工藤工藤ってアホみたいに言うってたしな」

「コナン君が新一だと……、もしくは弟だと知っていた事は確かよね？」

「せやね……」

「……………」

蘭と和葉は無言になり顔を見合わせると、口の固い平次を如何にして口を割らせるのか。明け方迄相談し合っていた

その頃の平次は、優作用の空いたベッドの上で悪寒が背筋を走っていた

（な……何や、今……偉い嫌な予感しよったけど……何やあるとちやうやろな）

乾いた笑みを浮かべ表情を引き攣らせる平次の疑問に答える者は誰もいなかった

（未だ……0時回った所か。今夜は仕掛けてけえへんやろし、今の内に寝とこか）

病室内は平次が守り、廊下は日本警察に協力を申し出たFBI捜査官のジョディとキャメルが守っていた

「ジョディさん……どう思います?」

「そうね、上手く出来すぎてる気はするけど……、そうじゃないと言っ
言う証拠もないし当分は様子見ね。工藤優作があの方であってもな
くても、組織に関連する何だかの事情を知っている事は間違いない
わ」

「そうですね……」

父親

部屋の外迄聞こえて来る娘達の悪巧み話、いや恋話

現場検証へ立ち合った後、大掃除でくたくたになった体を蘭の部屋の壁に預けて、一際深い溜め息を吐いた小五郎は切な気な表情を浮かべて天井を見つめた

「何をやってんだか？」

娘の一途な想いを聞いた小五郎は、父親として……先輩として……ぽつりと呟いた

「お前等は俺達の様になるなよ……まあ、コナンなら大丈夫だろうがな」

コナンがいない自室の扉を後ろ手で閉める小五郎は、何処か憂いを秘めていた

（英理……）

小さなコナンの傷付いた姿は、方々に影響を出していた

優作を案じるコナンの姿を見た英理は、自宅マンションへ戻って一人の男へ想いを馳せた

（あなた……もう十年になるのね）

切っ掛けは些細な喧嘩……

英理は小五郎が不器用な男だと良く解っていた。自分を助ける為に撃った事も、無理せず休めと言いたかった事も解っていた。夫の想いを利用した形で家を出た英理だったが、小五郎への想いが冷めた訳ではない

だが、英理には帰るに帰れない訳があった

「未だ……帰れないわ……一生、自業自得だから仕方ないわね？」

（どうしてこんな事になったのか……、あの男にさえ会わなければこんな事にはならなかったのに、ごめんなさい……あなた・蘭）

憂いに満ちた表情を冬の月が照らし出す幻想的な光景が、英理を一層引き立たせていた……

各々の想いと思惑が絡み合った長い一夜が明けた翌朝

再度、病院へ駆け付けた小五郎と蘭・和葉は、ICUの前で佇んで離れないコナンの姿を目の当たりにした

「……コナン君（新一……）」

「親を心配するんに年は関係あらへんね」

「うん……」

少し離れた所から見守っていた蘭と和葉の背後から小五郎が歩み出て、コナンの元へと向かった

「ちよっ、お父さん？」

「そっとしといった方がええんちゃう？」

蘭と和葉の制止を振り切って、コナンに歩み寄る小五郎は背中越しに娘達に一言言い放った

「ふん……ガキは黙って見てろ、俺はこれでも坊主の父親代わりだ」

「……お父さん」

ICUの中にいる優作を食い入る様に見つめ続けているコナンの元へ歩み寄った小五郎は、無言の儘コナンの頭をぽんと大きな手で優しく撫でた

「おじさん……」

余計な事は一切喋らず小五郎はただ、コナンの隣へ寄り添う様に佇むと傷付き不安に駆られているコナンを、父親として包み込んだ

最初は怪訝な顔で小五郎を見上げたコナンだったが、次第に目が潤み始め小五郎のズボンをすぎる様に握り締めた

懸命に溢れる涙を堪えるコナンの肩に大きな温かい手を回し軽く叩いて宥める小五郎のその姿は、父親以外の何者でもなかった……

何者も立ち入れぬ父と子の姿に平次と護衛をしているジョディとキヤメルは、沈黙を守りながら少しだけ距離を置いた

「やっぱり父親なんやね、おじちゃん」

「うん……、こう言う時のお父さんって凄く頼りがいがあって優しいんだ。お父さんの大きな手で、ぽんぽんってされると泣きそうになるの」

「お父はんの手には敵わへんな、ほんま」

「当たり前や、年の功には逆立ちしたって敵わへん」

「平次」

「服部君」

温かい眼差しで親友を見守っている平次の背中越しの言葉

蘭と和葉には少し悔しそうに見えた

「今のあいつに必要なんは父親や、例え……血が繋がつとらへんでもな」

「……せやね」

（新一……）

暫くの間、無言の儘見つめていた平次は背後にまわると、盾となる様に蘭と和葉を招かざる客の目から遮った

その背後にいる人物の存在には二人は気付いておらず、ジョディとキャメルは鋭い眼差しを向けていた

（何故、ジンとウォツカが……）

（少し……様子がおかしいですね）

（ええ、様子を見ましょう）

（はい）

二人の鋭い視線をものともせず、ジン・ウォツカ・キャンティ・コルンはコナンを真っ直ぐに見据えていた

（大阪府警本部長の息子か……。父親の手足になっている様だが、小僧に知られてもそうしていられるか？）

「兄貴、どうしやす？」

「解毒剤を作らない限り、組織に殺される事はない。そうSher ryと小僧に教えてやればいいだけの事だ」

不敵な笑みを浮かべたジン

任務を遂行してもしなくても、自分達は殺される……。それが良く解っているジンは、これ迄忠実に任務を遂行し組織に従って来た

しかし大失態を犯した今……。あの方へ反旗を翻す決断を下した瞬間だった

「群がる奴等を迎え撃つって訳かい、どうせあたい等は殺されるに決まってるんだ」

「キャハハ……。面白いじゃないか」

「俺……楽しみ」

「行くぞ……ウオツカ、キャンティとコルンはここにいろ」

「へい、兄貴」

「あいよ・ジン」

「解った……」

そのまま姿を消すと思いきや、ジンとウオツカはキャンティとコルンを残してコナンの元へ歩き出した

これに驚きを隠せないコナンを始め、平次・ジョディ・キャメルは慌てて盾となるが、ジンとウオツカはものともせずコナンへ歩み寄った

（な……何考えてんねん!!）

驚きを隠せない平次を他所に、ジンとウオツカはコナンの護衛に付いているジョディと擦れ違う瞬間に、ぽつりと呟いていた

「工藤優作はあの方じゃねえぞ」

「な……」

「同等の推理力はお持ちの方だな」

「じゃあ……誰なの……」

「さあな、それは俺達も知らねえ」

幹部クラスであるジンが組織にとって最も重要な機密事項の一つであるあの方の情報を何故教えたのか……

皆目想像が出来ないジョディとキャメルは、ただ驚き茫然と立ち竦んだ

「……何故……教えるの」

「本当……でしょうかね」

「嘘とは思えないけど……信じていいものか、とても判断出来ないわ」

「はい……」

茫然とただ佇むジョディとキャメルを後目に、平次と小五郎に守られたコナンの元へ真っ直ぐに歩んで行くジンとウォッカ

流石のコナンもジンのこの行動は、到底理解出来なかった

「ジン……ウォッカ」

漆黒の分岐点

不敵な笑みを湛えてコナンの前に立ちほだかるジンとウォッカ

緊迫した空気を破ったのは……

「お会いするのは二度目ですね？」

——蘭だった

これに驚いたのは、事情を知らない小五郎と和葉だった

「蘭ちゃん？」

「蘭、おめえ知ってるのか？」

「うん、新一とトロピカルランドに遊びに行った時に遭遇した、ジェットコースター殺人事件の時に居合わせた人よ」

明らかに一般人ではない男達を蘭が知っていると言う事実を訝しむ小五郎と和葉

それと同時に、忘れていて欲しかったと深い溜め息を吐くコナンと平次

（蘭……やっぱり覚えてたのか？）

（忘れとったら良かったんやけど、覚えとったんか？）

「和葉・姉ちゃんもこっち来い！！」

この間にも平次は蘭と和葉を背中に隠し、平次をジョディとキヤメルが守る様にジンとウォッカに立ちはだかる様に通路を塞ぐ

「おじさん？」

「おめえはそこを動くな！！」

最奥にいるコナンは、隣にいる小五郎に背後に押しやられて仕舞い、小さな体ではどうしようもなかった

（おっちゃん・服部！！）

「蘭姉ちゃん・和葉姉ちゃん、早くこっちに!!」

「コナン君?」

「蘭ちゃん、後ろに行こ……」

「うん……」

ジンやウォッカと初対面の和葉は、ただならぬ何かを察してコナンの言葉に素直に従った

自分達を警戒するコナン達に、ウォッカは不敵な笑みを浮かべながら思い出した様に蘭の問い掛けに答えた

「そういやそうでしたね、兄貴」

「ああ……、高校生探偵工藤新一の最後の事件だったな」

「なあ〜江戸川コナン、いや……工藤新一」

拳を握り締め睨み付けるコナンと平次

薄々察していたとは言えども、やはりショックを隠せないでいる
蘭や和葉・小五郎・ジヨディ・キャメルは、背後にいるコナンを茫
然と見つめた

（やっぱり新一だったんだ……）

（嘘やろ……）

（嘘でしょ……）

（一体どうやって？）

まるで小説か映画の世界の話をにわかに受け入れられずにいる一同
の中で、ただ一人ジンとウォッカに対し怒りを募らせる小五郎は、
コナンを押しやっている手で拳を握る

（こいつ等が探偵坊主を殺したってのか!!）

小五郎にとってコナンが工藤新一だろうとなかろうと驚きはした

が、そんな事はどうでも良かった

一年間、寝食を共にしたコナン

コナンが毛利探偵事務所に居候し始めた当初から実子同然に接して来た小五郎

コナンと事件に遭遇する度に、小さなコナンを危険から遠ざけるべく小五郎は本気で怒り、時には拳骨を頭に落とした事もあった

有希子からコナンを預かった小五郎は、あの言葉通り親代わりを務めて来た

だからこそ、目の前にいる明らかに堅気ではないジンとウォッカが、工藤新一を殺したかもしれないと言う推測が許せなかった

「おめえ等が探偵坊主を殺したってのか!!」

堪り兼ねた小五郎が発した怒声

拳を握り締める小五郎を目の当たりにして、コナンはその思いの深さを始めて知り、頼もしい義理の父親に深く感謝した……

(Thank You……おっちゃん)

確かに小五郎は探偵としては、三流以下のヘボ探偵だ

だが、父親としては男手一つで蘭を育て上げた立派な父親だった

「ふん……殺しちゃいねえさ」

「現にしぶとくガキの姿でいるじゃねえか」

悪びれもせず、ふてぶてしく言い捨てるジンとウォッカの反省のない態度に、小五郎の堪忍袋の緒が切れた

「ふざけんな!! そんなこたあ、はなっから問題じゃねえんだよ!!」

「探偵坊主がコナンになったからって、工藤新一が死んだ事に変わりはねえんだよ!!」

「こいつは、命以外の全てを失っちゃったんだ!!」

「てめえらの所為でな!!」

反省の欠片もない

自分勝手極まりない言い分に、激怒した小五郎を平次と蘭が慌てて諫める

「落ち着けて!!」

「お父さん?」

「離せ!!」

「あかん!! 抑えるんや!!」

「お父さん、ICUの前なんだから、落ち着いてよ?」

蘭の言葉で辛うじて飛び掛かろうとするのを止めた小五郎の前に立ったコナンは、一言だけ言葉を紡いだ

「ありがとな……、おっちゃん。そして黙ってて済みませんでした」

ぺこりと礼儀正しく頭を下げて謝罪するコナンの姿に、小五郎は漸く怒りを静め冷静さを取り戻した

「別に謝る必要はねえだろうが、俺は眠りの小五郎として名を馳せて名探偵になったし、有希ちゃんからはちゃんと養育費も預かっている。何より、幼児化したら独り暮らしは出来ねえんだぞ。犯人の顔を見て一番危険に晒されるであろう、蘭の側にいて守る事は至極当然の事だ」

「おじさん……」

くしゃりと頭を撫でる小五郎と、その周辺を取り巻く様に見守る平次・蘭・和葉の動向を、ジョディとキャメルは静かに見守っていた

警戒しながら冷静に状況を判断し黒と思える人物を割り出して行くジョディとキャメル

二人は一人をグレーと判断した

（毛利小五郎は白……蘭さんと和葉さんも恐らく白ね）

（今の様子だと蘭さんと毛利探偵そして彼女は白、だが……）

（でも彼を白だと決め付けるには、父親共々謎が多すぎるわ）

（でもジンとウォッカは何を考えてるの？）

張り詰めた緊張感が支配していたICU前の廊下の先から、騒ぎを聞き付けた看護師の足音が聞こえ始めると、ジンとウォッカは踵を返してコナンへ最終選択を突き付けて去っていった

「てめえが工藤新一に戻る時は、組織の長年の研究が完成する事になる。それを頭に入れて工藤新一に戻るか、江戸川コナンとして生きるか選ぶんだな……」

「何……………?」

「なんやて…………?」

ジンが言い捨てた台詞に目を見開いて顔を見合わせるコナンと平次

首を傾げて困惑する蘭と和葉

「研究……?」

「何だろう……」

「研究が完成するやて?」

「おい、その研究って何なんだ!!」

何故、わざわざ教えに来たのか?

ジンの真意をコナンは図り兼ねていた……

囚われの探偵（前書き）

お気に入り登録&評価&アクセス本当に有り難う御座いますm（
し m

びっくりしたのと同時に読んで頂いてる皆さんに感謝で一杯です。

現在の所、小説の書き貯めが出来たので日曜日の0時更新します。
月曜日の0時は……書き貯め出来なかったらごめんなさい？

囚われの探偵

一触即発の騒ぎを聞き付けて、駆け付けて来た看護師達に対して優作の熱狂的なファンが騒いだ……と説明し事なきを得たコナン達は、一旦有希子の病室へと戻った

ジンとウォッカが、コナンの正体を蘭や小五郎達にばらして仕舞い、全員を巻き込む形になったコナン

幼児化した経緯を説明した後、改めて謝罪したコナンと有希子は混乱し始めた事態に頭を捻っていた

「え……新ちゃんが元の体に戻ったら、その黒尽くめの組織の人達がしている研究が完成するって、そう言ったの？」

「ああ……、そうらしいんだ」

一年間、組織と渡り合って来た流石のコナンもジンが残した言葉には困惑した表情を隠し切れず、優作の側に一番長くいる有希子に意見を求めた

「母さんはどう思う？」

「そうね……、新ちゃんが元の体に戻ったら研究が完成すると言う事も理解し難くはあるんだけど、そもそも何故、危険を犯して迄、新ちゃんに言いに来たのかしら？病院には警察やFBIの人もいるのに……」

「確かにそうやな……、おかしな事だらけや。組織に忠実で秘密保持の為なら平気でビル毎爆破するジンとウォッカが、何でまたわざわざ組織の情報を漏らしに来たんや？」

(あら……?)

(……服部?)

(こいつ……ジンやウォッカの事を、何で知ってんだ?)

(俺……、常磐ツインタワービル爆破の事を話した事あったか?)

(黒尽くめの奴等の事を知れば知る程、組織に狙われる羽目になる。その為、俺は話した事はない。にも拘わらず服部の奴、何で知ってんだ……まさか……まさか)

無二の親友である平次に疑惑を持ったコナン

あから様に見れば見破られる為コナンは全神経を集中し、五感で平次を監視し始めた

（出会って一年経つが、今思えば服部の言動の端々に疑惑が残る。APT X 4869の解毒剤のヒントである白乾児を持って来たのはこいつだ、Jodie先生を疑っていた時は、俺に気付かれないでカウンターへ座っていたし、クリス・ヴィンヤードの事を賢いと断言していたな……。それに、耳がいつて敵わへん……。そうも言っていた。と言う事は服部は……まさか……………）

思考を掘り下げれば下げる程、平次への疑惑は漆黒に染まり始めコナンは震える拳を懸命に抑えた

「おいコナン、そもそも奴等は、一体どんな研究をしてるって言うんだ？」

突如、コナンの思考を遮る形で話し掛けて来た小五郎に向き直り、混乱を極め頭を掻きむしる小五郎に対しコナンが言い放った言葉は、更に混乱する羽目になった

「We can be both of God and the devil. Since we're trying to raise the dead against the str

e a m o f t i m e .」

「……あ？」

突然のコナンの流暢な英語

理解出来なかった小五郎や蘭達の為に、有希子に通訳された言葉は到底信じ難いものだった

「我々は神であり悪魔でもある。何故なら時の流れに逆らって死者を蘇らせようとしているのだから」

「何だと!!」

「死者を蘇らせるって……」

「そんな事出来るん？」

互いに顔を見合わせる蘭と和葉

衝撃的な内容に言葉を失った儘の小五郎

茫然と佇む小五郎達の目の前でコナンは平次を真っ直ぐに見据えて単刀直入に尋ねた

「……それは服部が知ってんじゃないの？」

「「え……？」」

「おいコナン？」

「何、アホな事を言うてんねん。工藤、俺が知つとる訳ないやろ」

平静を装って切り返した平次、コナンの双眸に迷いはなかった

（新ちゃん……）

コナンは協力者である阿笠以外には誰にも話した事はなかった。そう、運命共同体である哀は疎か優作や有希子にすら隠し通して、たった一人で黒の組織に立ち向かって来た。だからこそ、有希子は平次の言葉に疑問を抱いて仕舞った

一何故、知っているのか――

息子がこうと決めたら貫き通す事を一番良く知っている有希子は、知っている筈がない平次がジンとウォッカの事を知っていたと言う事実確信を持った

（やっぱり……、そうだったのね）

悲し気な眼差しで見守る有希子

もう訳が解らない小五郎・蘭・和葉

コナンは深呼吸を数回すると、親友・西の高校生探偵服部平次を真っ直ぐに見据えた

「じゃあ、知らねえと言うんなら、何でおめえがジンとウォッカの事を知ってんだ？」

「それはお前が？」

失言したと悟った平次は慌てて取り繕った様に切り返すものの、有希子の言葉に息を飲んだ

「いいえ、新ちゃんは協力者である阿笠博士以外には話していないわ。勿論、あの娘にもね」

「……」

唇を真一文字に結び口を閉ざした平次に、コナンは声を震わせながら容赦なく斬り込んだ

「俺がおめえに話したのは、俺が幼児化した経緯と、時折おめえに頼んだ危険のない調査に関連する事だけだ……。にも拘らず……。おめえは何故知ってんだ？」

「アメリカ映画女優クリス・ヴィンヤードの経歴は一切不明、にも拘わらずおめえはベルモットの事を賢いと言って退けた。その上、この俺に気付かれずにカウンターテーブルに座り、あの瞬間迄、気配を殺していた……。それだけじゃねえ、APTX4869の解毒剤の開発の重要な鍵を握る白乾児を持って来たばかりか、父さん達でさえ疑っていた俺の正体を見破ったのはおめえだけだ。以前人を殺した事があるかと聞いた俺の問いに対しておめえは、‘おおお、耳がいうてかなわんわ。完璧なお前にしか言えん台詞やの’こう言っただ。これは推理で死んだ人がいるとも取れるが、組織のメンバーとして殺人を犯したとも取れる……」

「……答えろよ……服部……」

「おめえは何者だ!!」

拳を震わせ

悔し涙を流す親友の姿

旧友が殺人を犯している小五郎は怒りを覚えながらも、この問題は当事者の問題と、静観し沈黙を守った

(……コナン)

(新一……)

重苦しい沈黙に耐え兼ねた和葉の震える涙声

「……平次、嘘は付かんといって……」

今にも泣き出しそうな顔をした和葉が、全員の視線を一身に受けて決断に苦しむ平次を動かした

親友の告白

「……和葉」

一際深く長い溜め息を吐いて、表情を和らげて泣き出しそうになっている幼馴染みに優しく微笑む平次は西の高校生探偵ではなく、穏やかな笑みを浮かべた

ただの高校生だった

（服部……）

泣き出すのを懸命に堪えている和葉を優しく慰める親友の姿は、コナンが初めて見る服部平次だった

「済まん……、お前達にだけは、知られとうなかった」

「あたしかめへんよ？」

「和葉……」

「そりゃー、あんたが人を殺したって知ってもうてショックやで？でも、あんたが人を殺したって言うんなら、それは余程の事やし。あんたは理由もなく人を殺す人間やないし、平気な顔が出来る人間やないって言う事は、あたしが一番よう知っとる。何があったか解らへんし知らへんけど、平次は平次や、あたしの幼馴染みである事に変わりはあるへん」

「和……葉」

大切に守って来た幼馴染み……遠山和葉

父親平蔵の手足として活動して精神が崩壊し掛けている平次を、知らず知らずの内に支えて来たのは紛れもなく彼女だった

「おおきに……おおきに、和葉」

和葉を抱き締める、いや……、しがみ付いて来た平次を受け入れる和葉には、笑みが戻っていた

（やれやれ、取り越し苦労だったな？）

（良かった？）

一年前、突然失踪した工藤新一を捜して毛利探偵事務所を訪れた
西の高校生探偵服部平次

和葉と上京してはコナンと良くつるみ、端から見れば仲の良い兄弟にしか見えないコナンと平次、若いと同じ探偵である平次を受け入れた小五郎は小さなコナンを良く任せていた

そのコナンに対する平次の態度を疑った事等、ただの一度もない

だからこそ、裏切られた……と一瞬怒りも沸いたが、傷付き肩を震わせる平次の姿に小五郎はほっと胸を撫で下ろした

（何か訳ありみてえだが……、まあ問題はねえだろう？）

ちらりとコナンを一瞥すると、親友が抱き合う姿を直視出来ずに頬を染めたコナンと蘭

（くくく……、ガキ共め）

二人を見兼ねた小五郎は咳払い一つして引き離す事にした

「オホン、まったく帰ってからにしろ？」

「「……あ？」」

「若いって良いわね♪」

顔を真っ赤に染めて肩を竦める和葉と照れて頭を掻く平次の姿に、
有希子は笑みを浮かべた

「ガキ共には目の毒だったな？」

「だって……」

「新ちゃんってばへたれだったの？」

「バーロ？」

顔を真っ赤に染めた蘭とコナン

組織との攻防が邪魔をしている為に中々先に進まない親友の恋路

自分にもその責任の一端がある平次は数秒の後……覚悟を決めた

「ほな……終わりにしよか」

”終わりにしよか” 平次の呟きで再び張り詰めた緊張感に包まれ、静まり返った病室に平次の声だけが響き渡った

「何処から話したらええか……。全部、お前の言う通りやで。俺は、クリス・ヴィンヤードがベルモットやて知っとったし、白乾児を持って来たんは親父に持たされたんや……。手土産に持っつけ、工藤新一に似た子供がおったら風邪引かせて飲ませえってな」

「な!!」

「何だと、じゃあ本部長は!!」

「ああ、親父は組織の人間や。せやけど親父は大阪府警本部長と言う立場上大阪を離れられへん、せやから、確実に任務をこなせる俺が親父の代わりに任務をこなしてたんや。その任務の過程で……俺は殺したんや」

血を吐く様な平次の告白

コナンは欠片も気付いてやれなかった自分を責めて拳を握った

（済まねえ……服部。俺は自分の事に手一杯で、おめえの事に何も気付いてやれなかった……）

（おめえは一度も嘘を付かなかったってのによ……）

自分と対等の推理力・洞察力・観察眼を兼ね備えた親友の存在に
勇気付けられて来たコナン

対局にいる平次を見るコナンの目が変わる事はなかった……

「俺は正式なメンバーやあらへん、せやけど大して変わらへん……
お前の敵なんに変わりはないんや」

声を震わせて自分の手を見つめる平次

組織の仕事を手伝わされた為に真っ直ぐな心が傷付いている事は、
誰が見ても明らかだった

「酷い……」

「何で平次にさせるん？」

堪り兼ねて一筋の涙を流す蘭と和葉

「……ふざけやがって!!」

「我が子を犯罪者にする何て……親の資格なんてないわ」

怒りを露にする小五郎と有希子

「毛利のおっちゃん……有希子はん、姉ちゃん……和葉……おおきに……おおきに」

罵倒される……そう思っていた

どんな理由があろうと、自分が犯罪者である事には変わりはない
平次、何時の日か来るべき時は、その身を以て罪を償うつもりだった

なのに誰も平次を責めなかった

「解った……、おめえに罪はねえ。最悪は、証人保護プログラムで別人になるって言う事も出来るが……、これからどうするかだな」

「……工藤、何で怒らへんのや。俺はお前を騙してたんやで？」

騙していた自分を欠片程も責めず擁護的発言をしたコナンに対し、まるで責めてくれ憎んでくれと言わんばかりに詰め寄る平次

「バール、お前は騙してねえじゃねえかよ。確かに黙ってはいたが、俺は騙された事は一度もねえぞ。俺達は未だ未成年だ。おめえは父親に犯罪を強要された被害者であって加害者じゃねえんだよ」

「工……藤、お前……大馬鹿や」

怒鳴られる……軽蔑される……そう思っていた平次

親友に許しを得られ安心すると堪えていた滴が溢れ落ちた

「……バール、泣いてんじゃねえよ」

「誰も泣いとらへんわ、目にゴミが入ったんやボケ？」

「ふうん、ゴミねえ（バレバレじゃねえか？）」

以前と変わらない二人の姿に、誰もがほっと胸を撫で下ろした

「どうなるかと思うたけど良かったわ？」

「うん」

決別するのではないかと案じていた蘭と和葉だったが、二人の姿にほっと安堵したのも束の間……最悪の疑惑が和葉の脳裏を過った

（まさか……、まさかお父ちゃんも組織のメンバーやないやろな）

掌の上（前書き）

お気に入り登録有り難う御座います m
〔 m

月曜日0時更新、何とか出来ました？

掌の上

平次が落ち着いた頃合いを見計らい、コナンは平次が組織の仕事に手を染めた経緯を尋ねた

勿論、平次が話したくないと言えばコナンは無理強いはしなかった。だが平次は、良い機会だからと、全ての発端となった日の事を語り始めた……

「俺が親父の手伝いを始めたんは二年前、丁度高一ん時や。剣道の府大会の前で帰りが遅うなってな、偶然親父とベルモットが会うとるんを見てもうたんや」

「その場で殺されん代わりに迂闊に動けん親父の代わりに任務をこなす様になった。今思い返せば、俺は試されてたんやと思うんや……」

苦笑いしながら頭を掻く平次

「え？」

「あ、そりやどういうこった？」

今一、理解出来なかった小五郎や蘭は首を傾げて問い返したが、シャロン Vineyardの友人でもある有希子はベルモットの意図する所が理解出来た

組織のメンバーでありながら、コナンの存在を報告せずに知らぬ振りをしてくれている自分が知る彼女なら……と判断したのだ

「……シャロンは服部君がシルバードレッドと為り得る存在か試したのよ。組織の心臓を一発で射抜く存在に為るかどうか試したんだわ……もしくは、シルバードレッドである新ちゃんの片腕として足りうるかどうか、見極める為にNOCとして疑っていた平蔵さんをけしかけた……って所かしらね」

「シャロンはそう言う人なのよ」

「有希ちゃん……」

旧友を思い翳りを帯びたその表情は、母親でもなく女優でもない、旧友を思う有りの儘の有希子だった

「母さん……」

「シャロンは悪い人ではないのよ……、それだけは新ちゃんに解っ

て欲しいの」

「わあってるって、これを作ってくれたのもベルモットなんだろう？」

「ええ、一番に駆け付けてくれて新ちゃんが危険だと教えてくれたの。そんなシャロンだから安心して頼めたのよ」

「そっか……」

女優時代以来の旧友が組織のメンバーだと知って傷付いている事を、コナンはちゃんと解っていた

普段は明るく振る舞っているが気にしていない訳がない、ふとした合間に表情を曇らせている事もコナンは解っていた

だが、そのコナンももう一人のメンバーの存在には気付いていなかった。そのメンバーの正体を知っている平次は、蘭や小五郎そして有希子にはばからって、口を閉ざした

（流石に二人の前では言えんな……。有希子はんも知り合いやし、あまりにも残酷過ぎる）

ベルモットの事で表情を曇らせた有希子を見て、もう一人のメンバーの存在を言えなかった平次は、話題を変える為、先程、有希子の口から思わず出た父平蔵のNOC説を問うた

「でも有希子はん、何で親父がNOCやて知ってはったんや？」

「そーいやそーうだな。何で本部長がNOCだって知ってたんだ、有希ちゃん」

普通なら日本警察の最重要機密である犯罪組織への潜入活動等、知る由もない有希子が知っていた事はコナンも疑問に思っていたが、おおよその検討は付いていた

「父さんだろ……、母さん」

口を開こうとした有希子を遮り、有希子が溢した言葉と一年前の記憶を照合して辿り着いた推理に、コナンは今迄気が付かなかった自分に腹を立てていた

「父さんは色んな国へ連れて行ってくれたが、何故かイギリスだけは連れて行ってくれなかった……。それは組織の本拠地、もしくはあの方とやらがいる国だから……。じゃねえのか？」

「父さんはその推理力を請われたが、既にその団体が犯罪組織であると言う事を知っていた為、加入を断ったって所だろ？」

「当時、高等部内部進学を控えていた俺を置いてL Aに行ったのも、主にアメリカで活動していた組織を調べる為……、全部知ってたんだろ？」

何時もの自信に満ちた眼差しではなく、父親の掌で動かされていと悟ったコナンは、不貞腐れた表情で有希子を問い詰めた

「さっすが新ちゃん、良く解ったわね♪」

漸く、真実に辿り着こうとしている息子ににっこり微笑んだ有希子は、子供扱いして頭を撫でた

「幾ら何でも解るっうの？」

「通帳作った経緯の検討は付いてたけどよ、戸籍のない江戸川コナンをどうやって海外に連れて行くんだよ……」

「ICPOに証人保護プログラムで作って貰う話を付けてたのよ」

「やっぱりな……、で？」

有希子の手を払い除けたコナンは平次に矛先を向けた

「ああ、せやから俺も協力したんやけどな。犯罪組織を壊滅させるんは綺麗事じゃ出来へんからの」

「まったく、無茶苦茶しやがって？」

父親に見捨てられれば一犯罪者に為り兼ねない平次の無鉄砲さに呆れ果て、幼児化した自分以上に無茶苦茶極まりない親友をコナンは半眼で睨み上げた

この事実黙っている小五郎ではなく、こめかみに血管を浮き上がらせた小五郎は、全てを話して漸く苦しみから解き放たれて穏やかな笑みを浮かべる平次を一喝した

「本部長の保護がなけりゃあゝ、下手すりゃおめえは犯罪者だぞ？ 狂気の沙汰にも程がある……！」

「てめえは未だ未成年なんだぞ……！」

「解ってんのか!!」

まるで出来の悪い息子を怒鳴るかの様に、拳を握り本気で平次に詰め寄る小五郎

「反省しとるって？」

「一本背負い食らいてえか……」

「それは勘弁してえな？」

赤の他人である自分に対して、本気で怒りをぶつけて来る小五郎

へぼ探偵である小五郎に何故、コナンが心を許すのか？

平次は解った気がした……

（父親……か、おっちゃんみたいな父親やったら、俺はこんなにならんで済んだかもしれへんな）

「まあ、俺は正式なメンバーやあらへんし、大した事は知らへん

のや」

自分はこれ以上は知らない、両手を挙げてアピールする平次

組織に関し本当に何も知らない平次にコナンは呆れ果てていた

「おい……、おめえ俺より知らねえじゃねえかよ」

「じゃあないやろ、あのくそ親父任務以外は何も言わへんのやから？」

呆れた視線に肩を竦めた平次は、俯いて真っ青な顔色をした和葉に気が付いた

（和葉……）

（まさか……まさか……まさか、お父ちゃん!!）

最悪の思考が和葉の脳裏を過る

嵐の前の静けさ

（まさか……、お父ちゃんもその組織に、平次ん所のおじちゃんと潜つとるんやろか？）

（もしそうやったら……お父ちゃんも？）

悪い方へ悪い方へと思考が傾き次第に再び目が潤み始める和葉

そんな和葉の様子に気が付いた蘭は心配そうに覗き込んだ

「どうしたの、和葉ちゃん」

「何でもあらへんよ、蘭ちゃん？」

無理に笑顔を作り、微笑む和葉

十七年側にいた平次には、和葉が何を考えているか容易に想像が付いた

「安心せい、お前のおとんはNOCとちゃうで」

「ほんま平次！！」

「ああ、お前のおとんもキャリア官僚やから親父が潜つとる事情は知ってはるけど、それだけや」

「良かった〜？」

真っ青になっていた和葉は忽ち満面の笑みを浮かべ平次に笑い掛けた

「つたく、相変わらずのファザコンやな？」

「うっ……ええやん。心配なんやから！！」

「誰もあかんって言うてへんがな？」

平次が安心する様にくしゃりと頭を撫でると、和葉は頬を膨らませながらも嬉しそうに微笑んだ

賑やかになった有希子の病室は何時も通りの夫婦漫才を繰り広げる平次と和葉の姿で、束の間笑いに包まれていた

（良かった……和葉ちゃん）

（一時はどうなるかと思ったが、案外強かったな……彼女）

平次の裏の姿を知った和葉

そのショックをコナンや蘭・有希子は案じていたが、西の高校生探偵服部平次の幼馴染みであり、大阪府警本部遠山銀司郎刑事部長の愛娘である遠山和葉の精神は、思いの外しなやかで強靱な精神をしていた

常に賑やかな有希子の病室……

その後もガードの必要がない位に世界中から来客が途絶える事はなく、組織のメンバーらしき人間達が現れる事はなかった

平次が成田救急病院に泊まり込みコナンのガードに付いている頃、大阪府警本部の最上階本部長室では、親友である銀司郎が平蔵に対し心配そうに声を掛けていた

「どないする気なんや、平蔵」

「この儘行くと、下手したら平次君、FBIに身柄拘束され兼ねんで？」

長年犯罪組織に潜り続けている平蔵、黒の組織を壊滅させるべく心を鬼にして尽力して来た

だが……その代償はあまりにも大きかった

「……わあっとる」

平蔵とて人の子

平次が……我が子が可愛い

二年前、我が子の命を助ける為とは言えども苛酷な決断をさせて仕舞った事を、平蔵は悔いていた

「あん時は仕方がなかった……、ああせんと平次は殺されとった」

「ああ……、平次君を守る為には仕方がなかった。せやけどFBIはそうは見とらへんで？」

「やろうな……、せめて工藤君が生きとったら未だ手立てはあったんやが？」

「死んではったそうやな」

「ああ、平次の言う通りやったらな。あん坊主がもし工藤新一ならFBIに話を通して保護出来るんやが、儂やとFBIと接点がないさかい保護出来へん。儂の所為で罪を犯さしてもうた我が子を……、儂は守ってやる事すら出来ん」

革張りの椅子の背凭れに深く腰掛け銀司郎に背を向ける平蔵は、深い溜め息を吐いて顔を歪ませた

「平蔵……」

寡黙な親友をただ見守って来た銀司郎、漆黒の闇に引き裂かれ様としている二人の為に何も出来ない自分が腹立たしかった

（俺は何も出来へんな……）

不気味な程静まり返った日常、その時は目前に迫っていた……

これ迄、僅かな綻びも生じずに漆黒の闇に包まれて来た黒の組織

それが、飛行機墜落事故と言う偶発的惨事によって亀裂が生じ始めた

長年組織に忠誠を尽くして来たジン・ウォッカ・キャンティ・コ
ルン

組織から追っ手が掛かるや否や、反ジン派のメンバー達が挙って
名乗りを上げた

>ドン！！ ドン！！<

人気の少ない繁華街の細道で、どす黒い血溜まりの中に横たわる
黒のライダースーツに身を包んだ二人の外国人らしき男達を見下ろ
すキャンティとコルン

組織の中でも指折りのスナイパーの二人にとって、昨夜から立て
続けに現れる組織の追っ手を仕止める事は雑作もない事だった

「キャハハ、馬鹿な奴等だね。あたい等に敵うと思ってんのかい？」

「こいつ等……馬鹿」

「キャンティ・コルン、行くぞ」

短銃を懷に仕舞い込んだ二人はジンに促されてその場を立ち去って行った

「あいよ、ジン」

「……解った」

手早くポルシェ 356Aに乗り込み走り去ったジンが現れた先は……、米花二丁目に位置する阿笠邸、研究を続ける哀の元だった

「ここかい、シェリーがいるって所は」

「ああ……」

堂々と愛車を乗り付けたジンは、キャンティとコルンを見張りへ残して、ウォッカと共に哀の元へと向かった

「キャンティとコルンは見張ってろ」

「あいよ、ジン」

「解った……」

内側から施錠された鍵を難なく開錠し阿笠邸へと侵入したジンとウォッカは、珈琲を手に驚く阿笠の前へと立ちはだかった

「だ……誰じゃ？」

顔色を真っ青に変えて大粒の冷や汗を流して平静を装う阿笠は、哀を守るべく哀がいる地下室を背に佇んだ

（遂に哀君が見付かって仕舞った？）

（新一が大変な時にどうしたら良いんじゃない？）

「な……何の用じゃ？」

ジンを前にして震えが止まらず、カチャカチャとコーヒーカープの音を立てる阿笠を鼻で笑うジンは、銃口を阿笠へ向けて目的である哀の所在を問うた

「爺に用はない、シェリーは何処だ」

「あ……、シェリーなんて娘はおらん？」

思わず哀君と言い掛けた阿笠は慌てて言い直して誤魔化したのが、元より震える体と声では説得力がある訳もなく直ぐに見破られた

「誰も娘とは言ってねえがな……」

「う……し、知らんと言ったら知らん？ さっさと帰ってくれ？」

ジンの罠にまんまと引っ掛かり微かに地下への階段を見た阿笠をジンとウォッカが見逃す筈もなく、懸命に取り繕う阿笠を押し退けると地下への階段を降り始める

「ああ……、用が済んだらな」

「邪魔だ、退け？」

銀の謀略

薄暗い地下の研究室

キーボードを叩く軽快な音だけが響く中、突如阿笠の悲痛な声が哀の耳に届いた

「「逃げるんじゃ、哀君!!」」

「!! 博士……?」

瞬間的に立ち上がり阿笠の元へ行こうとドアへ走った哀の前に、階段を降りて来たジンが立ちはだかる

「ジ………ン」

遂にジンへ見付かって仕舞い、震えながらパソコンの前迄後ずさる哀

（見付かって仕舞った……遂に……）

ジンは漸く再会した哀を前に、冷淡な笑みを浮かべて声を掛けた

「よくシェリー、会いたかったぜ」

（見付かった……）

（逃……げ……て……皆、工藤君……！）

（お願い……逃げて……！）

椅子の背凭れをきつく握り締め上のリビングにいた筈の阿笠を案じる哀

（博士……無事でいて……）

真っ青な顔色で自分に関わって仕舞った自分の所為で巻き込んで仕舞った人々、元太・歩美・光彦・阿笠そして……常に哀を守って来たコナンの無事を祈りながら、哀は心中で詫びていた

（ごめんなさい……皆……私の所為で……）

ほんの束の間、仮初めながらも楽しい日々を過ごさせてくれた、心優しい人々を心の中で案じる哀を嘲笑うかの様に、ジンとウォツカは不気味で冷淡な笑みを浮かべた

「まさかガキの姿をしているとは思いやせんでしたね、兄貴」

「ああ……、あの方の言った通り本当にガキの姿をしてるとはな」

底冷えする地下の寒さも相まりガタガタと震えて強張る体と心を鼓舞しジンを睨み付ける哀だが、小学生ではただ虚勢を張るのが精々だった

「あら、私を見付けるのに随分と時間が掛かった割りには、幼児化した事に気付いてなかったのね」

「ふん……俺は出来損ないの名探偵を開発したお前程、薬学に精通している訳ではないからな。幼児化するなんぞ予想外も良い所だ。あの方が言われる迄夢にも思わなかったさ」

「ふふふ……、APTX4869による幼児化は偶発的な副作用の賜物、薬学に精通してもいない貴方達に解らなかったのも無理はないわね」

「ちっ……、口の減らねえ女だ」

「シェリーは相変わらずですね、兄貴」

「ああ、この女はこう言う女さ」

引き攣った顔で痛烈に言い放つ哀の皮肉った言葉に顔を顰めるジンとウォッカ、久々に交わした哀との駆け引きをジンは楽しんでいる様だった

「あら、誉めてくれたんだもの、お礼を言わなきゃならないわね」

言葉でジンを皮肉り倒しながら、ジンが然り気無く言った言葉を聞き逃さなかった哀の脳裏にある仮説が浮上した

（でも……あの方の言った通り？ 一体どういう事……まさか最初から私達の正体がばれていたとでも言う訳？）

「でも、あの方から言われたってどういう事か説明して貰えるかしら？」

「さっきも言ったけど、APTX4869による幼児化は偶発的な

副作用によるもので、その確率は一%以下即ち服用すれば確実に死ぬと言う代物よ。あの方はそれを解っていたと言うの？」

目論み通り探りを入れて来る哀に乗せられた様に見せ掛けると、ジンは組織の目的を教える事で哀が毒性を消すだけの解毒剤を作る様に巧みに誘導して行った

「……あの方はシェリー、お前より薬学に精通しておられる様でな、出来損ないの名探偵の完全な解毒剤とA P T X 4 8 6 9を混ぜ合わせれば、組織の研究が完成するとの仰せだ。シェリー、お前か今迄生かされていたのは組織の研究を完成させる為だ」

（何ですって!!）

（A P T X 4 8 6 9と解毒剤を混ぜ合わせれば組織の長年の研究が完成する？）

「……完成する……ですって……」

「シェリー、早急に出来損ないの名探偵の完璧な解毒剤を完成させて。それ迄は、お前とお前に関わった奴等は生かしといてやる」

茫然と佇む哀に最後通告を突き付けたジンは、A P T X 4 8 6 9

のデータを納めたフロッピー・ディスクを黒いコートの内ポケットから取り出して哀に手渡した

「出来損ないの名探偵のデータだ、特別にくれてやる」

（A P T X 4 8 6 9 のデータ……本当なの）

ジンへの恐怖から手の震えが止まらない哀は、辛うじて手を差し出してフロッピー・ディスクをジンから受け取った

「本当なのね……」

今一信じられず、思わず確認する言葉を発した哀の言葉に、ジンは口角を僅かに上げて肯定すると、ジンはウォッカと共に地下から外に出る裏口から悠然と立ち去って行った……

「完成したら連絡しろ……」

ジンとウォッカが裏口から立ち去った後、哀は張っていた糸が途切れずると床に座り込んだ

「そんな……、作りたくないのに……どうして……こんな……どう

して……」

(どうしたら良いの……お姉ちゃん)

今の哀はもう、昔とは違う

命じられる儘両親の研究を受け継いでA P T X 4 8 6 9を開発し、間接的に多くの人々の命を奪った組織の科学者・シェリー事宮野志保ではない

灰原哀として阿笠と共に暮らし小さな仲間、元太・光彦・歩美等を得て、それなりに楽しい日々を過ごして来た哀は命の重みを知り、たった一つしかない命の貴さと平穏と言う名の幸せを初めて知った

友人を得て失いたくないと思う程大切な存在になって仕舞った、小さな子供達の命を守る為に取り手段は、最早一つしかなかった

「ごめんなさい……工藤君……、ごめんなさい……蘭さん……」

自分を責めて肩を震わせて啜り泣く哀の泣き声が地下の研究室に響いていた

(哀君……)

階段を転げ落ちる様に降りて来た阿笠は、啜り泣く哀の泣き声に扉を開ける事は出来なかった

「ごめんなさい……工藤君……、私……作れない」

「あの子達の命には代えられない、……ごめんなさい……工藤君、蘭さん」

A P T X 4 8 6 9 の被験者であるコナン

コナンの帰りを待ち続ける蘭

ひたすら詫び続ける哀

ジンに一体何を言われたのか？

阿笠にそれは解らなかったが、工藤新一がもう戻らないと言う事と解毒剤を作れないと言う事は、容易に理解出来た

(A P T X 4 8 6 9 の事でジンに何か言われたんじゃないな……。あの
子達の為に哀君は解毒剤の開発を断念せざるを得なくなって仕舞っ
たんじゃないな)

……ごめんなさい、工藤君

……ごめんなさい、蘭さん

漆黒に染まりきった男（前書き）

お気に入り登録&評価&沢山のアクセス本当に有り難う御座います
m (m

キャラ達が暴走中です？

漆黒に染まりきった男

一先ず哀の無事を確認した阿笠はほっと安堵の溜め息を吐いたが、
「銃で、怪我はしていないか？」
「何か酷い事を言われてないか？」
「……と不安は尽きなかった」

（哀君、怪我はしとらんかの？）

「何時迄も泣いていられないわ。工藤君と話さなきゃ……」

（例え、工藤君や蘭さん・有希子さんにどんなに罵られても……）

哀が覚悟を決めた時、扉の向こう側から酷く心配した阿笠の声が
聞こえて来た

「「哀君？ 哀君？」」

「あ……博士！」

阿笠の声で正気に戻った哀は、扉に駆け寄るとジンが掛けた鍵を
開けて、互いの無事を確認した

「哀君、無事じゃったか？」

「博士、怪我は！！」

「僕は大丈夫じゃよ。哀君こそ、酷い事言われとらんかの？」

「博士……」

何時も自分やコナンの事を案じる阿笠、見ず知らずの他人である自分を保護し思う存分研究出来る様に地下室を提供してくれている家主である阿笠は、一人で組織に立ち向かうコナンの良き理解者だった

「私は大丈夫よ……、でも工藤君は……」

俯いて拳を握る哀に優しく諭して聞かせる阿笠

「案ずるより産むが易しじゃよ、哀君」

「博士……」

こくりと頷いた哀の髪を撫でながら、阿笠は自責の念に苛む哀の心を和らげる様に優しく微笑んだ

「さあ哀君、出掛けようかの……新一と話さなきゃならんじゃろ？」

「そうね……博士、車を出してくれる？」

「勿論じゃよ」

「有り難う、博士」

阿笠と共に地下を後にした哀は、コナンに残酷な宣告をするべく成田救急病院へと向かった

この時、阿笠邸より少し離れた米花町のとある場所では、ジンと哀とのやり取りの一部始終をベルモットが盗聴していた

「ふふふ……、まさか貴方が組織を裏切るとは思わなかったわね、ジン……」

（あの方からは殺害指令が出てるから、今更どちらでも同じ事……

さあ、どうしようかしらね)

指でテーブルを叩いてリズムを取りながら煙草を吹かして考え込んだベルモットは、暫くの間思考の海に潜り、ジンに関して知っている情報を精査し始めた

ジンは闇雲に殺しに行っても、返り討ちに合うのは目に見えている。しかも今は、キャンティとコルンがジンやウォッカと行動を共にしている。その為、流石のベルモットと言えども下手に動けないでいた

(生半可な作戦では、私の方が殺されるわ……。何か手立てを考えないと、とてもジンは殺せない……)

(にしてもジンの行動は不可解だわ)

(ジン……貴方、一体何を考えているの？今迄の貴方は、組織を守る為なら関係者諸とも容赦なく皆殺して、組織を裏切ったメンバーは誰であろうと始末して来た……。組織に忠誠を誓い組織の為に尽くして来た冷酷非道のコードネーム ジン……。それが貴方だった。なのに今の貴方は、とても同一人物だと思えない程対極の行動を取っていて、過去の貴方とあまりにも掛け離れている)

(幾らあの方の命令があると言え、組織時代の貴方ならば、漸く見

付けたシェリーを殺さないで帰るだなんて、先ず有り得なかったわ。組織を裏切ったシェリーと幼児化して生き残った工藤新一……シルバーブレッドを間違いないで殺していた。二人が関わった人間諸とも殺した筈……。それを生かしているなんて、組織を守る為に数多くの人間を容赦なく殺して来た貴方とは、到底思えないわね）

（今のジンはどちらかと言えば、シルバーブレッド側の行動を取ってる。何故、シェリーとシルバーブレッドを殺さないで生かす方向で行動しているのか……。それが解らないと殺すに殺せないわね。あのジンが、何の準備もなく組織を裏切るとは思えないわ。ジンはどう見ても、組織の研究の完成を阻止しようとしているとは思えない。少ない……。少し調べる必要がありそうね……。何か裏がありそうかわ）

立ち上がり煙草を灰皿に揉み消したベルモットは、バイクのキーを手にとって部屋を後にしようとした所で、古い記憶を掘り起こした

（確かジンはダウンタウンに生まれ、戸籍はおろか国籍すらなかった筈……。果たして本当かしら？）

（仮にアメリカ国内で生まれだとすると、アメリカで生まれた子供は身分に関係なくアメリカ市民権を得る事になる。戸籍がないと言う事は先ず有り得ない。そんな事は組織加入の折りに徹底的に調べている筈、組織が調べたにも拘らず解らなかったジンの素性……）

（まさか……証人保護プログラム？）

（組織が殺し損ねた子供……ジンが何だかの機関に保護されて成長し、NOCとして潜入していたとしたら？現に、FBIのジョディ・スターリングもそうだったわ。証人保護プログラムに守られて、その所在はようとして知れなかった）

（まさか……あのジンがNOC？）

（だとしたら一体何処の……）

（日本警察のNOCは服部平蔵……、キールを疑っていた事を踏まえるとCIAはパス……、ましてや赤井秀一のFBIは絶対に有り得ないとくれば、残るは……ICPO？）

（アメリカのICPOなら、証人保護プログラムでNOCの素性を隠す事が出来る。あのジンがNOCだなんて、考えた事もないし有り得なかった。けれど……もし、もしそうだと仮定するならば、ICPOに友人がいると言う工藤優作を、ジンが一目置いている事も説明が付くわ……まさか……まさか……！）

この瞬間、ベルモットは組織のパソコンを起動してジンが関わったデータを洗い始めた

様々な任務に従事して来たジンを疑った事等、ただの一度もない

一度思い立った思考はベルモットの脳裏にこびり付いて離れる事はなかった

（何かある筈……）

（データコピーの形跡がないなら、恐らくは足が付かない手作業で同じファイルを作成して渡した筈。ジンと関わりの深いメンバー……ウォッカ・キャンティ・コルン、そして実行部のメンバー）

（研究機関のメンバーは、シェリーが裏切って以降は立ち寄っていない。組織のメンバーの中でジンが接触しても怪しまれないメンバーは、ジンの腰巾着であるウォッカ……、ただ一人……）

（ウォッカは、ジンの命令で動いていたから好都合だった筈……）

（ウォッカが定期的に接触していたメンバー、もしくは場所……、ふふふ）

漆黒の衣を脱いだ男

「良いんですかい、兄貴」

ハンドルを握るジンに対して、不敵な笑みを向けて来るウォッカの問いにジンは、組織時代とは打って変わり穏やかな笑みを浮かべていた

「ああ、もう俺はジンじゃねえからな」

「それもそうですね。組織の為に、もう殺す必要はないんでしたね」

「民間人を殺す事はもう二度とねえだろう。まあ、組織の追っ手は殺す事になるが仕方ねえさ」

「放置するには些か危険過ぎやす、特例措置を取った国際社会の判断は、已むを得ねえと思いやすぜ」

「ああ、日本の法律では物証なしの立件は先ず不可能だ。俺達関わった山は証言出来るが、他の奴等が請け負った任務は不可能だからな。刑期を終えた狂犬達を世に放つ事は出来ないと言う、上層部が下した判断は民間人を守る為には已むを得ねえ処置だ」

つい先程迄、哀に対して放っていた殺伐とした雰囲気は消え失せ、
淡々と言葉を紡いでいるジンは溜め息を吐いて疲れた表情を見せた

「兄貴……、運転代わりやすか？」

「顔色悪いよ、ジン」

ジンを気遣ったウォッカが心配そうに声を掛けると、後部座席で
二人の会話を黙って聞いていたキャンティとコルンが身を乗り出し
て来た

「ウォッカと代わりなよ、ジン」

「ジン……疲れてる」

これ迄、相手を気遣う事等なかったキャンティとコルン、急激な
環境の変化から来るものなのか……、二人とも穏やかな表情を見せて
いた

「ああ……、流石にこうも長い間猿芝居を続けると堪えるな」

三人の言葉に甘えて愛車を路肩に停めたジンは、助手席のウォツカと運転を交代するべく重い体を動かした

「魚塚、悪いが運転代わってくれ」

「へい、構いやせんぜ兄貴」

快く運転を引き受けたウォツカは、ジンに代わって運転席に座ると再び車を発進させた

「数十年の間、ジンを演じ続けたんです。疲れて当然ですぜ、兄貴」

「でもまさか、ジンがNOCだったとは思わなかったね」

「俺も……驚いた」

「くくく……だろうな」

してやつたり顔で笑いを堪えるジン

「FBIの赤井秀一も面くらいやすぜ？」

赤井が驚いた顔を想像して、ハンドルを握りながら笑いを堪える
ウォッカと同様に、キャンティとコロンもまんまと騙されているF
BIを想像して笑い転げ始めた

「キャハハ、驚くだろうね」

「俺……楽しみ」

「ああ、赤井秀一の豆鉄砲食らった顔を拝むのが楽しみだ……」

笑い声に溢れたポルシェ 356A

こんな穏やかな光景が車内で見られるのは……、数十年振りの事
だった

「でもジン、あたい等迄良いのかい？」

「俺……沢山殺した」

「それはあたいもだよ。確かにさ、生きる為には仕方なかったけど殺人迄犯したあたい等が更生するだなんてさ……」

自分達の正体を知り驚きはしたものの、付いて来ちまったんだ、関係ないよ……と受け入れたキャンティとコルン

数十年前優作が自分にした様に、ジンはキャンティとコルンを更生させるべく、ジンは二人の戸籍を作成し新たな居場所を与え様としていた

これに驚いたのはキャンティとコルン本人に他ならず、予想だになかった展開に戸惑いを見せたのは言う迄もない

嘗てない事態に俯いて困惑した表情を浮かべるキャンティとコルン

嘗て自分も通って来た道に戸惑う二人を、ジンの穏やかな声が導いた

「それは俺も同じだ。優作に拾われなければ、お前達と同じ道を辿っていた。あの日……、伝を辿って戸籍を作成してくれた優作に、連れていかれた場所には驚いたがな」

「ジン……」

「くくく……、確かに驚きやすね。何せ場所が場所だ。そのお陰で俺は兄貴に出会いやしたぜ」

「ふっ……そうだったな。あの日、優作に半ば無理矢理連れていかれた場所ではあったが、与えられたこの仕事は俺に合っていた様だ」

「……兄貴」

懐かしい日を思い出したジンの脳裏には、在りし日の光景が鮮明に浮かび上がっていた

（安直なネーミングも父親そっくりだな……、工藤新一）

「まあ、その怒鳴られていた新米と組まされて、組織に潜り込む羽目になるとは思わなかったな」

「キャハハ。怒鳴られたのかい、ウオツカ」

「ウオツカ……らしい」

「悪かったな？ 兄貴？」

新米時代の失敗談を暴露されたウォッカを乗せたポルシェ 35
6Aは、とあるビルの地下駐車場に吸い込まれる様に入って行った

江戸川コナンを作り出した男に名前と居場所を与えた張本人は、
未だ深い眠りに就いていた

—ピッ……ピッ……ピッ……—

規則正しい電子音が響くICUで眠り続ける優作が目覚める兆候
は未だない

医療機器に表示されている数値をカルテに書き込んで行く看護師
の表情は、何処か冴えなかった

「工藤さんの容態はどうだね？」

「先生、安定して来てはいますが、目覚める兆候は未だありません」

「そうか？」

深い溜め息を吐く担当医師は、硝子張りの廊下に佇んで、父親の目覚めを待つコナンに目を向けた

「あの子の為に、早く目覚めて欲しいが……」

「ええ……、コナン君……工藤さんが目覚めるのをずっと待っているんですよ」

「離れていても父親の存在は大きい。工藤さん程の人なら尚更……」

「そうですね……」

優作が飛行機墜落事故に遭遇し、深い眠りに就いて二日目が過ぎ様としていた

（父さん……父さん……）

I C Uの全面硝子張りの窓の前に佇み、優作のベッドのある方向を見つめ続けるコナン

その傍らには、平次の姿がある

(工藤……)

有希子の病室で告白と情報交換をした後、連れ帰って休ませ様とした蘭の提案を頑なに拒絶した、父親の側を離れ様としないコナン

I C Uの前で父親の目覚めを待つあまりにも痛ましいコナンの姿は、医師や看護師の涙を誘っていた

その為、優作を診察した看護師は容態を教える様になっていた

「コナン君」

「あ……、看護師さん」

コナンの目線迄しゃがみ込んで視線を合わせた看護師は、何時も笑顔で容態を伝える様にした

「お父さんの容態は安定してるわ」

「ほんと!?!」

「ええ、順調に回復されてるから大丈夫よ」

「有り難う」

「コナン君も少し休まないと駄目よ？」

「うん……（父さん……）」

看護師に諭されても、コナンは頑なに動こうとしなかった

あの推理の答え（前書き）

今回はサイドストーリー的なお話です。

中身は……もう解られますよね？

こう言う話は苦手分野なので、拙い文章なのはご容赦下さい m

（ m

あの推理の答え

ジンの発言により素性がばれて仕舞ったコナンは、蘭を伴い冬の夕陽が鮮やかに染め上げる屋上へ来ていた

どちらからともなく無言になり気温が落ちて寒さが堪え始めた頃、コナンは漸く口を開いた

「ごめんな……蘭、黙ってて……」

屋上の柵に寄り掛かり消え入りそうな声でぽつりと呟いたコナン

拳を握り辛そうに言葉を紡いだコナンを見て、蘭は優しい笑みを浮かべると静かに口を開いた

「ううん……、新一は私を始め、大勢の人達の命を背負ってたんだもん。誰も巻き込まない様に一人で組織に立ち向かって来た……。言うに言えなかった事は私にでも解るよ。十七年間、幼馴染みとして新一を見て来たんだもん……」

何処か吹っ切れた様な蘭の笑顔

この瞬間、コナンの脳裏に蘭の泣き顔が脳裏に浮かび、コナンは改めて蘭には敵わないと悟った

「蘭……（敵わねえな……）」

「新一が元の体に戻りたくないのなら、コナン君の儘でも良いよ？」

「良いのか……蘭、十歳離れてんだぜ？」

「平気よ、だって……側にいてくれるんでしょ？ 私がコナン君が成長する迄待てばいいだけだもん」

「サンキュ……蘭。正直な所……俺、迷ってた？」

「工藤新一として生きるか」

「工藤新として生きるか」

「未だ、どうするか決めてねえが、奴等を壊滅させたら俺が十八になったら……結婚しよう」

真っ直ぐ、蘭を見つめて

小さな紅葉の手を差し伸べる姿

小さくなった幼馴染みの姿は、蘭には十八歳の頃よりとても頼もしく見えた

「新一い」

ぽろぽろと真珠の様な涙を溢しながら、コナンに抱き着いた蘭は小さな声でその言葉を告げた

「……はい」

「やりい……」

日没を目前に一層赤く染め上げられた屋上で、二人はどちらからともなく口付けを交わした

「……好きだ」

口付ける瞬間囁いた言葉……

蘭は満面の笑みで包み込んだ

「大好き……」

コナンと蘭の影が重なった瞬間

有希子達が、こっそりと覗いていたのは言う迄もない

「やるわね、新ちゃん」

「夕陽を背に告るって……気障なやつちゃ？」

「ええなく、蘭ちゃん」

思わず和葉がぽつりと呟くと、周囲は小さな溜め息を吐いた

「やあね、和葉ちゃん」

「派手なラブシーンしただろうか？」

「え？あれは？」

顔を真っ赤にして否定する和葉だったが、平次が耳元で囁いた、その言葉に一筋の涙を溢した

「お前は俺のもんや……」

「……うん、平次」

親友の告白劇には気付かずに、寄り添うコナンと蘭

名残惜しそうに唇を離れた後、コナンが上着を脱いで敷いたコンクリートの床に、夕陽を前にして寄り添う様に座っている二人が、背後の騒ぎを知ったのはもう少し後になる……

夕陽が落ちて、漸く腰を上げた二人は……泣いている和葉の肩を抱いた平次を目撃した

「「あ……」」

コナンと蘭が声を上げた事で、漸く正氣に戻った平次と和葉は…
…顔を真っ赤にして慌てて離れた

「く……工藤？」

「良かったね、和葉ちゃん」

「蘭ちゃんも良かったな」

「うん♪」

慌てて離れても後の祭り

幸せそうに微笑む蘭と和葉

告白劇の軍配はコナンに上がった

「プロポーズした新ちゃんの勝ちね」

「蘭を泣かせたら承知しねえぞ!!」

「はい」

「新ちゃんを宜しくね♪」

「宜しく願います?」

奇しくも東西の幼馴染みのカップルが同日同時刻に結ばれた屋上は、暫くの間……患者達の間で告白劇が相次いだと言う

「もう真っ暗や、そろそろ帰らな」

「ほんと、新一も一度帰ろう?」

目に隈を作っているコナンを心配そうに覗き込む蘭

コナンは済まないと思いながら病院を離れたくはなかった

「わりい……蘭、俺がいてもしょうがねえんだけどよ。組織の奴等

が父さんを狙うかもしれねえから、側にいてやりてえんだ」

「新一……、解った。じゃあ、後で着替えとか持ってきて来るから」

「サンキュ、わりいな蘭」

「良いつて、突然こんな事になったら私も同じ事してると思うから」

心配ではあるが、一先ず笑顔を見せるコナンに安心した蘭達は、一旦病室を後にする事にした

「ほな……俺、姉ちゃんが来たら一回帰って風呂入らせてもらってええか？」

「あ……そうだね、用意して置くからお風呂ゆっくり使って」

「おおきに」

「平次も泊まり込んでるし、疲れとるんちゃう？」

「俺はどうって事あらへん、和葉は先に大阪帰ったってかめへん

で」

「うん、お父ちゃんに連絡入れてから決めるわ」

「せやな、俺も一度連絡入れるわ」

軽く手を振って有希子の病室を後にした蘭・小五郎・和葉を送り出したコナンは、深い溜め息を吐いて表情を翳らせた

「新ちゃん？」

「大丈夫やて、工藤」

嘗てない程、動揺している息子に気が気ではない有希子は、ただ優しく抱き締めてやる事しか出来なかった

「新ちゃん、優作はほんの少しだけ寝てるだけよ」

「ああ、解ってはいるんだ……。父さんの容態は順調に回復してきてっし、心配要らねえって頭では解ってっけど……。こんな事、一度もなかったから不安で仕方ねえんだ」

「工藤……」

「新ちゃん……」

これ迄、コナンが知る限り優作がコナンの前で寝込んだ事等一度もない。だが……コナンもまた、不安な表情を見せた事等ただの一度もなかった

ホームズが好きで、優作の書齋に入り浸りホームズを始めとする世界各国の推理小説を読んで育ったコナンは、同年代の子供と比べ知能が高く自信家で、ホームズを心酔しホームズのような探偵に憧れて立派なシャーロキアンになった新一が弱味を見せたのは、初めての事だった……

突き付けられた決断―前編―

「阿笠博士・灰原」

「よく、ちっこい姉ちゃんと阿笠のじいさんやないか」

面会時間終了間際

沈痛な面持ちをした哀が阿笠に付き添われてコナンの元を訪れた。
その表情は土気色で、何があったのか……

コナンには容易に想像が付いた

（ジンの野郎が来たな……。くそっ、何で気が付かなかったんだ！
！）

あの時、何故直ぐにでも哀の元へ駆け付けなかったのか、気が付かなかった自分を責めるコナンだったが、ここで一つの疑問が浮上した

（灰原の所に来たんなら、何で……ジンは灰原を殺さなかったんだ？
杯戸シティホテルの時には、迷う事なく殺そうとしたくせに…

…何で灰原を殺さねえんだ？)

コナンと哀の元を訪れたジンの不可解な行動に疑念を抱くコナンの思考を遮る様に阿笠が口を開いた

「新一……服部君、優作君の容態はどうなんじゃ？」

幾分顔色が悪い阿笠の異変には平次も気付いており、その場を和らげる様に優作の容態を案じる阿笠の問いに答えた

「優作はんの容態は安定しとるそうやで、さっき看護師の姉ちゃんが言うとったわ」

「そうか、良かったのー新一」

「ああ……、未だ目を覚まさねえけどな」

今はこんな所でぼけっとしている時じゃない……。組織が自分と灰原の正体に気付いていると解った今、一刻も早く防護策を考えて対抗策を取る必要がある

それはコナンも良く解っていた

だが、コナンは優作の側を離れる事がどうしても出来なかった

工藤新一の死亡が実質的に濃厚になった今となっては、動けない優作が狙われる可能性が極めて高かったからだ

「目を覚まさねえ父さんと、未だ完治していない車椅子の母さんの側を離れる事は出来ねえ……。俺……一人息子だからよ」

「新一……」

I C Uの中にいる優作を見つめるコナン……

普段のコナンなら冷静に状況を判断する所だが、著しく動揺した今のコナンでは組織と渡り合う事等、到底不可能である事は明白、その為優作が心配で堪らないコナンと蘭達の周辺には、二十四時間体制でF B Iのガードが付いていた

「工藤……」

「……工藤君」

拳を握り意を決して言葉を紡ぐ哀に穏やかな笑みを浮かべると、コナンは静かな声で哀の言わんとする言葉を紡ぎ出した

「ジンが来たんだろ？ 少し前に、ジンとウォッカが突然来やがってよ。俺が工藤新一に戻る時には、組織の長年の研究が完成するとぬかして行きやがった？」

「！！（やっぱり来てたのね……）」

言おうとしていた事を先に言われた哀は驚いて一瞬目を見開いた後、拳を握り込んで言葉を絞り出す

「灰原、おめえ一体どう言う事か解るか？ 俺はおめえ程、薬学に精通している訳ではねえからよ」

「せやな、俺も姉ちゃん程やあらへんし……ジンの行動は理解出来へん、何でわざわざ教えに来るんや？」

この平次の言葉に弾かれた様に顔を上げた哀は、思う所があるのか詳細を尋ねて来た

「ちょっと、わざわざ教えに来たって……ジンは何をしに来たの？」

「ああ、FBIは父さんをあの方じゃねえかと疑っていたらしいんだがな。ジンはジョディ先生達の脇を通り過ぎる瞬間、こう言ったんだよ」

「工藤優作はあの方じゃねえぞ。まあ、同等の推理力はお持ちの方だな……ってな」

「――!!」

コナンの口から紡がれた言葉は哀が自分の耳を疑いたくなる程、信じ難く有り得ない言葉だった

「な……んですって？」

「信じらへんやろ？」

「せやけど、ほんまの事なんや？」

（嘘でしょう……組織を守る為ならどんな事でもして来たジンが、そんな事を言う筈がないわ……。ジン、貴方一体何を考えてるの？）

哀がシェリーとして知っているジンとは、あまりにも掛け離れた行動を取っているジン

その為、哀は何者かの変装ではないのか……と、疑いを持った事は至極当然と言えた

「ベルモットか誰かの変装じゃないの？」

「成る程な……、ベルモットが変装していた可能性も否定出来ねえ。だが灰原、わざわざ今日変装して来るより昨日母さんにmessageを託す方がより危険性はねえんじゃねえのか？」

哀の変装説にも一理はあるが、危険を犯して迄ジンに変装する理由がないのも事実だった

「確かにそうやな。わざわざ一番警戒される男に変装する必要はないんやろ。おまけに腰巾着のウォツカとキャンティ・コルンもおったしの」

「そう……、ウォツカ達もいたのね。なら、ジン本人と見て良さそうね」

「ああ、俺もジン本人だと見てる。だからこそ、理解出来ねえんだよ。ジンのあの不可解な行動がな」

「ベルモットとも思えないし、かと言ってジンが組織の情報を漏らすなんて考えられないわ」

「ああ、ジンの野郎は一体何を考えてんだ？」

「まるで、俺等側の行動としか思えへんな」

「まさか……」

「ジンに限ってそんな事有り得ないわ」

哀は平次が溢した眩きをきっぱりと否定したが、コナンはジンがNOCである可能性を視野に入れていた

（確かに、ジンがNOCとは信じ難い。そう仮定すると辻褄が合うのは偶然か？）

（判断するには、未だ情報が足りねえ。どうやら父さんが何か知っていたそうだが、目覚めるのを待つきゃねえ？）

「それもそうやな、となると……」

何者かの変装の可能性は低いと結論付けたコナン達には、最大の謎が浮上した

「もう一つ、俺が工藤新一に戻ると組織の研究が完成するという事は、一体どう言う事なんだ？」

「ああ、何で工藤が戻ると組織の研究が完成するっちゅうねん」

「APT X 4 8 6 9 絡みだとは解るが……、あれは未だ試作段階で未完成の筈だ。それに、奴等はコンピュータ・プログラマーを執拗に集めていた」

「プログラマー？」

「ああ、世界中の優秀なコンピュータ・プログラマーのリストを大金を出して買おうとしていたんだ」

「コンピュータ分野の研究もあるっちゅう訳か……」

「ああ、恐らくな」

この一年間に集めた組織の情報を記憶の底から掘り起こすコナン、腕を組み思考を掘り下げていく二人に、哀は意を決して口を開いた

突き付けられた決断―後編―

「工藤君が元の体に戻る事が何故組織の研究が完成するのか……、それはA P T X 4 8 6 9の完璧な解毒剤が必要不可欠だからよ」

「なんやて、ちょ説明しいや!!」

（完璧な解毒剤が必要不可欠だと……一体どう言う事だ？）

（A P T X 4 8 6 9事態を研究開発した上で、完成させるんじゃないかねのか？解毒剤が重要な鍵を握っていると言う事は、A P T X 4 8 6 9は単体の儘では未完成と言うって事か？）

驚き哀に詰め寄る平次に対して僅かに目を顰め冷静に問い掛けるコナンは、限られた情報から懸命に糸口を見出すべく、思考をフル回転させ始めた

「おい灰原、A P T X 4 8 6 9の完璧な解毒剤が組織の研究の完成に必要不可欠とは、一体どう言う事なんだ？」

「もしかしてA P T X 4 8 6 9の試作品は、単体では未完成と言う代物って事か？」

的を射たコナンの推理

刻々と迫るその時を前にして、哀は目を伏せ気持ちを落ち着かせると、無言の儘心配そうな眼差しで見守る阿笠に後押しされる様に、最も残酷な事実をコナンへと告げる

（ごめんなさい……、工藤君）

「さつきジンとウォッカが突然やって来て、こう言ったのよ。APTX4869の試作品と解毒剤を混ぜ合わせる事で、組織の研究が完成する……あの方がそう言ったそうよ」

「な……んだと……？」

驚愕し、目を大きく見開いた、コナンの脳裏にはあの言葉が木霊した

—We can be both of God and the
devil. Since we're trying to
raise the dead again, the
stream of time.—

—我々は、神であり悪魔でもある。何故なら、時の流れに逆らって、死者を蘇らせようとしているのだから—

高飛車な女が言い放った言葉が蘇り、決して有り得ない、あつてはならない、神の領域に属する事象が行われ様としている

それを悟ったコナンに残された選ぶべき道は、一つしかなかった

（わりい……父さん・母さん……済まねえ……蘭……！）

待っている、待たせ続けている蘭に対し、心中で詫げるコナン

コナンの真摯な蘭への想いを、痛い程理解している平次と阿笠

事ある毎にコナンの蘭への想いを嫌と言う程思い知らされて来た哀は、最悪の決断をさせて仕舞った加害者である自分を、この時程呪った憎んだ事はなかった

（ごめんなさい……工藤君・蘭さん……！）

（……ごめんなさい）

俯きながら辛うじて言葉を絞り出す哀

対して平次は何かならないのか……、何とかしてやりたいと、糸口を探るべく哀に問い掛けるが、哀の口から放たれた言葉は無情にも肯定の言葉だった

「……混ぜるって、あんな劇薬を混ぜてほんとに完成するんか？」

「どうやらそうらしいわね。私は混ぜ合わせる所迄至ってなかったし、解毒剤も未だ未完成だから、私も確認のしようがないけど……、間違いないでしょうね」

哀は両手を挙げて断言は避けたものの、開発責任者として冷静に判断を下した

解毒剤が完成する事で、組織の研究が完成するとは思っても寄らなかったコナンと平次は、予想だになかった事態に言葉を失い、顔を見合わせた儘暫し茫然と立ち尽くした

「ジンはあの方に聞いたんか？」

「ええ、あの方にそう言われたそうよ。だからあの方は私達が幼児

化した事実を知りながら、完成する迄は殺さずに生かしている……。ジンはその言っていたわ」

「ほうか……なら工藤とちっこい姉ちゃんの正体は、最初から全部ばれとったて見てええやろな」

「ええ、最初から全て計算ずくと見て間違いないわ。下手したら、お姉ちゃんがジンに殺されたのも、私に裏切らせて解毒剤を作らせて組織の研究を完成させる為に、最初から仕組まれていた可能性が高いわね」

「なんつう奴等や!!」

拳を壁に叩き付け怒りを露にする平次、罪悪感に押し潰されそうになりながらも、冷静に要点を纏めて言葉を紡ぐ二人のやり取りを無言で聞いていたコナンは、次第に崖っぷちへと追い詰められて行った

（くそっ……もう後がねえ）

（この儘じゃ、父さん母さん蘭達皆が殺されちまう!!）

哀が関係者と言う言葉を言わずとも、自分が置かれている現状は

嫌と言う程身に染みているコナン

解ってはいたコナンだったが、改めて死と隣り合わせに置かれて
いる残酷な現実を突き付けられ、何の罪もない無関係の人々を巻き
込み危険に晒す自分に腹を立てた

「……完成すれば用なし、即ち、関係者全員皆殺しっう訳か」

「工藤？」

拳をきつく握り込み

悔しさを声に滲ませながら

哀が言わんとする言葉を想いをくみ取り

コナンは苦渋の決断を下した

「……確認は、絶対に出来ねえ。一度だけでも作って仕舞えば最後、
人間は命の尊厳を忘れ去って、人間でなくなっただけで仕舞う……」

「命はたった一つしかない」

「だからこそ、命は至上の輝きを放ち、人はその瞬間迄死力を尽くす」

「APT X4869で幼児化して、確かに早く元の工藤新一の体に戻りてえ。蘭を待たせているし、父さんと母さんも口には出さねえが、俺が工藤新一に戻る事を望んでいる。けどよ、父さんや母さん・蘭におっちゃん・園子・服部・和葉ちゃん・阿笠博士・目暮警部・元太・光彦・歩美……俺に関わる人達の命を危険に晒して迄、犠牲にして迄、工藤新一に戻りてえとは思わねえ」

「諦めるつもりは更々ねえが、APT X4869と解毒剤を混ぜ合わせた薬剤が、死者を蘇らせる危険な薬物に繋がる解毒剤なら、俺は飲まねえ」

「……工藤」

真実を知り……自分の意思で、工藤新一を捨て去る決断を下した
コナン

苦渋の決断ではあったが、以前とは違い蘭の理解を得られている
現在、最悪の事態は免れていた

「……ほんとに良いの、工藤君。貴方は蘭さんを待たせてるのよ？
蘭さんだって、ずっと……ずっと貴方の帰りを待ってるのよ？」

今にも泣きそうな震える声で、再度確認する様に問い掛ける哀に、
コナンは頬を染めながら照れ臭そうに言葉を紡いだ

「蘭なら心配要らねえよ。今日な、ジンがばらしちまったんだよ……」

「蘭の奴……、十年待っていてくれるってよ」

闇を消し去った想い

一蘭の奴……、十年待っていてくれるってよー

十七年間、何時も側にいた二人

……新一と蘭

そんな二人は、運命のあの日、A P T X 4 8 6 9 によって引き裂かれた

コナンはA P T X 4 8 6 9を飲まされ、江戸川コナンとして毛利探偵事務所に居候しながら組織を追い続け、蘭は突然いなくなった幼馴染みを一年間ひたすら待ち続けた

直ぐ側にいるとは夢にも思わず、コナンを時折新一ではないのか……と疑う事もあったが、その都度巧みに誤魔化され続けた蘭だったが、新一がいない寂しさを埋めてくれた小さなコナンが新一だと、蘭が確信を持つのにそう時間は掛からなかった

どんなに誤魔化されても十七年間何時も側にいた幼馴染みを蘭が間違う筈もない

確信を持って仕舞った蘭は……

小さな姿で傍らにいてくれた、幼馴染みの成長を待つ事を選んだ

工藤新一としての地位も名誉も名声も平成のシャーロック・ホームズ・日本警察の救世主の称号も……、文字通り命以外の全てを失って、ひたすら待ち続けてくれた蘭にプロポーズしたコナンは照れ臭そうに視線を逸らした

「あら……、顔が赤いわよ？」

「べ？ 別に？」

顔を真っ赤に染めたコナンの様子に察しが付いた哀は、コナンを少しばかりからかい始めた

「その様子だと、告白でもしたの？」

「そうやで、姉ちゃん」

「ば？ バーロ？」

「あら……やっぱりそうなのね」

自分を責め続ける哀を安心させる為に思わず言って仕舞ったコナンは、真っ赤に染めた頬を平次に肘でに小突かれていた

「夕陽に染まった屋上での」

「うっせ？ おめえもだろうが？」

「俺の事はええっちゅうんじゃ？」

「ちっこい姉ちゃん、工藤の奴、探偵事務所の姉ちゃんにプロポーズしたさかい心配要らへんで？」

「ば？ バーロ？ ばらすんじゃねえ？」

（要するに、どっちとも告白して上手く行ったのね？）

林檎の様に真っ赤に顔を染めたコナンと平次のやり取りを見ていて呆れ果てた哀は、じゃれ合う二人に悟られない様に小さく溜め息

を吐いた

（まったく……、相変わらず彼女にべた惚れなんだから……でも……
良かったわね、工藤君）

一瞬、少し悲しそうな眼差しを見せはしたものの、哀は何時通りの
ポーカーフェイスを張り付けて、改めてコナンに向き直った

「じゃあ、本当に良いのね？」

再度、コナンの意思を確認する為に問い掛けた哀

決断を下すコナンを無言で見守る平次と阿笠の目の前で、コナン
は再度その意思をはっきりと示す

「ああ、俺はあいつ等の命を犠牲にして迄戻りてえとは思わねえ」

「……同感ね、私も吉田さん達を危険に晒して迄APTX4869
の完璧な解毒剤を作ろうとは思わないわ」

コナンの意思を確認した哀は、まるで表情を見られない様にする

が如く踵を返すと、コナンを見ぬ儘背中越しに声を掛ける

「ジンがAPTX4869のデータを置いて行ったから、APTX4869の毒性だけを消す解毒剤の開発に取り掛かるわ。悪いけどもう少し待ってくれるかしら？」

「ああ……わりいが頼むぜ、灰原」

「ええ、じゃあ……」

話が終わった途端に踵を返して阿笠を置いてすたすたと帰って行く
哀

阿笠は病院に来ながら見舞いもせずにと、おろおろと気にして哀とコナンの顔を交互に見ていたが、コナンが阿笠に目配せすると、大きく頷いて阿笠は哀の後を追って帰って行った

（済まねえ……灰原）

「なあ工藤……ひょっとしてあの姉ちゃん、お前の事が好きなんやないんか？」

コナンと二人哀の背中を見送りながら、平次がぽつりと呟いた言葉にコナンは辛そうに表情を歪ませた

「……多分な、あいつには歩美がいる。俺の出る幕はねえよ」

「せやな？」

「女は女同士、男は男同士やな？」

「そうだな……」

（わりいな、灰原。俺はおめえの気持ちには答えてやれねえ……。俺は蘭じゃなきゃ駄目なんだ）

コナンのその視線の先にいる、小さめのリュックと紙袋を下げた黒髪の天使は、満面の笑みを浮かべていた

「はい新一、着替えと夕食のお弁当」

「わざわざわりいな、蘭」

「愛妻弁当を届けてもろうてええの、工藤」

「バーロ？ てめえ何言ってるんだ？」

顔を真っ赤にしたコナンと蘭を残し、平次は一旦病院を後にした

「ほな、俺はバイクで一旦帰るさかい」

「ったく？」

片手を挙げて帰って行く親友に二度と来るなとも言えず、コナンは林檎の様に真っ赤な顔をした蘭と共に有希子の病室へと戻って行った

「病室に行くぞ？」

「うん？」

この後、顔を真っ赤にした儘で病室に戻ったが為に、病室の主である有希子に一頻りからかわれ、ほとぼりが冷めた頃合いを見計らい婚約する事になったのは言う迄もない

阿笠のビートルで米花町へ帰る哀は、堪えきれず一滴の涙を溢した

「哀君……、何れ哀君だけの人が現れるからの……」

「そうね、あんな推理オタクじゃなくてまともな人がね」

「そうじゃのゝ、少なくとも新一よりはましじゃろうのゝ」

当の本人がいないのをいい事に言いたい放題言っている哀と阿笠

そこには優しげな笑みが溢れていた……

放たれる銀の弾丸（前書き）

礎—Cornerstone—を評価して頂き本当に有り難う御座
いますm（m

のろのろ展開でほんと済みません？

飛行機墜落事故発生して優作が重傷を負ってから未だに二日目です
……はい？

放たれる銀の弾丸

——その夜

寝静まった有希子を起こさぬ様こつそりベッドを抜け出したコナンは、冷え込む廊下でガードしてくれているジョーディとキャメルの元へと向かった

日本警察と協力してコナン達をガードするジョーディとキャメルは何時もの出で立ちで、日本の冬の寒さは堪えていない様だ

対してコナンは蘭が持って来たパジャマにカーディガンを羽織り、底冷えする院内対策にそれなりの防寒着を使用していた

「クールキッド」

「未だ起きてたのかい、コナン君」

「うん、僕は元々夜型だから？」

「確かに中身は高校生なものね？」

「未だ夜の十一時十五分前ですからね、本来高校生であるコナン君には貴重な時間と言う所でしょう」

「えへへ？」

（何時も推理小説を読んだとは言えねえな……）

頭を掻いて苦笑いするコナンが本来何をしていたのか、容易に想像が付いたジョディは一際深い溜め息を吐いてコナンを見下ろした

「その様子だと、幼児化する迄は遅く迄推理小説を読んでいたのね？」

「えへへ？ ごめんなさい？」

ジョディに見抜かれて、見た目通りの子供が悪戯を咎められた様にはづが悪そうに謝るコナンの姿にジョディとキャメルは思わず笑みを溢した

あの方と疑っていた優作の子供だと判明し、コナンとFBIとの間に溝が出来るのではないかと心配していたジョディとキャメルだったが、普段通りに接するコナンのお陰でスムーズに情報交換を始

める事が出来た

「それでコナン君……」

「どういう事が説明してくれる？」

「うん」

ジョディの要請に対し静かに頷いたコナンは、これ迄ひた隠しにして来た事実を静かに話し始めた……

「僕は蘭とトロピカルランドへ行った時に、ジンとウォツカの取引現場を目撃したんだけど、その時にある毒薬を飲まされたんだ」

「毒薬……！」

「毒薬って、一体どんな毒薬を飲まされたんだい？」

コナンが毒薬を飲まされていたと知ったジョディとキャメルは、コナンの体を案じ一瞬で表情を変えた

「それは言えない……」

「言えないってコナン君!!」

「早く解毒剤を飲むないし作らないと、コナン君の命が危ないよ」

「有り難う……ジョディ先生・キャメルさん、それでも言えないんだ」

「……危険な薬なのね？」

「うん、闇から闇へ永遠に葬り去らねばならない薬だから、知る人は少ない方がいい。FBIを信用していない訳ではないけど、これ以上危険には晒す事は出来ない」

真っ直ぐな……真摯な眼差しできっぱりと言い切った、コナンの固い決意を受けてジョディとキャメルは無理に問い質す事は止めた

「OK、君がそれ程迄に言うんなら今は聞かないで置くわ」

小さな溜め息を吐き笑顔を見せ自分の気持ちをくみ取ってくれた、顔馴染みのFBI捜査官達に対しコナンはほっとした笑みを浮かべる

「有り難う、ジョディ先生・キャメルさん」

「良いのよ、君には世話になってるしね」

「無理には聞かないよ。でもコナン君、解毒剤はどうするんだい？」

コナンの目線に合わせてしゃがみ込み心配そうな眼差しで覗き込むキャメル

「そうよ、君が毒薬を飲まされて一年立つけど、油断は出来ないわ」

コナンの体を心底心配してくれている二人を安心させる為、コナンは差し障りのない範囲で答える事にした

「大丈夫、知り合いの薬学者に研究して貰っているから」

「なら良いけど……」

「何か手伝える事があったら遠慮なく言うのよ？ どんなに優秀な探偵でも、君は民間人なんだから」

言外に無理はするな……と告げるジョディの温かい言葉に、コナ
ンは数秒考え込んだ後に重い口を開いた

「……じゃあ、一つだけいい？」

「良いわよ、なあに？」

「ひょっとして、大阪の彼の事かい？」

キヤメルが辺りを付けて問い掛けるとコナンは小さく頷いた

「うん……、服部は日本警察のNOCである本部長を手伝っていた
んだけど、この儘では逮捕されて仕舞うから何とかして欲しいんだ」

「服部平蔵本部長が日本警察のNOC!!」

「手伝っていたって……」

平次の危険極まりない行為に思わず顔を見合わせるジョディとキ
ヤメル

コナンは二人を説得するべく、懸命に訴えた

「確かに、あいつがした事は犯罪だ。許される事じゃない。でも、組織を壊滅させたい一心で大阪を動けない本部長を手伝っていただけなんだ。服部はもう十分に傷付いている……償っている、だから」

「……OK、そう言う事なら任せて」

「ボスに報告して彼を保護する様にするよ」

「有り難う？」

ほっと安堵して笑みを浮かべるコナン

そんなコナンの姿を見て二人もまた笑みを浮かべた

「私達としても安心したわ」

「彼が敵でなくて良かったよ？」

「彼を敵に回すには少々切れすぎるからね。勿論、君も……」

「ははは？」

（どうやら大分心配させた様だな）

頭を掻きながら苦笑するコナンは、ふと思い出した様に気掛かりな事を尋ねた

「あ……そうだ、あの方に関する情報は入ってない？」

「有力な情報は入ってないわね？」

「工藤さんが白だとなると、一体誰が我々FBIを始めとする情報機関を手玉に取っているんでしょうね」

「ほんと？」

（どうやら捜査が振り出しに戻ったみてえだな……）

FBIの状況を把握したコナンは、数秒間思案した後哀から仕入れた情報を告げる事にした

（わりい……灰原）

「確証はないけど、一つだけ判った事があるよ」

「「え!!」」

「ちょっと、それ本当なの!!」

コナンの情報に目の色を変えて聞いて来るジョディとキャメルに
対し、コナンは言い辛そうに言葉を紡いだ

「うん……、ジンが言った言葉を整理してみたら、あの方と呼ばれる組織のボスは薬学に精通しているらしいんだ。組織の研究の道筋を見通していたらしくて、完成させる為に俺を殺さずに生かしていたらしいと言う事が判ったんだ」

「薬学者……と言う事かしら？」

「かも知れませんか……」

顔を見合わせて考え込むジョディとキャメル

コナンには、あの方が誰なのか……おおその見当は付いていた

だが、この推理がはたして合っているのか？

FBIにあの方と思われる人物を告げる前に、コナンは直接、哀に確かめる必要があった

(FBIに言うのは未だ早い……)

(灰原に確かめねえと言えねえが、言わなくても時間の問題だな……)

「職業にしていなくても、何だかの形で精通している可能性が高いでしょう。少なくともコナン君が毒薬を飲まされた時、組織の研究が完成間近だと、あの方には解っていた様ですしね」

「そうね、少なくとも一年前には解っていた……と言う事だわ」

「組織の研究を完成させる為に、コナン君を生かしていたと言う事は、自分では研究出来ないって事ですかね？」

「……その可能性が高いわね」

「何だかの事故で手ないし体を負傷して研究を続けられなくなった……？」

追及の弾丸

コナンがわざわざ言わなくても、あの方の正体に辿り着こうとしているジョディとキャメル

（流石、FBI捜査官だな……）

その優秀なFBI捜査官である、ジョディとキャメルを追い詰めるべく、コナンは深呼吸してジョディに向き直る

「キャメル、ジェイムズに報告して来てくれる？」

「解りました、有り難うコナン君」

「僕の方こそ有り難う」

そう言うときゃメルは片手を挙げてジェイムズに報告するべく去っていった

「有り難うコナン君、助かったわ」

「ううん」

複雑な表情を浮かべたコナンはあの方の正体から話を逸らすべく、無理矢理話題を変えた

「ねえ、どうして父さんを疑ってたの？」

「う……」

突如急所を突いたコナンの鋭い指摘、繰り出されたコナンスマイルにジョディは言葉を失った

「世界的推理小説家及び私立探偵でもある父さんは、シリーズ推理小説の執筆を多数抱えた超が付く程の多忙を極めている推理小説家」

（締め切り逃げ出して旅行行ってっけど……この際良いか？）

「あの方として活動する暇はないのに、していないのに何故？」

幼児化して以来、周囲の関心を引く為に身に付けたコナンスマイル

鮮やかに繰り出された最強の武器に、ジョディは冷や汗を流しながら押し黙った

「そ……それはね？」

「うん、なあに？」

終始笑顔を浮かべたコナンに、たじたじとなるジョディは困り果てた表情で事情説明を始める羽目になった

「う……工藤さんは、何もしていなかったから容疑者の一人になった……」

「容疑者？」

大女優藤峰有希子譲りの笑顔で張り付けて、小さな姿には似つかわしくない恐ろしく静かな怒気でジョディを追いつめるコナン

「いえ……候補者に？」

（流石、高校生探偵工藤新一？）

幾多数多の修羅場を潜り抜けて来たFBI捜査官であるジョディを完全に飲み込んだコナンは、容赦なく終始笑顔で追い詰めて行った……

「（怖いわ？）く……工藤さんは、君が行方不明にも拘らず捜そうともしなかったから……」

「僕ここにいるよ？」

コナンスマイルに為す術もなく滝の様な冷や汗を流して辿々しい言葉で言い訳するジョディは……

コナンスマイルに完敗を喫した

「まさか幼児化してるなんて思わなくて……」

「成る程ね、それで疑ったの？」

「ええ……、豊富な知識と推理力・洞察力・観察眼を兼ね備えた、頭の切れる人だから……もしやと……ごめんなさい？」

「良いんだよ、ジョディ先生」

「コナン君……?」

完全に飲み込まれたジョディ

にこにこ笑顔を振り撒くコナンの次の標的「ターゲット」は……

勿論、報告から戻ったアンドレ・キャメル、その人だった

「ジョディさん、報告……コナン君?」

「キャメルさんにも聞きたい事あるんだけど、良い?」

「あ……ああ?」

ターゲットがキャメルになった所で漸く解放されたジョディは背後に下がると、キャメルの大きな背中隠れて深い溜め息を吐いた

（やっと解放されたわ……）

ジョディの視線の先では、先程と同様の光景が繰り広げられており、キャメルが疲労困憊になったのは言う迄もない

「……じゃあね、有り難うジョディ先生・キャメルさん」

片手を挙げて走り去って行くコナン

「ええ？」

「お休み、コナン君？」

「……？」

コナンの姿が見えなくなると、ジョディとキャメルは一際深い溜め息を吐いた

「「やっと解放された？」」

ジョディとキャメルがコナンの追及を受けている頃、都内のある場所ではベルモットが報告を受けていた

「確かになかったのね？」

「「はい、アメリカやイギリスを始めとする欧州諸国及びロシアにはありませんでした。残る可能性は亜細亜と日本位ですね……」」

煙草に火を点けて瞬時に情報を精査すると、ベルモットは新たな指示を出した

「じゃあ、日本に絞って調べて頂戴」

「「解りました」」

通話を切り、携帯をテーブルに置くとベルモットは暫し思考の海へ潜る

（どういう事なの？ 欧州各国はおろかロシアにすら戸籍がないだなんて。ジンが使っているパスポートは日本名の黒澤陣、ウォッカは魚塚三郎……。長年使って来た偽名だけど、まさか……本名？）

（銀髪だからロシアを始めとする欧州諸国に絞って調べさせたけれど……まさか）

脳裏にもたげた一つの疑惑

疑惑を確信に置き換えるべく、再び携帯を手に取り指示を出した

「私よ、黒澤陣と魚塚三郎の名前で調べなさい」

「「解りました」」

煙草の煙りを吐き出し

妖艶な笑みを浮かべるベルモット

ジンが失脚して以降、目障りな男達がいなくなったベルモットは、以前より動き易くなっていた……

「ふふふ……」

（シルバードレットは、あの方の正体にもう気付いている筈……。シェリー、真実を知った貴女はどうするのかしら？）

(……シェリー)

否が応でも漆黒の渦に巻き込まれて行く二人、コナンは例え相手が誰であろうと追及の手を止めない

それは哀であろうと例外ではなかった……

かたかたと軽快にキーボードを叩く音が響き渡る地下の研究室

A P T X 4 8 6 9 の毒性を消し去るべく研究を続ける哀の背中に悪寒が走る

(……何、今の)

恐る恐る地下室内を見渡せども漆黒の怪しい人影は見当たらず、哀はほっと安堵の溜め息を吐いた

(気の所為ね……)

(完成させなきゃ……一刻も早く)

夜の帳も降り、懸命に平静を保ち研究を続けて来た哀だったが、集中力が途切れるふとした瞬間に一滴の涙が溢れ、手の甲を伝い落ちた涙は暖かい暖房で直ぐに乾いていく

（忘れなきゃ……工藤君の事は、元から叶わない思いだったんだもの。真っ白な天使の彼女に、真っ黒な悪魔の私が敵う訳ないじゃない。私は組織の裏切り者で……、ましてや……）

（灰原哀として相棒として側にいられるだけで十分よ……。でも、今だけ……）

膝の上で拳を握り締めて、声を押し殺しながら啜り泣く哀

志保が初めて抱いた淡い想いは儚く散った

（工藤君……）

開かれた漆黒の扉

哀が密かに涙を流した翌朝

首都圏一帯は、まるで哀の心を映したかの様に雪が舞い降りた

「良く降るの」

「ほんと……（でも綺麗ね……）」

（まるで哀君の心そのものじゃな……）

朝食を終えて珈琲に舌鼓を打つ哀と阿笠は、APTX4869のデータが手に入った為、解毒剤の本格的な研究に入ろうとしていた

「じゃあ博士、ラットの用意をお願いね」

「解った、新一と哀君に見立てた成長期の雄と雌のラットを数匹ずつ用意して置こうかの」

「そうね……、それが良いわね。これ迄工藤君に飲ませた試作品は、

今日中に用意するわ」

「無理はせん様にの、哀君」

「ええ、大丈夫よ」

幼少期から良く知るコナンと、一年間娘同然に過ごして来た哀……

どちらの恋も成就して欲しいと阿笠が願うのは至極当然の事だった

だが、現実には上手くは行かずコナンは幼い頃から想いを寄せていた蘭を選び、哀は失恋して仕舞った

哀の想いは叶わない……

解ってはいたが、阿笠はひょっとしたら……と淡い願いを抱いていたのも事実だった

一際深い溜め息を吐いて気持ちを落ち着かせると、阿笠は珈琲を手に地下へ降りて行く哀を心配そうに見送った

「上手く行かんものじゃの」

「新一と蘭君の恋も成就して欲しいが、哀君の恋も成就して欲しいんじゃが……。こればかりは、流石に無理の様じゃ」

阿笠にとってどちらも大切な存在のコナンと哀……

複雑な想いを秘めた儘阿笠は、解毒剤の研究の為に必要なラットを用意するべく重い腰を上げた

しんしんと真っ白な雪で埋め尽くされる米花町

大人達は厳しい寒さに縮こまり子供達は嬉しそうに空を見上げる

成田空港は後片付けも終わって運航を再開し、普段は殺風景な滑走路は雪化粧を見せていた

世界中から優作の容態を案じて出版関係者や著名人達が来日し、成田空港近くのホテルに宿泊して成田救急病院へ見舞いに訪れる中、ある人物も緊急来日していた

「ニュースを見て驚きましたよ？」

「ごめんなさいね？」

「もし貴女を失う事があったら、優作は何をしでかすか解ったものじゃない？」

安堵の溜め息を吐きながら両手を挙げる優作の旧知らしい外国人の男は、有希子の無事を確認すると笑みを浮かべた

「確かにね？」

「母さん？」

二人の会話を聞いていたコナンは怪訝な顔で有希子を見上げると、子供らしさを損ねない様に問い掛けた

（母さんが寝込んでも冷静に看護していた父さんが……まさか）

悠然と佇む優作の姿しか知らないコナンは、父親が取り乱す所等見た事がない精々酔っ払って潰れた姿位だ

狼狽える姿を見た事がない為、コナンには到底信じられなかった

「ああ、新ちゃんは知らなかったわね」

「優作ったら、新ちゃんの前では偉そうにしてたから？」

「ははは、優作らしいな。コナン君、優作はああ見えて有希子さんが自分の目が届かない所で事故に巻き込まれたとなると……」

そう言って両手を上に挙げる、遙々駆け付けてくれた外国人の男は優作の友人であるICPOに所属するリチャード・ホーキンス警部だった

「まさか……」

優作の意外な一面を初めて知り目を丸くしたコナンが、ホーキンス警部を見上げると、苦笑しながらコナンが知らない一面を話した

「優作も人間……、最愛の人の事になったら我を失うただの男だ」

「そうよ、新ちゃん。だからこそ……今私は生きているんだもの」

「母さん……」

「丁度右翼側の席に座っていて、優作がエンジンの異常に気が付いたのよ。直ぐにスチュワーデスを通じて機長へ知らせたから成田迄持ち堪えて不時着したんだけど……、予想外に爆発が早くてね。大勢の人が亡くなって仕舞ったわ、右翼側にいた私が助かったのは優作が身を呈して庇ってくれたからよ?」

墜落時の状況を思い出して表情を翳らせて、右翼側にいた自分が助かった事を苛む有希子

コナンは慌てて有希子のベッドへ駆け寄った

「母さん? 右翼側の座席にいて助かったのは母さんだけじゃねえ?」

「そうだよ、有希子さん。貴女方家族には、組織を壊滅させる為に何としても生き延びて貰わないとならないんだ」

「え……?」

ホーキンスが述べた言葉に驚いて見上げるコナン

「そうね、新ちゃんを守る為にも彼の仇を討つ為にも生きなければならぬわ」

それと同時に、ホーキンスに呼応する様に頭を上げた有希子が述べた決意の言葉に、コナンは言葉を失った

「……母さん、知ってたのか？」

闇の男爵夫人と呼ばれてはいても犯罪とは無縁である筈の有希子が、黒の組織を知っていた事に、コナンは驚きを隠せなかった

茫然と有希子を見上げるコナン

優作との約束で、話していなかった有希子は数秒間沈黙した後、意を決して口を開いた

「ごめんね……、新ちゃん」

「母さん……」

「私と優作は、組織の存在は随分前から知ってたのよ。新ちゃん、黒羽盗一さんって覚えてる？」

（黒羽盗一……初代キッドか）

「ああ、八年前マジックショーの事故で死んだ東洋の魔術師だろ？」

「ええ……、表向きは事故死と言う事になってるんだけどね、本当は……組織に殺されたのよ」

「な……！」

「盗一さんがショーで亡くなった時、優作は直ぐに捜査に合流して殺人だと……何者かに事故死に見せ掛けられて殺されたと解ったわ。その時から、優作は組織を追い始めてL Aに拠点を移したって訳。新ちゃんを巻き込まない為よ」

悲し気な表情で告げた有希子、コナンは数秒の沈黙の後

……その言葉を放つ

「本当に、その時に知ったのか？」

「!!」

拳を握り締めて母親に向き直るコナン

有希子が組織の存在を知っていた事に確証を得たコナンは、ある疑問を投げ掛けた

「組織の事を知ったのは、本当にその時なのか？」

「……新ちゃん」

（成る程な……流石、優作の一人息子、平成のシャーロック・ホームズと称されるだけある）

加速する歯車（前書き）

明けましておめでとうございます m (m

一月一日と二日の0時更新は書き貯め更新します。現在の所、三日と四日の0時更新出来るか不明です。

加速する歯車

しんと静まり返った病室

静観するホーキンスは、母と子の乗り越えねばならない試練を見守った

「新ちゃん……」

気持ちを落ち着けたコナンは、有希子に対して口を開く前に傍らで待つホーキンスに視線を向ける

（どうやら知っている様だな）

戸惑いは微塵も感じられない、ホーキンスの冷静に見守る態度に、組織の存在を知り尚且つ追っていると判断したコナンは、徐に口を開いた

（お手並み拝見と行こうか……）

「父さんは、初代怪盗キッドである黒羽盗一が奴等に殺される前、既に知っていたんだろ？」

「そ……そんな訳ないじゃない？やあね、何を言ってるの。新ちゃん？」

懸命に取り繕う有希子だったが怯みもせず詰め寄るコナンに対し、既に平静さは保てずにいた

じわじわと有希子を追い詰めるコナンは、哀から聞いた記憶と、二人きりになった時に聞いた平次からの僅かばかりの情報から導き出した答えを有希子にぶつけた

「父さんとおの方方は、阿笠博士を通して元々知り合いだった……。その人物は元々薬学者だったが、ある研究が元で学会を追放されてある団体に入った。それが組織だ……。その人物は組織に入り一度は研究を完成させたものの、事故で奥方諸とも失った。それが全ての発端で、不運だったのは、その人物が優秀な薬学者であると共に、ホームズのファンで父さんと同等の推理力を持っていた事だ」

「奥方を失ったその人物は、狂気に囚われて初代の娘である奥方を蘇らせるべく、APTX4869を再度開発しようとした。しかしながら、データは焼失し自分では研究出来ない。その為、生まれて間もない娘の成長を待つ事にした。先に生まれていた、もう一人の娘は薬学者としての才能がなかった為に、FBI捜査官に利用されたのを機に……。殺した。そうだろ、母さん」

正面から向き合った母と子

数分間の沈黙の後……

——有希子は笑みを浮かべた

「負けたわ、その通りよ」

「良く辿り着いたわね、新一」

張り詰めていた雰囲気是和らぎ穏やかな何時もの病室に戻ると、
有希子は深い溜め息を吐いた

「流石、平成のシャーロック・ホームズ。幾ら平次君から僅かばかりのあの方の情報を聞いたからって、僅かな欠片からここ迄辿り着くなんて……成長したわね、新一」

「母さん……」

「今から十八年前、あの方は奥様を研究中の事故で亡くされてからは、正気をなくして仕舞ったのよ。狂気に囚われて仕舞ったあの方

は奥様を蘇らせる為に研究させて、研究資金を集めさせる為に数多くの犯罪を犯して行ったわ」

「ホームズが好きで、優作と新聞を見ながら推理合戦に花を咲かせたものよ。組織を壊滅させ様にも、私や新ちゃんを守る為に、ましてや手口を知られている以上は、優作と言えども下手には動けない……。各情報機関を背後から動かすのが精々なのよ。情報を送ってあげたくても、新ちゃんの側には、あの子がいたから知らせる事が出来なかったって訳」

「そっか……」

「ごめんね……新ちゃん」

済まなそうに微笑む有希子に、コナンは探偵から息子へと戻った

「もう良いって?」

母と子の推理対決は……

——コナンの勝利に終わった

「見事な推理だったよ、新一君。我々は平成のシャーロック・ホームズ……君の成長を待っていたんだ」

頃合いを見計らって声を掛けたホーキンスは、遥々日本まで来日した目的を告げる

「ホーキンス警部？」

「四日後、組織の主だった拠点を一斉に摘発する事になった」

「な……！」

（摘発……！ I C P Oは当の昔に組織の本拠地の在処を掴んでいたのか……！）

この一年間、待ち焦がれていた決戦の日

吉報をもたらしたのは、F B IではなくI C P Oだった

「そこで、優作が倒れた今、君の知識を借りたい。一般人である、新一君を危険に晒す事は出来ない。だが、このチャンスに逃す訳にはいかないんだ。手を貸して欲しい。勿論……君の関係者は優作と

有希子さん以外は、全て保護した。どうか、手を貸して欲しい」

「勿論、こちらからお願いします」

「頼りにしてるよ、ホームズ君」

「はい、こちらこそ」

交わされる固い握手

運命の歯車が回り始めた瞬間だった

「じゃあ、直ぐにFBI」「いや……、それは待ってくれないか」

コナンは黒の組織を追い続けるFBIに協力を要請しようとしたが、ホーキンスは瞬時にそれを制した

「それは駄目よ、新ちゃん」

複雑そうな表情を浮かべている有希子とホーキンスは、ばつが悪そうな表情でコナンを止めた

「え……（まさか……）」

ホーキンスと有希子が同時に制止した事で、勘が鋭いコナンは組織と渡り合ったある事件を思い出した

「……新ちゃん」

「コロンバイン……、米国連邦捜査局長官ジェイムズ・ブラックは奥方の身内、即ちあの方の片腕って所か」

「流石新一君だ、話が早い？」

「その通り、英系アメリカ人であるジェイムズ・ブラックは彼女の義兄でね。研究中の事故で、身障者となったあの方の片腕でありFBIの情報を得る為に長年潜り込んでいるNOCでもあるんだ。その為、あの方は赤井秀一FBI捜査官を殊の外恐れていたと言う訳だ」

「……やっぱりね」

小さな溜め息を吐いて、自嘲する様に前髪を掻き上げるコナン。

警戒していなかった訳ではないが、やはりショックは隠せなかった

「新ちゃん、気付いてたの？」

「白いコロンバインをジェイムズさん宛に送り付けて来た事があったんだ。それに、ジン達を一網打尽にするチャンスを巧みに回避したから……薄々ね」

「白いコロンバイン……、あの方が気掛かりか。成る程ね？」

一年に渡り協力関係にあった、頼もしい仲間・FBI

そのFBIが、信用が出来ない

この事実を薄々察していたとは言えども、耐え難いものだった

「新ちゃん……」

「そう気落ちする事はない」

「え？」

「新一君が懇意にしている二人は信用出来る存在だ。平次君の事も日本支部の捜査官が保護したよ。今頃、作戦通りに罠を張り巡らせている筈だ」

「そうですか……」

（良かった、服部）

神の領域

平次が無事と解って、年相応のほっとした笑みを見せるコナンに
ホーキンスは優しい笑みを向けた

「平次君は、特別捜査官として保護する事になってね。これによって、如何なる国の法でも平次君を処罰出来ない」

「有り難う御座いました？」

「有り難う、ホーキンス」

「いやいや、少々骨が折れたが、彼を失う訳にはいかなからね？」

「良かったわね、新ちゃん」

「ああ、良かった？」

有希子とコナンの嬉しそうな、ほっとした様な笑みにホーキンス
もまた、喜び合う二人の姿にほっと胸を撫で下ろした

（少々強引に平次君を保護したが、これで良かった様だ）

ホーキンスの目の前で、束の間の笑顔を見せる有希子とコナン

穏やかな日常が再び訪れる日は直ぐ其処迄来ていた

一時、笑い声に溢れた病室は、どちらからともなく真剣な顔付きに変わる

「……ホーキンス警部、本拠地は」

探偵の眼差しに変貌を遂げるとコナンは彼の地・本拠地の在処を問うた

ホーキンスは大きく頷き徐に口を開いた

「本拠地が何処にあるのか？」

「我々はジンやウォッカが頻繁に出没する。烏矢町・米花町・杯戸町、この近郊に着目した」

（確かに……、ジン達は米花町近辺で度々目撃している。特に米花

町……)

「まさか……、この近くに？」

「え？嘘？」

忽ち、顔色が悪くなる有希子と目付きが鋭くなるコナン

それもその筈、コナンは登下校中にジンの愛車・ポルシェ 356Aを度々目撃していた。この三つの町で行動していたのも一度や二度じゃない

「そのまさかだよ、有希子さん。奴等はジェイムズ・ブラックの来日と前後して、主に日本で活動している。アメリカや欧州の拠点は、FBI等に知られた為に軒並み爆破された。残るは日本にある本拠地と施設、それと奥方の遺体が安置されているイングランドだ」

「イングランド……」

「ああ、クローン技術に優れている研究施設に安置されている」

「クローン……！」

「ああ、どうもクローン技術が関係しているらしい」

ホーキンスからもたらされた情報を元に思考を掘り下げるコナン、この一年間に得た、小さな欠片を紡ぎ合わせて導き出された答えは、悪魔の所業と言えるものだった

（板倉さんが人間の為に製作断念したと言うソフトとクローン体……そしてAPT X 4869と解毒剤を混ぜ合わせて完成する薬剤……まさか……まさか！！）

コナンの脳裏に描き出された、一つの推理……それは……

——神の領域に属する死者の蘇生だった

「成る程な……、それが奴等の目的か」

真っ青な顔色で、前髪を掻き上げるコナンに有希子もホーキンスも訝し気に注目した

「新ちゃん？」

「新一君？」

「奴等の目的って、何の研究をしているか解ったのかい？」

コナンを覗き込んで問い掛けて来るホーキンスの声は、幾分焦っているかの様に聞こえる

「確証はないけど……恐らくね。まさかとは思っていたが、本気で不可能を可能にしようとしているとは思わなかった」

「……奴等は一体何をしようとしているんだい？」

コナンの様子からとんでもない事をしようとしていると理解したホーキンスは、ベルモットと言う存在もあり言い知れない不安を覚えた

（何か得体の知れない研究をしていると言うのか？ ベルモットは、若く美しい姿の儘で数十年生きている。本来ならそれなりの年齢だ……まさか、不老不死？）

各々が、思考を掘り下げながら顔色を悪くしていると、有希子が昨日の会話を思い出してコナンに問い掛けた

「新ちゃん、ひょっとしてあれ？」

「有希子さん、あれとは？」

有希子の言葉に反応したホーキンスは、手掛かりになるかと思つて問い返した

「昨日、新ちゃんが言ったのよ。我々は、神であり悪魔でもある。何故なら、死者を蘇らせ様としているのだからって」

「な！！ 馬鹿な！！」

死者の蘇生とは思ひも寄らなかつたホーキンスは、目を大きく見開き問い返す様にコナンを見た

「恐らく奴等は、クローン技術で喪われた肉体を作り出した後に、APT X 4869と解毒剤を混ぜて完成する薬剤を投与して肉体を急成長させ、記憶をプログラミングした装置を脳へ埋め込む事で死者の蘇生を図ろうとしているんだ」

「……何て事だ。そんな事が可能になったら世界秩序は崩壊する」

「ああ、この研究は何としても阻止しなければならない。だから……母さん、俺は工藤新一ではなく、新・コナン・工藤として生きて行く……ごめん」

一人息子の並々ならぬ決意

有希子は穏やかな笑みを浮かべて息子の一方ならぬ想いをくみ取って、その胸の内を明かした

「解ったわ、新ちゃん」

「確かに、大きな新ちゃんに会えないのは寂しいわ。でも、新ちゃんがモルモット扱いされる位なら、コナンちゃんとして幸せになっ
て欲しいの。新ちゃんが幸せである事が一番大切なの……」

「新ちゃんが元気で笑って幸せな人生を送ってくれる事が、私と優作の願いなの……。新ちゃんは、私達の大切な宝物なの……。大きな新ちゃんに会えないのは、大した問題じゃないわ」

「新一、貴方が信じる道を行きなさい」

元女優でもなく世界的推理小説家の妻でもない、我が子の幸せを願って止まない、一人の母親の姿だった

探偵として危険と隣り合わせの日々を送る息子を、優作と二人で黙って見守って来た有希子

一人息子新一を案ずるあまり、我が家へ隠れ住んだ事もあった

毛利探偵事務所が見える売家を一週間だけ借りた事もあった

変装させたり蘭に誤魔化したり遥々ロンドン迄解毒剤を届けた事もあった

幼児化して仕舞った息子を影からサポートして来た有希子の願いは……

息子の幸せ、それだけだった

「サンキュー……母さん」

有希子の切なる願い……

普段は明るく自由奔放な有希子の想いを、コナンは改めて思い知った

（何時の世も、親が我が子に願うのは幸せな人生だけだ。父母から我が子へ無限に注がれる無償の想いを、理解している子は果たして何れだけいるのだろうか）

天使のお願い

母と子の絆が更に強固なモノになった頃、都内某所では平次の怒声が響き渡っていた

「あ……っんのボケ——！！」

「要らん事しくさって！！」

両手に拳を握り締めて、コナンへの感謝と怒りを露にする平次は、一際でかい雄叫びを上げている

「何言うてんの、平次」

「工藤君に感謝せなあかんぞ？」

「わあっとるわ、和葉」

「でっかい借り作ってもうたわ？」

コナンに怒っているのか、はたまた感謝しているのか、そこは微

妙な所だが、平次には迎えが来ていた

「じゃあ、平次君、行こうか？」

「ああ、済んまへん」

「チビ共を出さん様に頼むで？」

「うん、解つとるって」

「気を付けてね、服部君」

「おう!!」

平次がICPOの捜査官と出ていった部屋には、小五郎・蘭・和葉・園子・元太・光彦・歩美・静華、引率で澄子が保護されていた

この中で小五郎は銃を携帯し、静華は真剣を所持しており内部からの護衛の役割を担っている……

そんな中で、何も知らされていない子供達には退屈なだけだった

「なあ、何時迄ここにいれば良いんだよ」

「一体、何があったんですか？」

「歩美も手伝う！！」

未だ幼く、世の中の闇の部分知らない子供達は、生半可に事件に遭遇して来ただけあって、本当に危険だと言うモノを知らなかった

「馬鹿野郎、ガキの出る幕じゃねえんだ！！」

「何でだよ！！」

「今迄だって、危険な目にあって来たんだから大丈夫だもん！！」

「そうですよ！！」

拳を握って力説する子供達に、周囲の大人達は口々に制止する

「あかん、危険過ぎや」

「大人しくしてなさい」

「でもよ、小林先生!!」

「コナン君や哀ちゃんが行ってるのに狡いよ!!」

「そうです、僕達だけなんて狡いです!!」

「俺達は少年探偵団だぜ!!」

「そうよ!!」

制止を聞かず反論する元太・光彦・歩美は、少年探偵団として活躍したいと目を輝かせて、捜査に参加しようと必死だ

（……歩美ちゃん達、本当の事を言わないとこの儘じゃ飛び出すわ）

この儘では最悪の事態になると判断した蘭は、三人を説得する為にゆっくりと歩み寄った

「駄目……大人しくしててね？」

「蘭お姉さん」

子供達の目線に合わせて膝を着いた蘭は、ゆっくりとした口調で優しく語り掛けた

「本当に、本当に危険なの……。歩美ちゃん達が少年探偵団として解決して来た事件のレベルじゃないの……。新一を殺した国際的な犯罪組織を潰す為に、世界中の情報機関の人達が命懸けの任務に着いてるの」

「は……。犯罪組織……。ですか？」

蘭の言葉で漸く事態の大きさを知った光彦が顔色を真っ青に変え、隣にいた元太が不安そうな顔で光彦に問い掛けた

「え……。何だそれ？」

「凶悪な犯罪者が集まって出来た集団の事です。人の命を何とも思わない危険極まりない人達を相手にしていると言う事です」

「そ……そんなに怖い奴等なのか？」

元太の顔色も忽ち真っ青になり、歩美は新一が殺されたと知って涙を浮かべた

「そうよ」

「新一お兄さん……殺されちゃったの？」

最早、蘭も和葉も小五郎も静華も平静ではいられなかった……

コナンが平次が……

心配で、心配で堪らなかった

それでも尚、自分が為すべき事を為し遂げる為に気丈に奮い立たせていた

「うん……、コナン君と哀ちゃんは当事者なの……生きる為に闘ってるの……大勢の人達の命を背負って闘ってるの……」

「私達が行っても何も出来ない、足手まといなだけ……だからね。大人しく待ってようね？」

「待つ事も大切なんやで？」

堪えていた涙を流しながら

三人を説得する蘭と和葉

涙を溢しながら説得された元太達は、漸く小さく頷いた

「解りました……」

「しょうがねえな……」

「……うん、大人しくしよう」

「はい」

「有り難う、皆」

蘭の真摯な説得で、漸く大人しく待つ事にした元太・光彦・歩美は、大人しくソファ―に座ってテレビゲームで遊び始めた

「良かった……」

「……うん（新一……）」

大人しく遊び始めた姿を見て、ほっと一安心した蘭

自分達がこうしている間にも、コナンが危険な目にあっているかも知れない……

そう思うと気が気ではない蘭

それは全員、同じ気持ちだった

「眼鏡のガキんちよなら大丈夫だって、蘭。危険な場所に行ける訳ないんだからさ」

「うん……、園子」

「解ってるんだけど、心配で……」

親友・園子に支えられながら、辛うじて笑ってはいる蘭だったが
放たれた言葉に言葉を失った

「ねえ、蘭、おば様は保護されてないの？」

「え……（そうだ、お母さん）」

慌てて蘭は父親を振り返ったが、その口から放たれた言葉は耐え
難いものだった

「英理の保護は無理なんだよ……」

（嘘……無理って……どうして？）

「どうして無理なのよ、おじ様」

「そうや、何で無理なん？」

まるで蘭の言葉を代弁するかの様に代わって小五郎を問い詰める
園子と和葉

口喧しく食って掛かる二人に、暫く沈黙していた小五郎だったが、
すぎる様な眼差しで見つめる蘭に吐き捨てる様に告げた

「ここに保護されてんのは、組織に狙われる可能性がある奴等だ、
英理がここにいねえって事は奴等に狙われる可能性はねえって事な
んだよ」

「それって……まさか……」

(嘘……「嘘だよね……お父さん？」

「……蘭？」

小五郎の言葉が理解出来ず首を傾げる園子

小五郎が言わんとする言葉が解った和葉は、茫然と佇んでいた

（そんな……何で、酷いやん）

「嘘だよね……お父さん？」

泣いてすがり付く愛娘に小五郎は沈痛な表情で言葉を絞り出した

「蘭……英理が病院で何て言ったか覚えてるか？」

「え……？」

「あの時、有希ちゃんとコナンを監視していた男達に、英理はこう言ったんだ」

「あの雰囲気は只者ではなさそうだから、深追いは危険だってな……」

墮ちても女王―Queen―

しんと静まり返った室内

狙撃を防ぐ為に全ての窓硝子に防弾硝子が施されたマンションで、一番危険な玄関近くの壁際に佇む小五郎は、少し離れた元太達に聞こえない様に告げた

「あの男達は非常識ではあったが、プロだけあって極普通の佇まいだった。それにも拘らず、英理は男達を危険な存在だと断言した。要するに知っていて遠ざけたって事だ、即ち……」

「英理は奴等の仲間だって事だ」

「嘘!!」

「嘘もくそもねえ。英理に秘密があるのは解っていた。その所為で帰って来れないって事も……。俺はこれでも英理の亭主だ、英理の事は俺が一番解ってんだよ？」

「大方、英理の弁護力を利用する為に脅して仲間にしたって所だ。英理の事は、ICPOに保護を頼んであるから心配すんな？」

半泣きになっている愛娘の髪をくしゃりと撫でて安心させる様は、
男手一つで蘭を育て上げた父親だった

「うん……、お父さん」

「英理はそんな女じゃねえ……。別居なんかしてなきや、こんな事
にはならなかった筈なんだ……。全部、俺がわりいんだよ」

「お父さん……」

何時になく苛立った表情の小五郎は、英理の帰りを待っていた

側にいてやれない

助けてやれない

もどかしさを感じながら

心中で……英理を想った

（帰って来い……英理）

——英理

小五郎の声が聞こえたのか……

弁護の依頼も組織の任務もなく、事務所で愛猫の五郎を抱いていた英理は、ふと外を見た

（……あなた？）

離れている夫と娘を想わなかった日等、ただの一日足りともない。時間があれば、夫の名前から名付けた五郎を抱いて溜め息を吐いていた

（……今回のジンの先走った行動で、何か動きがあるかも知れないわね。まあ、下っ派の私には関係ないけど……）

無理矢理に組織へ入れられた日から二年……、英理は組織が関係した事件の裁判の弁護を請け負い、組織が優位に立つ様にして来た

幸い殺人恐喝等の犯罪行為には手を染めていないが、組織にいる

以上は時間の問題だった

（私も何れは手を染める事になる、そうなれば弁護士失格ね……）

こう言う時の英理は誰も寄せ付けず、先を憂い人知れず溜め息を吐いて来た

そんな時に決まって、着信音が鳴り響く

>ぷるる<

味気のない携帯が鳴り響いて、頭をもたげる五郎の頭を撫でながら、心を落ち着かせる様に出る

「もしもし」

「「H i……」」

「あら、貴女から電話だなんて……何か用？」

電話の相手はジンに代わり多忙を極めるベルモット、あの方直々

のジン殺害の任務に伴いジンの身元調査をしていたベルモットは、
ついに突き止めていた

「「……あのジンがNOCだったわ」」

「!!（あのジンがNOCですって!!）」

（もし、それが事実だとしたら、黒に染まりきった優秀なNOCだ
わ）

（私をジンに叩き付けて、私が殺される間にジンを殺すって訳ね）

「あらそう、それがどうかして？」

「「ジンが憎くない？」」

「私をジンに叩き付けても無駄よ。任務は自分で何とかするのね…
…私はただの弁護士、銃は扱えなくてよ」

それだけ告げると、英理は通話を切った

「流石のベルモットも手こずっている様ね。ねえ、五郎ちゃん」

「みゃあ」

ごろごろと嬉しそうに喉を鳴らす五郎を撫でながら、自分を絡め取ろうと画策して来たベルモットに笑みを溢した

「貴女の策略には乗らないわよ……ベルモット」

持ち前の頭脳で回避した英理に救いの手が差し伸べられ様としていた……

小五郎のたつての頼みを受けてICPOと平次は英理の保護に乗り出した

「さて……、彼女をどうするか」

「せやな」

ICPOの捜査官と共に乗り込んだ車内で、英理を安全に救出する為、他ならぬ小五郎から依頼された平次は真剣に思案していた

そう簡単に妙案が浮かぶ筈もなく全員が思考の海へ潜り黙り込む
事数分後……

平次は、最も簡単な方法を選んだ

「せや、あんまり複雑にせんと、いっちゃん自然な方法で行こか」

「自然な方法とは、どんな方法だい？」

俯いて考え込んでいた頭をもたげて、後部座席にいる平次を振り返った捜査官達は、妃法律事務所を訪問しても一番怪しまれない方法を忘れていた

「そんな方法があるのか？」

プロの捜査官としての経験が邪魔するのか、捜査官達はどちらも見当が付かず首を傾げて見せる

そんな二人に対して、ど素人の平次は呆れた素振りも見せずに、何時もの口調で意味深に告げた

「何や、解らへんのか？」

「あるやないか、いっちゃん怪しまれへんええ方法が一個だけ……
妃はんは弁護士やろ？」

英理の職業を改めて聞き漸く気が付いた二人は、顔を見合わせて
同時に言葉を発した

「そうか!!」

「その手があったか!!」

二人のこの言葉に流石に呆れた平次は、つい、何時もの調子で言
って仕舞う

「何や、ほんまに解らへんかったんか？」

「ははは……、面目ない」

「どうやら難しく考え過ぎた様だ」

頭を搔いて苦笑する捜査官達の何とも言えない表情には、年と経

験の差は微塵も感じる事はなかった

その頃、英理に電話を切られたベルモットは全て予測していたのか、妖艶な笑みを浮かべていた

「流石、無敗神話の妃英理」

「一筋縄じゃ行かないわね……。強行手段を取ろうにも妃法律事務所は防弾硝子、変装が通用する程甘い女じゃないわ……」

仕事柄恨まれる事もある英理は事務所の窓硝子を防弾仕様にする等、それなりに対策は取っている英理の事務所にはベルモットと言えども、易々と侵入は出来なかった

「妃英理はエンジェルの母親……。他のメンバーを使うしかなさそうね？」

英理に見破られたベルモットの手に依って、ジンを恨んでいる血気盛んなメンバーが仕向けられたが、ジンを始めとする名うてのメンバーは一筋縄では行かない。

この為、組織の戦力は大幅にダウンする事になる……

試される絆―前編―

待ち焦がれたその日迄、後四日

その為に、組織との懸命な駆け引きが繰り広げられていた

予想外の伏兵、国際刑事警察機構

通称・ICPO

満を持して姿を表したICPOに、江戸川コナン、そして灰原哀の関係者は軒並み保護されて仕舞い、その上眠れる獅子を遂に起こした

獅子を抑えていた抑止力は失われ漆黒の片翼は獅子にもぎ取られ、包囲網が狭まり始めた

これ迄、忠実に組織を守り続けて来た凄腕のメンバー ジンを失ったその代償は大きく、漆黒のベールに覆われて来た黒の組織の土台は大きく揺らぎ始めた

「『流石に手こずっている様だね、ベルモット』」

「はい、一筋縄では行きませんわ」

「「相手はあのジンだ、無理もない使えるモノは全て使って構わないよ」」

「有り難う御座います、ボス」

「「しかし、あのジンがNOCだったとは……良く気が付いてくれたね、ベルモット」」

「ジンらしくありませんでしたから……」

「「……何としても始末しておくれ」」

「解りました」

裏切り者であり、NOCでもあったジンの抹殺を請け負ったベルモットだったが、手強すぎる相手だけに任務達成は容易ではなかった

「「何だかの情報機関が動いている様だが……、詳細は判ったのか

ね？」

「いえ、工藤優作に関わりの深い相手ですので、慎重に調べさせています。現在は、江戸川コナンの関係者を巧みに保護してます」

「「ふむ……」」

数秒間、思案した後

あの方は、事態を收拾するべくベルモットに新たな指令を下した

「「ナポレオンに連絡を取っておくれ」」

「解りました」

足掻き続ける漆黒の闇

黒の組織の命運は尽きていた

その先駆けとして、米連邦捜査局ではジェイムズ・ブラックの身柄拘束に向けて、徹底した身元調査が行われた

情報源がICPOであった事から、上層部では信憑性があると判断したのだ

「ジョディさん……」

「大丈夫よ、キャメル」

ショックを受けているジョディを気遣い声を掛けるキャメル

ジョディに取っては親代わりの存在であるジェイムズ・ブラックがNOCだった事は、ジョディに多大なショックを与えた……だが

ジョディは生き証人、組織の残酷さは身を以て知っている数少ない人間、直ぐに冷静になり矛盾点を指摘した

「でもキャメル、ジェイムズはどうして私の正体や水無怜奈の存在を組織側に報告しなかったのかしら？」

「ええ、そこが不可解ですね……。赤井さんもNOCとして送り込んだ訳ですし、組織にとって厄介な存在であるコナン君と少女の存在、矛盾が多過ぎます」

ジョディが指摘した矛盾点に同意してキャメルが掲げた最たる矛盾点、ジョディもまたそこを疑問に思っていた

「そうね、ジェイムズが組織側のNOCならそこがおかしいのよ。組織にとって不利になる事を何故報告しなかったのか。まるで、同姓同名の人間がいるとしか思えないわ」

「もしくは誰かを人質に捕られているとか……」

「人質……、奴等なら有り得る話だわ。彼女だって人質同然だったんだもの」

「ええ」

互いに視線を絡め合わせた後、ほぼ同時に頷くとキャメルは再び走り去っていった

「報告して来ます」

「お願い、もし脅されているのなら……拘束は避けなければならな
いわ」

「はい」

そうであって欲しい……

心からそう願いながらジョディは、病室内で話されている会話を耳を澄ませた

（盗み聞きしたくはないけど……、一つでも情報は欲しいの。ごめんなさいね、クールキッド）

そうして聞こえて来た会話……ジェイムズ・ブラックがあの方の奥方の義兄である事実だった

（何ですって！！ 義兄！！）

（なら……何故報告しないの？）

（義理の弟を助けるのなら何故！！）

ジェイムズ・ブラックの矛盾過ぎる事実ジョディの脳裏には更

なる疑問が沸き上がった

（まさか……取り戻したい？）

研究施設に保管されている義妹の遺体を安らかに眠らせたいのではないのか？

義弟の手から取り戻したいのではないのか？

ジョディが知る情に厚いジェイムズなら有り得ない話ではないと判断した

いや、何かの間違いであって欲しい……その思いが、一つの仮説を立てたのかもしれない

（部下の娘である私を保護しながら報告しなかったジェイムズなら、義妹を取り戻したい、シェリーと呼ばれるあの茶髪の娘があの方の娘ならば、忘れ形見を守る為に協力している可能性も否定出来ない）

「……こう仮定すると、辻褄が合うわね」

ぽつりとジョディが呟いた瞬間にコナンがひよっこり顔を出す

完全に思考の海に潜って仕舞ったジョディは、コナンが扉の隙間から顔を出している事に気付いていなかった様だ

「何が辻褄が合うの？」

「え……あ、コナン君!!」

驚いてコナンを見下ろすジョディを見上げて、コナンは再度首を傾げて問い掛けた

「僕達の話聞いてて、何か思い付いた？」

「ええ、ごめんなさいね。考えてみると矛盾点が出て来たのよ」

「良いよ、それより矛盾点って？」

病室内でICPOの情報を得ていたコナンだったが、違和感を感じた

確かに事実なのかも知れない。だが、ICPOがもたらした情報

が、コナンが知る現実とあまりにも掛け離れていたからだ

その為、コナンはICPOとFBIの双方からの情報が欲しかった

「ジェイムズがNOCなら、どうして私やコナン君と茶髪の娘を報告しなかったのかと言うことよ。それに秀の組織へ潜入した時も報告してない筈よ」

「確かにそうだね……。この矛盾は組織にとってリスクが高いモノの筈だ。にも拘らず、ジェイムズさんは報告していない……」

顎に手を当てて考え込むコナンにジョディは、その胸の内を明かした

「私はね、ジェイムズが組織に人質を捕られていると思ってるの」

「人質!!」

「ええ、ジェイムズはあの方の奥方の義兄なんでしょう？」

「うん、そうだけど……」

「私が知るジェイムズは情に厚く、面倒見の良い、他人にも自分にも厳しい誠実な人なの」

「多くの捜査官から慕われるジェイムズが組織のNOCだとは思えない……、ある目的の為に潜り込んでいるとしたら、私には思えないのよ」

試される絆―後編―

抑揚のない静かな声で語る

ジョディ・サンテミリオン FBI捜査官

幼い頃にベルモットに父母を殺害され、証人保護プログラムで保護されて生きて来た

両親を殺害し猛火の中に投じたベルモットを……

組織を何時か壊滅させる為に、FBIに入れる事を条件に証人保護プログラムを受け入れたジョディ

親代わりの様な存在であるジェイムズが、組織側のNOCだとは到底思えなかったのである

「ジェイムズは義妹の遺体を、安らかに眠らせる為に、義妹の忘れ形見であるあの茶髪の女の子を守る為に、組織に潜り込んでいるとしか思えないのよ」

「ジェイムズ・ブラックはそう言う人なの」

(ジョディ先生……)

ジェイムズがNOCだったと言われても俄に信じられないジョディの願いの様な推理に、コナンは一つの可能性として否定はしなかった

「そうだね、確かにその方がジェイムズさんらしいね。ジェイムズさんって、心配で堪らないのに相手の意見を尊重して送り出してくれてたよね」

「ええ、秀の時も止めなかった。失うかも知れないと解ってはいいても、秀に何か考えがあると信じて送り出したんだと思うわ」

室内から顔を出したホーキンスを真っ直ぐに見据えると、ジョディは拳を握り込んできっぱりと言いつつ放った

「確かにジェイムズは組織のメンバーかも知れない。でも、ジェイムズ・ブラックと言う人間は、我々FBI捜査官の中で、誰よりも信義・勇気・保全を兼ね備えた信頼に値する捜査官、我々は彼を信じます」

数分の間、沈黙の時間が流れ

互いに真っ直ぐに見据える二人

報告から戻って来た所でジョディの決意を聞いたキャメルは、傍らのコナンと共に静かに見守った

（ジョディさん……）

この時、コナンは平次の存在を思い出していた。組織を壊滅させる為に身を呈して闇に染まった、親友の存在とジェイムズが存在が重なる

（服部……おめえと同じだな）

「解りました、我々の方でもその仮説に基づき捜査してみましょう。甘さは禁物だが、私も出来る事なら彼が白だと信じたい」

沈黙を破り言葉を発したホーキンスは表情を和らげると、甘いと思いつつも素直な心情を吐露した

「ええ……、助けられるものならば、何とかして助けたいんです。しかし、私達では警戒されていますので協力をお願いします」

「勿論です」

どちらからともなく手が差し伸べられ固い握手が交わされると、コナンに笑みが浮かんだ

（FBIとICPOが手を組んだか……、はたして吉と出るか凶と出るか……さあどうする、ジン）

ICPOとFBIが手を組んだ時に、報告に出ていたキャメルが交代に訪れた捜査官と共に戻って来た

「ジョディさん、交代です」

「キャメル、丁度良かったわ」

「どうかしたんですか？」

怪訝な顔を向けて来る三人に、ジョディはたった今得た情報を話す

「ICPOからの情報で、ジェームズがあの方の奥方の義兄だと言

う事が判ったのよ」

「「義兄!!」」

驚いて顔を見合わせる捜査官

これを聞いたキャメルはすかさず矛盾が確かなモノとなった疑問をぶつけた

「なら何故、ボスは報告しなかったんでしょうか？」

「そうですよ、ジョディさん」

「ボスがあの方の身内なら何故？」

矛盾極まりない事実

何故組織に報告しないのか？

コナン達の事を報告していたら、今回の様な事態にはならなかっただろう

コナンが感じていた違和感も、この点にあった

「もし、ジェイムズさんが組織に報告していたとしたら、僕は確実に捕まっていたか殺されていた筈だ」

「この日は避けられた筈の情報を、何故報告しなかったのか……。その答えは、最早一つしかない」

「ええ、私はね。ジェイムズは義妹の遺体を取り戻して安らかに眠らせたいんだと、そして忘れ形見である茶髪の娘を守る為だと思うの」

「確かに、その方がボスらしい」

「ああ」

「でも私達は警戒されているわ、そこでICPOの協力を得る事にしたの」

「そうか、未だ知られていない貴殿方なら調べられるかも知れない」

大きく頷くホーキンスは協力の意思を示し再捜査をする決断を下していた

「ジョディさんの仮説に基づいて再捜査します。顔が知られていない我々なら遠からず確証が取れるでしょう」

「宜しく願います」

「解りました。では中で詳しくお話ししましょう」

「貴方達は見張りをお願い」

「「解りました」」

キャメルを伴い病室に消えた二人は様々な情報を得た

この束の間の一時は、コナンにとっても有意義なモノとなり、事態は大きく前進する事になる

FBIとICPOの双方が持つ情報を交換し合い、コナンは本拠

地突入に向けて策を練り始めた

FBIが持っていた情報の中にはコナンが知らなかった事も数多く、多くの捜査官達を失いながらも数十年に及ぶ捜査の結晶に舌を巻いた

だが、コナンが驚いたのは……

——あの事実だった

「何ですって!!」

「そんな……馬鹿な事って……」

（ジンとウォッカがNOCだと!!）

ICPOが明かした衝撃の事実

コナンは元より、ジョディとキャメルも思いも寄らぬ情報に我が耳を疑った

「信じられないでしょうが事実なんですよ。彼は日系ロシア人で、日本人の母親から生まれましたが疎まれて出生届を出されず無国籍児として裏社会で育ったんです。そこで、偶然知り合った優作が、知り合いがいた公安に掛け合って戸籍を作成し、NOCとして潜入させたんです」

「要するに、元凶は父さんって訳か……あのくそ親父」

「新一君？」

「確かに、工藤さんがジンを潜入させなかったら、彼女も死ななかつたかも知れないわね」

「そうかも知れませんね……」

全ての元凶は優作だと解ると、コナンのこめかみに血管が浮き上がり周囲には苦笑が溢れた

「まあまあ、優作もここ迄するとは予測していなかっただろうからね？」

「……わあってるけど……覚えてろ!!」

傍らでけらけら笑い転げている有希子は、目覚めた優作の行く末等欠片程も心配していなかった

（優作ってば、知くらない♪）

闇に染まらぬ想い

「ここが妃法律事務所やな……」

英理が経営する妃法律事務所を見上げる平次は、英理を保護するべく堂々と正面から乗り込んで来た

「しかし……上手く行くのかい？」

「心配あらへんって、ほな行こか」

傍らに佇む平次の護衛&補佐役を仰せつかった捜査官達は、平次の背中を見つめながら心配そうにぽつりと呟いた

「本当に上手く行くのか？」

「さあな……。だが、平次君は西の高校生探偵でもあり、スピリタスに代わって任務をこなして来た。信じるしかあるまい」

「そうだな……」

緊張感の欠片もなく、意気揚々とマンションへ入って行く平次の後を追い、捜査官達は上着に取り付けた通信機に向かって声を出す

「これより中へ入る、全員スタンバイしてくれ」

「了解」

エレベーターで英理の事務所がある階へ昇り、ICPO捜査官と共に英理の元へ訪れた平次は躊躇いもなくベルを押す

チャイムが鳴って暫くすると、何時もの様に栗山が扉を開けた……

「妃はんいてるか？」

「え……高校生？」

（蘭さんのお友達かしら？）

平次達を訝しむ栗山等構わずに中へ入って行く平次

「あ……ちょっと？」

「済みません、お邪魔します」

「妃さんに大切なお話がありまして……」

「はい……」

平次と共に現れた二人の男に、気圧された栗山は従う様に後ろへ下がった

この間にも英理の元へ向かった平次は、案の定ノックもせずに入る

「邪魔すんで」

「服部君ね、何か用かしら？」

突然の来訪者に動揺した栗山の様子に、組織関連の訪問と悟った英理は若き探偵と捜査官を出迎えた

「……単刀直入に言わせて貰うで、一緒に来て貰おか」

平次と共に現れた見慣れぬ男達

英理は冷静に観察しながら牽制の言葉を放つ

「……依頼があるから無理ね」

「さっきの姉ちゃんにさせたらええ、一応弁護士なんやろ？」

（服部平次はスピリタスに代わって任務をこなして来た切れ者……、私は銃は扱えないし、見慣れない背後の男達、どうしようかしらね）

この事態をどう打開するか？

叡知な頭脳をフル回転して模索し始めた英理だったが、背後の男達の口から謝罪と素性が明かされた

「突然の来訪をお詫びします」

「我々はICPOの者です」

「ICPO……（ICPOですって……？）」

（服部君と一緒にいると言う事は……まさか）

突然のICPOの捜査官の来訪に、冷静を装いつつも驚きを隠せない英理に、予想外の言葉が紡がれた

「ご主人からの要請がありまして、妃さん……貴女を保護に伺いました」

「……え……主人から？」

（まさか、あの人は知らない筈よ）

最早仮面は外れ弁護士ではなく、毛利英理と言う一人の女でしかない英理

「はい、以前から貴女に秘密がある事は気付いておられた様です」

（そう……気付いてたのね、あなた）

会えば必ず互いに意地を張って喧嘩して仕舞う二人……

素直に慣れず、喧嘩する二人を止める愛娘・蘭の願いも虚しく喧嘩ばかりしている二人だったが、その想いが消えた訳ではない……

だからこそ、英理は帰れない

だからこそ、小五郎は気付いた

……英理の秘密に

「病院で貴女がとった行動に加え、最初に我々が毛利探偵やお嬢さんと一緒に貴女を保護しなかった為、貴女が組織のメンバーだと確信を持たれた様です」

「……そう、あれだけで疑惑を持つなんてあの人もやはり探偵ね？」

笑みを浮かべて小さく溜め息を吐いた英理の脳裏に、小五郎との懐かしい思い出の数々が過った。幼馴染みから夫婦へと絆を深めた二人は、本質的に互いを信頼し、愛娘・蘭を儲けた。自分の所為で刑事を辞める羽目になった時も、小五郎は自分を責める事はなく、別居した後は蘭を男手一つで育て上げた小五郎に感謝していた

（あなた……、私が困っている時は何時も助けてくれたわね）

自分が事件に巻き込まれた時は知恵を搾って無実を証明した事を、英理は忘れてはいなかった

自然と表情を和らげて、優しい笑みを浮かべる英理

捜査官は平次を迎えに行った際、英理の保護を頼み込んで小五郎の言葉を伝えた

「毛利探偵……酷く心配してましたよ？」

「え……？」

「英理は私利私欲の為に、組織のメンバーになる様な女じゃねえ。大方英理の弁護力に目を付けられて利用されたに過ぎねえんだよ」
何とか、貴女を助けてやって欲しい……と

「メンバーである貴女の保護を躊躇う我々に対し毛利探偵は”英理を一番解っているのはこの俺だ。俺は何があらうと英理を信じる”……そう言って退けたんですよ」

「負けましたよ?」

両手を掲げて苦笑する捜査官

「……あなた」

この瞬間……

英理の双眸から涙が溢れ落ちた

(五郎ちゃん……)

別居して以来、英理は女一人で生きて行く為に毅然として振る舞っていた

小五郎一筋で生きる為に……

(五郎ちゃん……あなた)

「妃さん……」

肩を震わせて啜り泣く英理の姿

平次は己の姿を見た気がした

（俺も他人事やあらへんな……）

（なあゝ和葉）

全ての蟠りが溶けた瞬間

美しく毅然とした無敗神話を誇る一法曹界の女王一妃英理ではなく、私立探偵毛利小五郎の妻・英理に戻った

「栗山さん、この後の弁護依頼は全てキャンセルして頂戴、貴女か他の弁護士の方を推薦してくれる？」

「は……はい？」

「依頼内容から私の弁護でなくても大丈夫な筈、私は暫く事務所を

留守にするから後をお願いね」

「解りました？」

「みゃあゝ」

手早く支度を整えて帰宅の途に付く英理は、先程から心配そうに寄り添って来る愛猫の五郎を抱き抱えると、笑顔で告げた

「さあゝ五郎ちゃん、パパの所に行きましょうね」

「みゃあ」

優しい表情で愛猫を五郎と呼ぶ英理の姿を見た、平次と捜査官達

名前の由来が夫小五郎であると、全員が気付いたのは言う迄もない

（猫の名前の由来はおっさんかい？）

女王の告白（前書き）

お気に入り登録して頂いて本当に有り難う御座います m
〔 m

この週末は書き貯め更新します

女王の告白

英理を乗せた車は嚴重にガードされ、小五郎と蘭達が保護されているマンションへ向かった

その方が英理の為だと言う平次の判断だ

二人の元へと向かう車内では、英理がメンバーとなった経緯を話していた

「私が組織のメンバーにされたのは二年前よ。私の弁護力に目を付けた組織は、私を絡め取る為に蘭を人質にとって脅して来たの……蘭を殺されたくなければ組織関連の弁護をしろ……と。でも、実際に蘭を人質にした訳ではなくて、不運な事故を装って襲わせたのよ」

沈痛な面持ちで言葉を紡ぎ続ける英理に対し、平次は再度、確認する様に改めて問い返した

「ほな、姉ちゃんは無関係言うんやな？」

「ええ、蘭は何も知らないわ」

平次の問いに英理がきっぱりと断言して退けると、平次は元より捜査官達はほっと安堵の溜め息を吐いた

「ほうか？」

「最悪の事態は避けられた様だ」

「ああ」

もし、毛利蘭が組織の人間だとすれば、コナンの精神的ダメージは計り知れない

それが良く解っている平次は……深い安堵の溜め息を吐いていた

「毛利の姉ちゃんもやのうして、ほんま良かったわ？」

（もし、毛利の姉ちゃんが組織の人間やったら、工藤は……）

自分に続き想い人も裏切っていたと解れば、コナンの精神は崩壊する

それが良く解っている平次は、母親として蘭を守り通した英理に感謝した

（流石、無敗神話を誇る一法曹界の女王一妃英理やな？）

（うちのくそ親父とは違って、組織と巧みに交渉しはって、今の地位と安全を勝ち取ったんやな……）

平次の傍らの座席に座る英理は無敗神話を誇る弁護士ではなく、一人の母親でしかなかった……

（さっきの妃はんとは大違いやな……）

メンバーである自分へ温かい眼差しを向ける平次に、英理はあの事実を伝えた

「私は下っ派のメンバーだから、多くの事は知らされていないわ。でも……ベルモットの話によれば、ジンはNOCらしいわ」

一瞬、静まり返った後

車内に平次の怒声が轟いた

「な……なんやて!!」

「あのジンがNOCや言うんか!!」

「んな訳があるかい!!」

「あの冷酷非道のジンがNOCやて?」

到底受け入れ難い事実

驚きのあまり、この事実を俄に信じられないでいる平次に対し、
英理はベルモットから聞いた言葉を伝えた

「ええ、そうベルモットが言って来たわ。ジンは一連の失態が原因でベルモットに殺害指令が出てるわ。当然ウォッカや、ジンに付いて行ったキャンティ・コルンも同様に殺害指令が出てるけど、名うてのメンバーが相手だけに、流石のベルモットも手こずっているらしいわね。私をジンに叩き付けて殺されている間に、ジンを殺すつもりだったらしいわ……」

「はん……、秘密主義の姉ちゃんが考えそうな事やな?」

「勿論、妃はんは断ったんやろ？」

「ええ、私は銃は扱えないもの」

「それもそうやな。あんたは弁護のメンバー、顔を見られる訳にはいかへんメンバーや。組織が銃を教えへんかったんもその所為や？」

あのジンがNOCだった……と言う真新しい事実には驚きはしたものの、平次は思考を掘り下げ始めた

「せやけど、ジンがNOCやて言うんなら……一体、何処のNOCなんや？ FBIやないし、ICPOでもあらへん、水無怜奈っちゅうアナウンサーの姉ちゃんの事から踏まえるとCIAでもあらへん……」

「妃はん、何処のNOCとは言ってへんかったんやな？」

「ええ、言わなかったわ」

「MI6・GRU・KGB……、ジンの容姿からするとこの辺りやけど……。欧州ではあまり活動してへんよって、先ずないやろな……」

…」

「確かにそうね……」

予想外の情報にも拘らず平次は、可能性の高い機関を的確に絞り込んでいった

「可能性が高いんは、活発に活動してるイギリスのMI6やけど…
…あの容姿で日本はないやろしの」

ぽつりと平次が溢した一言

捜査官達が苦笑しているのを、英理は見逃してはいなかった

（まさか……日本の公安調査庁？）

（あの容姿だから、日本を始めとする亜細亜諸国は自然と排除したけど、ジンを始めとするメンバーは日本語も堪能……不可能ではない？）

流石、弁護士を買われて組織の弁護士にと請われるだけあって、英理は少しずつ辿り着き始めた

「まさか……公安？」

「はあ？ 妃はん、幾らなんでもあの容姿で公安はないやろ？」

ぽつりと溢した英理の推理に、平次が難色を示すが……

「いや、正解だよ。平次君」

これ迄、平次と英理のやり取りを静観していた捜査官だったが、幾分笑いを堪えながら口を開いた

「なんやて？」

「ほな、ジンは公安のNOCや言うんかい！！」

運転席と助手席に座る捜査官に対し食って掛かる平次

傍らの英理は茫然としていた

「まさか……あのジンが？」

「そのまさかなんですよ、妃さん」

「まあ驚くのも無理はないよ」

「我々も初めて聞いた時は驚いたからね？」

ジンの正体を知った当時を思い出しているのか、顔を見合わせて苦笑する捜査官達は何処か懐かしそうだった

「先程の妃さんの推理通りでね、ジンは公安調査庁のNOCなんだよ」

「我々はNY支部の捜査官から聞いたんだが、ジンの本名は黒澤陣と言って歴とした日本人なんだ」

「はあ？」

開いた口が塞がらないとは正にこの事で、平次の口はぽかんと開いた儘だった

衝撃的な事実に驚き捲る平次を他所に、捜査官は知り得る事実を
淡々と語り続けた

「ジンはロシア人の父親と日本人の母親との間に出来た混血児でね、
迫害を恐れた為か財政的な理由かは定かではないが、ジンは母親に
捨てられて裏社会で育ったんだ。強盗や殺人等……、生きる為には
何でもして来たジンだったが……、ある日彼と出会ったんだ」

「彼って誰なんや!!」

「工藤優作氏だよ」

「工藤のおとんやて!!」

「工藤さんは当時、長官に頼まれて組織にNOCとして送り込む捜
査官を捜していて、ジンに黒澤陣と言う戸籍を与えて送り込んだん
だ」

動き出した齒車

闇の真実を知り驚くと同時に、親友を苦しめている全ての元凶が親友の父親だと知り複雑な胸中の儘、平次は英理を送り届けた

「お待っとさん、妃はん連れて来たで」

「英理!!」

平次の背後に遠慮がちに佇んでいる英理を視認した小五郎は……

「何突っ立ってんだ、さっさと入れ？」

耳を真っ赤に染め上げて英理に呼び掛ける、照れた小五郎の姿に蘭を始め全員が笑みを溢した

「もう、お父さんったら不器用なんだから？」

「「ふふ……」」

「おじちゃん真っ赤や」

「ほんと、らぶらぶじゃない」

「うるせえ?」

和葉や園子のからかいを受けて更に真っ赤になる小五郎の横では、蘭が英理に抱き着いていた

「お母さん?」

「蘭、ごめんね?」

「こうして帰って来てくれたから良いの♪」

嬉しそうな笑みを浮かべる蘭と不器用ながら英理を守る様に立つ小五郎の姿に、平次と捜査官達は安堵の笑みを浮かべた

「ほな……大人しゅうしとれよ、和葉」

「平次……氣い付けてな?」

「俺は心配要らへん？」

想いを通わせたばかりの平次に駆け寄り見送る和葉

「では毛利探偵」

「英理が世話になりました」

自分の頼みを聞いてくれた二人の捜査官に、小五郎は深々と頭を下げた

「いえ……、毛利探偵が言われた通りでしたからお氣になさらずに」

「妃さんは利用されていただけで、幸いな事に犯罪行為には手を染めていない様ですし、平次君同様の措置を取りますからご安心下さい」

「有り難う御座います」

「本当に有り難う御座いました……」

小五郎に続いて、傍らの英理が助け出してくれた捜査官達に対し、深々と頭を下げると、蘭もまた頭を下げた

「あの……母を助けて頂いて有り難う御座います?」

「何とか間に合った様で良かったよ」

「暫くはお母さんとここにいて下さい。上手く行けば数日中に終わりますから……」

「じゃあ、我々はこれで」

笑顔で後にしていく捜査官達、これから命懸けの闘いが始まろうとしていた

「みんな……無事だと良いね」

「そうだな」

再び固く閉ざされた扉の前に、小五郎と蘭が闘いに身を投じていく者達を案じていると……

「お母さん？」

怪訝な声を出す蘭へ振り向いた小五郎は、英理を見るなり英理の手の中にあるキャリングケースを手に取り蘭へ手渡す

「蘭、こいつを持ってる」

「え……うん？」

「みゃあ？みゃあ？」

キャリングケースの中から五郎の心配そうな声が聞こえた途端に、英理は足元から小五郎の腕の中へ崩れ落ちた

「お母さん？」

「おば様？」

「心配ねえ、張っていた気が切れただけだ？」

軽々と英理を抱え上げた小五郎は、自分に割り当てられた寝室へ運んで行った

「お母さん？」

「蘭、そつとしといてあげなよ」

「園子……」

英理を心配そうに見つめる蘭の元には、何時の間にか元太達が来ていた

「猫ちゃんだ!!」

「蘭さんのお母さん猫ですか？」

「そうよ、五郎って言うの」

キャリングケースを覗き込んで来る子供達の前にそつと置くと、歩美が早速扉を開けた

「わあ、可愛い!!」

「みゃあ？ みゃあ？」

「流石、妃弁護士の飼い猫だけあって、やっぱり気品がありますね」

「出て来ねえぞ」

突然、子供が現れた事で、混乱した五郎が蘭にしがみついたのは言う迄もない……

蘭や小五郎を始めとするコナンの関係者が軒並み姿を消した事は、警視庁の面々の耳にも入っていた

「目暮警部、毛利さんを始めとする関係者全員、姿を消しました！
」

「なんだと!!」

佐藤や高木以下、警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係の刑事が交代で護衛に付いていたにも拘らず、重要な情報を聞き逃したのは

優作に重点を置いて護衛していたが為だった

要するに警視庁の面々は体よく追い払われていたのだった

「まさか……黒尽くめの奴等に？」

「そうでない事を願うが、タイミングからいって無関係ではあるまい……」

「そうですね……」

沈痛な面持ちで無事を祈っていると、内線電話が鳴り響いた

「はい、目暮です。解りました……」

受話器を置いた目暮は主だった刑事の管理官室への集合を伝えた

「目暮警部、どうかされたんですか？」

「白鳥・佐藤・高木、管理官室へ集合だ」

「はい……」

「目暮警部、何かあったんですか？」

「かも知れん、行けば解るだろう」

「……はい」

目暮を先頭に管理官室へ赴いた馴染みの面々は扉を叩いた

「「入れ」」

「「失礼します……！！」」

呼び出された管理官室には……白馬警視總監と服部平蔵大阪府警本部長・遠山銀司郎大阪府警本部刑事部長・小田切敏郎刑事部長と言った歴々が待っていた

慌てて最敬礼する面々に対し、重々しく頷く白馬は徐に口を開いた

「わざわざ来て貰って済まない。今、君達が追っている黒尽くめの男達は……ある国際的な犯罪組織のメンバー達だ」

「は……犯罪組織……ですか？」

「そうだ、我々日本警察を始めとする各国の機関から、優秀な捜査官達がNOCとして活動して来たが、近々……組織を壊滅させるべく、一斉摘発を行う事となった」

「我々日本警察からは、警視庁・大阪府警・首都圏近郊の県警から射撃に優れた者、頭の切れる者・独身者を中心に突入隊を結成し、FBI・CIA・ICPO・公安調査庁と共に国際犯罪組織―メネラーオス―を壊滅させるべく尽力する」

「目暮、松本と共に人員を選出し準備に取り掛かれ」

「はっ!!」

白馬の命令に最敬礼して答える目暮

白馬は視線を白鳥に向けると、既に実行されている作戦の一部を伝える

「工藤新一君及び江戸川コナン君の関係者は、工藤優作氏の要請によりICPOに保護されている」

「白鳥君、君には作戦本部に於いて各指揮に当たって貰うが……」

「はい……」

「帝丹小学校小林澄子教諭が子供達と共に保護されている」

「!! 小林先生が？」

「狙われる可能性の高い子供達の引率の為だが、嚴重に保護されている為心配ないだろう」

「そうですか、解りました」

銀髪の異邦人

管理官室に於いて、想像を絶する現実を始めて知った目暮達は、何も知らなかった己を恥じていた

「……平和だと思っていた日本も、闇の部分があったと言う事だな」

「目暮警部……」

詳細の説明を受けて己を責める目暮

それもその筈、目暮がもう少しの間工藤新一を引き留めて置けば殺害される事はなかったのだ

「儂は儂を許さんぞ……」

「目暮、そう自分を責めるな」

「何れ程、悔やんでも彼は還らない。我々に出来る事は、司令塔であるコナン君を守り組織を壊滅させる事だ」

「はい……」

松本と小田切に諭され、自分を奮い立たせる目暮だったが……、小田切のあの言葉を聞き漏らさなかった

「小田切刑事部長……、コナン君が司令塔とは？」

「コナン君の正体は、工藤優作氏の次男でな。体が弱かった所為で様々な蔵書を読んで育った為か、推理力・観察眼・洞察力・知能指数が極めて高く、組織メネラーオスをここ迄追い詰めたのはコナン君なんだ」

「「ええ!!」」

「……コナン君が？」

驚く面々に重々しく頷く小田切の真剣な眼差しに目暮は事実だと悟ると同時に、過去に遭遇した事件の数々が脳裏を過る

（眠りの小五郎は……まさか？）

「兄である工藤新一君の遺志を受け継ぎ、組織を壊滅させる為に、

FBIに協力し関係者を影から守って来たコナン君を全面的に支援する」

「明日、組織メネラーオス壊滅作戦会議が都内某所に於いて、各機関と開く事になった。決戦は四日後だ」

「白鳥君、直ぐに全警察官の名簿を用意してくれ」

「はい!!」

「佐藤君と高木君の両名は、私の指揮下に入って活動して貰うが、これよりは命懸けの闘いになる……心して任務に当たってくれ」

「「はっ!!」」

回り始めた歯車……

行き着く先は破滅か……

——それとも興隆か

未来はコナンの手に委ねられた

この日を手繰り寄せたコナンに対し

この日を招き寄せたジン……

NOCとして巧みに招いたのか？

はたまた失態に依るモノか？

……真実を知るのはジン、唯一人

「あの男がジンか？」

「そうらしいな。潜り込んでいた魚塚が兄貴と呼んでいるが……、
胡散臭い奴等を連れて来た奴だ。実際の所どうだか？」

「疑問が残る所だな？」

「ああ？」

嘗て新人時代に勤めていた実績のあるウォッカとは違って、ジンへの風当たりはかなり強いモノだった

その為、ウォッカがジンと公安との橋渡しになっていた

「気にしないで下さい、兄貴」

「ああ……、解っている」

気にするなどってはいるが、ジンの機嫌が悪いのは明らかだった

「鬱陶しい奴等だね!!」

「俺……ぶち殺す」

「良いねえ、コルン」

苛つきが頂点に達しようとしている三人を、ウォッカは懸命に宥めていた

「落ち着け、キャンティ・コルン」

「煩いね、ウオッカ。厚待遇で迎え入れられたあんたとは、あたい等は違うんだ」

「ウオッカ……だけ、狡い」

「お……おい？」

組織時代からそれなりに上手く行っていた四人だったが、公安に戻って以降の関係はぎくしゃくしていた

ジンが二人を黙らせようと口を開き掛けた瞬間……

「おい、魚塚」

「はい!!」

絶妙のタイミングで、先輩格の同僚に呼ばれて駆け出すウオッカ

そんな弟分の姿を一瞥したジンは無言の儘踵を返した

「ふん……」

ウォツカが上司的存在となった今、胸糞悪い存在でしかないウォツカを一瞥し吐き捨てたキャンティはコルンと共にジンの後を追っていた

そんな三人を心配しながらも、ウォツカは魚塚三郎として華々しい再スタートを切ろうとしていた

先輩格の捜査官の元へ駆け寄ったウォツカは、姿勢を正して立つ

「例の話だな……」

「はい」

（兄貴……キャンティ・コルン）

例の話……、それは今ウォツカが一番案じて止まない、ジン・キャンティ・コルンの処遇に他ならなかった

「黒澤は確かに頭が切れる男だ。だが、実際に任務を遂行したのは魚塚……お前だと言う事もあり、上層部が難色示しているんだ」

「他の二人も調査の結果、退屈凌ぎに数多くの人命を奪って来たと判ってな。更生させるのは難しい……せめて皆と協調してくれたら良いんだがな？」

「そうですか……（兄貴……）」

表情を曇らせるウォッカを氣遣う先輩捜査官

この男もまた、嘗て過激団体へ潜入しNOCとして任務を為し遂げた事のある男だった

だからこそ、ジン・キャンティ・コルンを救いたいと願うウォッカの気持ちは、痛い程理解していた

「魚塚は長年行動を共にした黒澤を補佐したい所だろうが、今後は同じ部署と言う訳にはいかん……」

「では……別々の部署に？」

「恐らくそうなるだろう」

「上層部の判断なら仕方ありませんね……」

拳を握り込むウォッカ

命懸けの任務を為し遂げた後輩を気遣う捜査官は、不確定ながら仲間が担うであろう任務を告げた

「実はな……。今ある過激団体へ潜入させるかどうか、意見が分かれているんだ」

「過激団体……ですか？」

「ああ、ロシアを拠点に欧州全域で活発に活動している麻薬組織だ。最近、日本でも活動する様になって来ているんだ」

「じゃあ……その組織に？」

「ああ、組織メネラーオスの名うての構成員ならNOCとして活動出来ると……腕を見込んでいるらしい」

「確かにジンの兄貴なら……」

「ああ、俺もそう踏んでいる」

大きく頷く事で肯定し、ジン達には更生の余地があるとするが、
当のウォッカの顔色は冴えなかった

「この組織はかなりの危険を伴う上に、東洋人を毛嫌いしている。
その為、お前をジンと共にNOCとして送り込む事は出来ない」

「未だ本決定ではないが、時期に決まる筈だ。そのつもりでいてくれ」

「解りました」

離れ離れになる……

これ迄の様に側にいてやれないウォッカは、一際深い溜め息を吐くと新たに与えられた仕事に戻った

抜けない棘（前書き）

久し振りに各小説アクセス解析を覗いてみると……もうびっくり？

「礎－Cornerstone－」

七万アクセス&お気に入り登録&評価

「真実へのCountdown」

二十五万アクセス&お気に入り登録&評価

「虚像の追跡者－Pursuer－」

二十五万アクセス&お気に入り登録&評価

投稿当初は読んで貰えない程の駄作だったらどうしよう……何て事を思いながら投稿した小説達

こんなに沢山の皆様に閲覧&読んで頂いて感謝に絶えません
本当に有り難う御座いますm（　）m

今後も可能な限り0時〜遅れても二時更新を続けて行くつもりです。
行き詰まったら更新をお休みするかもですが、最後迄お付き合いして頂ければ幸いですm（　）m

本当に有り難う御座いました m (m

楼蘭

抜けない棘

＞組織名は……メネラーオス＜

その日、ICPOのホーキンス警部と、FBIのジョディそしてキャメルを交えて多くの情報を交換し合ったコナンは、眠れぬ夜を過ごしていた

（メネラーオス……か）

（組織名があの方と呼ばれるボスの名前を示しているらしいが……。メネラーオスはギリシャ神話の英雄だったな……。トロイア戦争に於いてギリシャ側の副大將を務めた伝説上のスパルタ王……。奥方は確か……！！）

（まさか……本当に？）

（遂に繋がった……灰原……）

（おめえ……知ってたのか？）

（おめえの事だ……どうせ、自分の所為だって責めていたんだろ？）

（まったく、おめえは悪くねえんだよ？）

（メネラーオス……か）

「良く考えたもんだぜ……」

遂に真実に辿り着いたコナンは漸く眠りに就いたのだった……

——翌朝

飛行機墜落事故から四日が経過

優作と有希子の怪我は順調に回復し、ICUにいた優作は意識は戻らないものの、経過も良好と言う事で有希子の病室に移る事となった

「母さん、幾らなんでも歩くのは未だ無理だって？」

傷口もすっかり塞がり見た目も体力もある程度回復した有希子は、心配そうに見つめるコナンの前で事故後初めて自分の足で立った

「大丈夫よく、ほら♪」

自分の足で立ち、ぴょんぴょんと飛び跳ねて回復をアピールする、子供の様な母親にコナンは溜め息を吐いた

「まったく、無理すんなよ？」

「うん、ありがと新ちゃん」

二人が事故に遭遇して以降……何かと心配するコナンを抱き締め、頬擦りする有希子……事ある毎に何かと憎まれ口を叩くコナンだが、今度の事故で正気を保てない程自分と優作を心配してくれている息子に、有希子は愛しさが込み上げた

「ごめんね……心配掛けて」

ぽつりとしんみりと呟く有希子

コナンもまた、素直な気持ちを呟いた

「……無事で良かった」

小さな紅葉の手でしがみ付いて有希子の無事を確認するコナン

今度の成田飛行機墜落事故は、コナンの心に深い傷を遺していた

「ここにいるわよ……、新ちゃん。昨夜は眠れたの？」

飛行機墜落事故後睡眠が取れず、コナンが優作の様子を見に行っている事に有希子は気付いていた

「少しな……」

「先生にお薬貰う？」

「いや良いよ。いざ、何かあった時にまずいからよ？」

「それもそうね……」

心配する有希子の腕の中から逃れ一際大きな欠伸と背伸びをするコナンの目元には、子供には到底似つかわしくない隈が出来ており

精神的疲労が著しい事が見てとれた

「警察病院へ転院したらゆっくり出来るだろうから？」

「何時、転院するの？」

有希子は、疲れた表情を見せる我が子を心配そうに見つめるが、夫優作が依然と目覚めない今は、コナンに頼らざるを得なかった

「随分と安定して来てっから……そうだな、父さんの容態次第って所か？」

「じゃあ、そろそろね」

「多分な」

すくりと立ち上がった有希子は突如蘭や英理が持って来た荷物を纏め始めた

「母さん？」

「だって今の内に纏めて置けば、万が一何かあった時に楽でしょ？」

「だからって、朝っぱらから？」

日本と世界各地に散らばる工藤邸を一人で切り盛りしているだけあって、手際よく手荷物を纏める有希子

（相変わらず、無駄のねえ動きだよな……母さんは）

久し振りに見た母親の背中に、コナンは自然と笑みが溢れた

（ほんと……無事で良かった……）

そう思った瞬間……

自然と体が動き有希子の背中へぽすんと抱き着いた

「新ちゃん？」

見た目は子供でも中身は高校生

甘える年じゃない事はコナンも良く解っていた

それでも、失うかも知れないと思った……あの喪失感は忘れない

（新ちゃん……）

突如背中にしがみ付いて震える我が子の姿に、有希子は我が子の心を深く深く傷付けた事を悟った

（ごめんね……）

深く……深く傷付いた息子の心を包み込む様に

有希子はただ……抱き締めた

「大丈夫よ、優作は必ず目覚めるわ」

暫くの間……

有希子はコナンの気がすむ迄、我が子を抱き締め続けた

何れ程、有希子が抱き締め様と優作が目覚めない今の現状では、
コナンの不安は晴れなかった

(……父さん)

この時、扉の外で護衛しているジョディとキャメルは、傷付いた
コナンを目の当たりにして胸を痛めていた

「ジョディさん……」

「……何とか目覚めて欲しいわね」

「はい」

「コナン君が何れ程優れた探偵であっても、未だ、父母の保護下で
成長過程にある子供ですから……」

「コナン君には、私の様な思いはして欲しくない同じ目には遭わせ
ない……絶対に」

「ジョディさん……」

組織メネラーオスを壊滅させる……ジョディはその為だけに生きていると言っても過言ではなかった

偶然、取引現場を目撃して仕舞ったが為に、命懸けの闘いに身を投じるコナン……若き探偵

危険な目に遭わせたくない……そう思いながらも、否が応でも、巻き込まれていく小さな名探偵を守る為に、ジョディはあらゆる手立てを打とうとしていた

「今日、行われる合同会議には、コナン君達は出席させるの？」

「いえ、ICPOのホーキンス警部とも相談した結果、各機関が信用出来ない訳ではないんですが、コナン君や服部君の顔を晒す事は極力避けた方がいい……と、その代わりに盗聴器を持ち込む事になりました。コナン君や服部君とは、各機関の信用出来るメンバーと会わせる予定です」

「それもそうね。工藤さんの知人がいる公安やICPOは兎も角として、水無怜奈のCIAは信用出来ないわ」

「ええ、現在の大統領は持病持ちの筈です。未知の薬物に魅入られて、コナン君や茶髪の娘を狙って来る可能性も否定出来ませんからね」

「念には念を入れた方が良いわね……、あの娘の様子は？」

「それが……、あの娘も阿笠さんも保護に応じ様としません」

「なんですって!!」

「自分達が一緒だと危険だからと……」

漆黒の焰

—— 米花町・阿笠邸

一心不乱に研究を続ける哀と、サポートを続ける阿笠を説得するべくFBI捜査官達はガードの合間を縫って阿笠邸を訪れていた

「阿笠さん、彼等とは別の場所で研究を続けられる場所を用意してありますから？」

「ここは住宅街ですし、近隣の方々にも被害が及び兼ねません？」

「避難した方がいいのは解っておるが、奴等は何をするか解らんしの。反って取り返しが付かなくなるんじゃないかなろうかと思うての。それに当の哀君が出て来ん事にはどうにも出来んし、儂等の覚悟は出来ておる」

「阿笠さん!!」

阿笠も近隣住民の安全を考えると避難した方がいいと解っていた

だが、例え避難したとしても、組織側は哀を炙り出す為に帝丹小

学校等の哀に関わりのある場所を爆破しようとする為、哀と阿笠は反って危険だと判断し避難しない事に決めていたのだ

「研究を続けている間は大丈夫じゃから、心配は要らんよ」

「拉致される可能性もあるんですよ!!」

「そうなれば、研究を長引かせる事も誤魔化す事も出来ないんですよ?」

懸命に説得する捜査官だったが阿笠は冷静に対応していた

「いや、今更それはないだろう。今になって哀君を拉致する位なら、もっと早くにしておるよ」

三十分に及ぶ説得にも拘わらず哀と阿笠の決意は揺るがなかった

深い溜め息を吐いて沈黙を破ったFBI捜査官は覚悟を決めた

「解りました、外出は極力避けて食料等の必要な物は我々が用意しますから、遠慮なく言って下さい?」

「済まんの」

「阿笠さんの頑固さには負けましたよ?」

「ははは……研究者と言う者は、こう言うモノじゃよ」

「どうやら、その様ですね?」

両手を掲げてギブアップの意思を示した捜査官は一礼して護衛に戻って行った

（ほんと済まんの）

昨夜から降り止まない雪で、一段と冷え込む通りに立たせる捜査官達を申し訳ないと思いながら、阿笠は屋内へと戻って行った

阿笠がすっかり冷えきった手を吐く息で暖めながら屋内へ戻ると、哀が入れたての珈琲を手に待っていた

「哀君」

「ごめんなさい……博士」

そう言つて哀は香ばしい香りが立ち上る珈琲を阿笠に差し出す

「有り難う哀君、温まるわい」

一口珈琲を含んで優しい笑みを浮かべた阿笠は、この数日間自分を責め続ける哀に言葉を紡いだ

「良いんじゃないよ。哀君の事がなくとも、僕も無関係ではないんじゃない」

「え？」

大きく目を見開いて驚く哀に、ソファーへ深く腰を下ろした阿笠は、ぽつりぽつりと話し始めた

「実はの……、哀君のお父さんの宮野君と優作君を会わせたのは……、何を隠そうこの僕なんじゃ」

「!!（博士が……?）」

驚きを隠せず茫然と佇んでいた哀は力なくソファーへ座り込むと、
阿笠の告白に耳を傾けた

「然程親しい訳ではなかったが、宮野君はシャーロック・ホームズ
の大ファンで……。その縁で、優作君と話が合うじやろうと紹介し
たんじゃよ」

「シャーロック・ホームズと言う共通の趣味を持っておった二人は
意気投合しての、新聞記事を酒の餌に良く推理合戦に花が咲いたも
んじゃ」

「その過程で、宮野君があゝの組織に誘われ研究を続ける事が出来る
……、それが判った儂は喜んだが、優作君は懸命に止めておった」

「え……じゃあ、工藤君のお父さんは知っていたと言うの？」

「どうやら、得体の知れない団体だとは知っておった様じゃ……。
何を研究しているのか解らない、謎に包まれた危険な団体だから、
止めておいた方がいい……とな。まさか、犯罪組織だとは思わんか
った様じゃがの……」

「……」

茫然と項垂れてソファアの背凭れに背中を預ける哀……

済まなそうに肩を落とした阿笠は時の海に埋もれた真実を語り始めた

「優作君の説得を受けた宮野君は悩んだ挙げ句、一度は断ろうとしたんじゃが……そんな時に、出逢って仕舞ったんじゃよ」

「え……出逢った？」

この時の阿笠は、普段より数段穏やかな眼差しで哀を見つめながら、秘話を明かした

「その得体の知れない研究をしている団体のリーダー格だった男の娘であるエレーナさんにの」

「お母さんに……」

一際優しく頷いた阿笠の口から語られた、両親の出逢いの秘話を、哀はほんの少しだけ嬉しそうに聞き入った

「宮野君の一目惚れじゃったそうじゃ。エレーナさんに一目惚れし

てしもうた宮野君は、その団体に入る事になり、遠からずエレーナさんと結婚したと優作君から聞いたよ」

「一度、優作君と会った事があるんじゃないが、物静かな綺麗な人じゃった……。哀君はエレーナさんにそっくりじゃよ」

そう言って、哀に差し出された一枚の写真には顔も知らぬ父母の笑顔だった

「……お父さん……お母さん」

「限られた世界での生活じゃったが、幸せじゃと言っておったよ……」

ここで一旦言葉を切った阿笠は、沈痛な面持ちで言葉を絞り出す

「宮野君とエレーナさんと義父とで研究を続けていた、APT-X4869が遂に完成し臨床実験段階に來た時、起こり得ない事故が三人を襲ったんじゃない」

「起こり得ない事故？」

「爆発事故が起こったんじょ……」

「!!」

拳を握り締めて語り始めた阿笠の声は、その続きを語るのを拒むかの様に微かに震えていた……

「博士……教えてくれる？」

「覚悟は出来てるから……」

「哀君……」

悲し気な眼差しで、話の続きを促す哀

阿笠は静かに語り始めた

「ラットの実験段階では、A P T X 4 8 6 9 は問題なく作用してあったそうでの。臨床実験で三人がA P T X 4 8 6 9 を服用するのに躊躇いはなかったそうじゃ。この実験が成功すればA P T X 4 8 6 9 は完成する……」

「じゃが……、この実験の成功が面白くない人物がいたんじゃ」

「誰……誰なの!!」

悲痛な眼差しを向ける阿笠

だから、哀は解って仕舞った

——両親を殺したのは誰なのか

哀の目には激しい憎悪が宿っていた

「……ジンね」

「そうじゃ……」

後悔先に立たず

……全ての元凶はジンだった

たった一人きりの姉を殺害されたばかりか、母親と祖父迄も殺害されていたと知って仕舞った哀の瞳には、激しい憎悪の火が灯り、その繊細な心は大きく揺れた

元凶であるジンに復讐する事は、亡き姉の遺志に反する事になる

……それは哀も良く解っていた

「ジン……、許さない……」

「哀君？」

膝の上で拳を握り込み

沸き上がる憎悪を懸命に抑える哀を案じ、心配そうな眼差しを向けてくる阿笠

「解ってる……博士、解ってるわ」

「ジンに復讐する事は、お姉ちゃんやお母さんの遺志に反する事になる。それは良く解ってるの……。でも……。でも……。！！許せない！！お母さんとお姉ちゃんをお祖父ちゃんを殺したジンを許せないの！！」

阿笠を真っ直ぐに見つめ、溢れ出る涙を流し、その想いの全てをぶつけてくる哀を止める権利は、誰にもなかった……

「哀君……」

「許さない……許さない、ジン！！」

何時かは言わなければならなかった、時の海に埋もれた真実

……だが

これ迄他人との関わりを多くは持たなかった哀は、この試練に飲み込まれようとしていた……

「見てなさい……ジン」

「私は私なりの方法で貴方に復讐するわ」

完全に愛娘が心配でならない、ただの父親でしかない阿笠

ただ哀が心配で心配でならなかった

哀が何をしようとしているのか……もう、気が気ではない

「一体何をする気なんじゃ、哀君？」

まさか……、馬鹿な事を……、そう思って仕舞う阿笠はパニック状態になりながら哀を問い質す

対面の席で狼狽えながら見守る阿笠に普段通りの笑みを浮かべると、心配性の阿笠を安心させる様に微笑んだ

「大丈夫よ、博士。馬鹿な事はしないから安心していいわ」

「なら良いが？」

「何をしようと言っくんじゃ？」

「……どうしてやろうかしらね。ふふふ、博士。さっきね、工藤君が電話して来たのよ」

突然、話題変換して不敵な笑みを浮かべた哀は、何か考えがあるのか……

珈琲を含みながら聞いたばかりの信じ難い情報を告げた

「新一から電話？」

突然の話題転換に付いて行けずに戸惑う阿笠

哀は苛ついた表情で吐き捨てた

「ええ……博士、あのジンはね……。公安調査庁のNOCだったそうよ」

「な……なんじゃと!!」

驚愕し、目を大きく見開く阿笠

「しかも優作さんがジンを見出して公安へ連れて行き、戸籍と名前を与えてNOCとして送り込んだ……これが真相らしいわ」

「……あの男がNOCじゃと？」

到底受け入れられない信じ難い事実を、阿笠はただ茫然と聞いた

哀は、まるで気持ちを整理する様に聞いたばかりの事実を語り続けた

「あまりに危険極まりない組織だった為に、不馴れな捜査官を送り込むと危険だと判断して、裏社会の人間をNOCとして見込んで送り込んだ……。ジンを見込んだ責任を感じていた優作さんは、随分と諫めたらしいけどNOCでいさせるのが精一杯で、一年前の件からは、もう歯止めが効かなかったって」

「……そう、項垂れた優作さんが有希子さんに溢していたそうよ」

「優作君だからこそ出来たんじゃ、他の者では無理じゃったろうの……怒らせるのが関の山じゃ」

ぽつり……と力なく呟く阿笠、ジンならば十分あり得る事だった
哀とて良く解っていた

様々な思惑が絡み合った結果、最悪の事態を迎えて仕舞った事……

悔いた優作が懸命に是正しようとした事……

哀にも阿笠にも……

そしてコナンにも手を取る様に解っていた

「工藤君もそう言っていたわ……起きたらたっぷりお仕置きするって、流石の彼も怒ってたけどね」

「ははは……、無理もないの？」

（気の毒じゃが、仕方ないの～？）

怒り狂ったコナンのお仕置き……想像に容易い阿笠は、顔を引き

攣らせながら渴いた笑みを溢した

「ねえ……博士、博士はどっちだと思う？」

「え……どっちとは何じゃ？」

いきなりどっち……と聞かれて訳が解らず首を傾げる阿笠

「ジンは魔王の仮面を被ったNOCか、NOCの仮面を被った魔王か……どっちだと思う？」

哀の問いに少し思案した阿笠は、率直な意見を述べる

「……儂は魔王じゃと思うがの、NOCとして片付けるには、些か度が過ぎとるんじゃないかなろうかの」

幾らNOCと言えどもやり過ぎだ……そう告げる阿笠

「私と工藤君も同意見よ」

静かな声で同意した哀は……、哀しげな笑みを浮かべると、その

思いを紡いだ

「ぺらっぺらの仮面を被った魔王がNOCを気取っても、所詮、魔物は魔物、光の中には出られないのよ……。魔物は漆黒の闇に朽ち果てるのが宿命……」

（哀君……）

組織時代を振り返る時の哀に、掛ける言葉が見付からない阿笠だった……

全ての元凶がジンだった……

全ての元凶が自分の父親だった

この事実を知ったコナンは……か・な・り怒っていたのだった

「あっんの……くそ親父……」

「覚えてろ……」

「新ちゃん？」

（確かにね。そもそも、優作があつた男を見出しさえしなければ、新ちゃんは幼児化しないで済んだもの……。もっと違った結果になっていた可能性が高いものね）

（ううん、ひょっとしたら……。これ程迄に凶悪化しなかったかも知れないわね……）

心中でそう思う有希子の目の前では、被害者である息子コナンが怒り狂っていた

「全部父さんの所為じゃねえかよ!!」

「父さんがジンを送り込まなきゃ、明美さんだって死なずに済んだかもしれねえじゃねえかよ!!」

「一体、どう責任取るってんだ!!」

（……?）

（大丈夫かしら、優作？）

（生きてれば良いけど？）

我が子の、怒りの凄まじさに、未だ目覚めぬ夫の身を案じる有希子だった

（優作ってば……目覚めない方が幸せかもしれない？）

「覚えてろ——！！」

一頻り、怒りをぶち撒けたコナンは……肩で息をしながらぼつりと呟いた

「一体……何時起きんだよ……」

「新ちゃん……」

未だ目覚めぬ偉大なる父・優作

懸命に保っている虚勢が……、脆くも崩れ去ろうとしていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8143y/>

礎-Cornerstone-

2012年1月13日01時33分発行